

高井田横穴群 II

——高井田土地区画整理事業に伴う——

1987年 3月

柏原市教育委員会

はしがき

高井田土地区画整理事業に伴う発掘調査は、本報告の刊行をもって、一応、終えることになりました。調査中は、保存問題に関して多数の批判が寄せられました。高井田横穴群に対する関心の強さを改めて感じると共に、文化財行政の難しさに頭を悩まし続ける毎日でした。保存問題に関しては、鳥坂寺僧房跡の埋没保存と公園化、安堂6支群3号墳石室の移設、計画変更による高井田横穴群保存区域の拡大等のささやかな成果を残すことができました。もちろん、これらは満足のできるものではありませんが、関係各位の努力によって実現したことを明記しておきたいと思います。

しかし、これで全てが終わったわけではありません。今後に残された課題が山積みされております。今回の調査で保存された遺跡をどのように後世に伝えていくかが大きな問題であります。柏原市では、史跡公園として保存、整備、公開していくために、史跡指定範囲の拡大、保存区域の公有地化、保存処理等の計画を進めています。市民にとって、憩いの場となり、歴史教育の場となるような公園化をめざしております。そのために、市民の方々の御理解と御協力をお願いしたいと思います。

昭和62年3月31日

柏原市教育委員会

例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が、昭和61年度に実施した柏原市高井田所在の高井田横穴群内における柏原市高井田土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査の報告書である。
2. 調査は、柏原市高井田土地区画整理組合（理事長・谷口俊春）の依頼に基づくものであり調査費用は全額、依頼者の負担によるものである。
3. 調査は、昭和61年4月9日から11月4日まで実施し、調査に伴う整理作業は、昭和62年3月31日まで実施した。
4. 調査、および整理作業は、柏原市教育委員会社会教育課 安村俊史が担当した。
5. 本書の編集・執筆・製図・写真は安村が担当し、鉄製品の執筆は近藤康司が担当した。
6. 本書で使用した方位は磁北、標高はT.P.である。なお、真北は磁北より約6°東に振っている。
7. 調査・整理の参加者は下記の通りである。

石田 博	竹下 賢	北野 重	桑野一幸	石田成年	寺川 欽
谷口京子	西村 威	松下 修	秋田大介	伊藤芳匡	稻岡俊彦
今中太郎	清瀬健二	近藤康司	西 一晃	仲井光代	岡西万里子
乃一敏恵	松成早苗	横田勢津子	吉居穂子		
東海アーナス株式会社		村本建設株式会社			

目 次

第1章 高井田横穴群をめぐって	
1. 調査の概要	1
2. 高井田横穴群の現状	5
第2章 調査成果	
1. 遺構	9
E号墳	9
112号墳	14
未完成横穴	19
土塀	22
土塙墓	24
古墓群	25
2. 遺物	58
E号墳	58
112号墳	63
未完成横穴	69
土塀	71
土塙墓	72
古墓群	73
包含層出土遺物	84
第3章 横穴の実測	87
第4章 まとめ	
1. 高井田横穴群の調査	107
2. 上地区画整理事業に伴う調査の総括	111

挿 図 日 次

図-1	調査地位置図	2	図-31	古墓-13実測図	38
図-2	調査地区全体図	3	図-32	古墓群平面図②	39
図-3	周辺の遺跡分布図	6	図-33	古墓-14実測図	41
図-4	高井田横穴群分布図	7	図-34	古墓-15実測図	42
図-5	E号墳実測図	11	図-35	古墓-16実測図	42
図-6	E号墳遺物出土状況	13	図-36	古墓群平面図③	43
図-7	112号墳実測図	15	図-37	古墓-17実測図	45
図-8	112号墳遺物出土状況	17	図-38	古墓-18実測図	46
図-9	112号墳奥壁工具痕拓影	18	図-39	古墓-19実測図	46
図-10	未完成横穴-1実測図	19	図-40	古墓-20実測図	47
図-11	未完成横穴-2実測図	20	図-41	古墓-21実測図	48
図-12	未完成横穴-3実測図	21	図-42	古墓-22実測図	48
図-13	土坑-1実測図	22	図-43	古墓群平面図④	49
図-14	上塙-1・2実測図	23	図-44	古墓-23実測図	51
図-15	土坑墓-1実測図	24	図-45	古墓-24実測図	52
図-16	上塙墓-2実測図	24	図-46	古墓-25実測図	53
図-17	古墓群全体図	25	図-47	古墓-26実測図	54
図-18	古墓-1実測図	26	図-48	古墓-27実測図	55
図-19	古墓群平面図①	27	図-49	古墓-28実測図	56
図-20	古墓-2実測図	30	図-50	古墓-29実測図	57
図-21	古墓-3実測図	31	図-51	E号墳出土遺物	59
図-22	古墓-4実測図	31	図-52	E号墳上層出土遺物	60
図-23	古墓-5実測図	32	図-53	E号墳出土土玉	61
図-24	古墓-6実測図	33	図-54	E号墳出土鉄製品	62
図-25	古墓-7実測図	34	図-55	E号墳出土鉄斧・砥石	62
図-26	古墓-8実測図	34	図-56	112号墳出土遺物	63
図-27	古墓-9実測図	35	図-57	112号墳出土耳環・ガラス玉	63
図-28	古墓-10実測図	35	図-58	112号墳出土鉄釘①	65
図-29	古墓-11実測図	36	図-59	112号墳出土鉄釘②	66
図-30	古墓-12実測図	37	図-60	112号墳出土鐵	67

図-61	未完成横穴・3出上埴輪	69	図-78	5号墳実測図	91
図-62	上埴-1出土埴輪	71	図-79	7号墳実測図	92
図-63	遺構内出土遺物	72	図-80	8号墳実測図	93
図-64	土塁墓-1・2出土耳環・刀子	72	図-81	10号墳実測図	94
図-65	古墓-1~4出土遺物	74	図-82	15号墳実測図	95
図-66	古墓5~11出土遺物	75	図-83	17号墳実測図	96
図-67	古墓-12~19出土遺物	77	図-84	18号墳実測図	97
図-68	古墓20~27・溝-1出土遺物	78	図-85	20号墳実測図	98
図-69	古墓出土玉類	80	図-86	21号墳実測図	99
図-70	古墓出土鉄製品①	81	図-87	22号墳実測図	100
図-71	古墓出土鉄製品②	82	図-88	23号墳実測図	101
図-72	包含層出土遺物	84	図-89	27a号墳実測図	102
図-73	包含層出土石鏡	85	図-90	27b号墳実測図	103
図-74	1号墳実測図	87	図-91	86号墳実測図	104
図-75	2号墳実測図	88	図-92	89号墳実測図	105
図-76	3号墳実測図	89	図-93	90号墳実測図	106
図-77	4号墳実測図	90	図-94	区画整理事業全体図	113

表 目 次

表 1	E号墳出土鉄釘觀察表	62
表-2	112号墳出土鉄釘觀察表	68
表 3	古墓出土鉄釘觀察表	83
表-4	横穴計測値一覧表	108
表 5	古墓一覧表	110

図 版 目 次

図版1	全景	図版5	E号墳
図版2	航空写真	図版6	E号墳
図版3	調査地区全景	図版7	E号墳
図版4	E号墳	図版8	E号墳

図版9	E号墳	図版38	古墓-9・10
図版10	E号墳	図版39	石敷き遺構
図版11	112号墳	図版40	古墓-11
図版12	112号墳	図版41	古墓-12
図版13	112号墳	図版42	古墓-13
図版14	112号墳	図版43	古墓-14
図版15	112号墳	図版44	古墓-14・15
図版16	112号墳	図版45	古墓-16・17
図版17	112号墳	図版46	古墓-18
図版18	112号墳	図版47	古墓-19
図版19	112号墳	図版48	古墓-20
図版20	未完成横穴-1・2	図版49	古墓-21・22
図版21	未完成横穴-2	図版50	古墓-22
図版22	未完成横穴-3	図版51	古墓-23
図版23	未完成横穴-3	図版52	古墓-24
図版24	土塀-1	図版53	古墓-25
図版25	土塀-1・2	図版54	古墓-26・27
図版26	土塀墓-1・2	図版55	古墓-27
図版27	古墓群	図版56	古墓-28・29
図版28	古墓-1	図版57	溝-1
図版29	古墓-2	図版58	E号墳出土遺物
図版30	古墓-3	図版59	E号墳出土遺物
図版31	古墓-3	図版60	112号墳出土物
図版32	古墓-4	図版61	未完成横穴・土塀・土塀墓・包含層 出土遺物
図版33	古墓-5	図版62	古墓群出土遺物
図版34	古墓-5	図版63	古墓群出土遺物
図版35	古墓-6	図版64	古墓群出土遺物
図版36	古墓-7	図版65	古墓群出土遺物
図版37	古墓-7・8	図版66	溝-1出土遺物・古墓群出土玉類

第1章 高井田横穴群をめぐって

1. 調査の概要

柏原市高井田上地区画整理事業に伴う発掘調査として、高井田遺跡第3次調査に引き続いで1986年4月9日から高井田川南側の発掘調査に着手した。調査範囲は切土予定地全域、調査面積は約18,000m²である。調査着手前から、区画整理事業計画において樹木保全地として保存される高井田横穴群の保存区域を拡大するよう必要としていたが、調査期間の制約があるため、調査に平行して協議を続けることにし、調査に着手した。

調査は、重機によって表土を掘削し、包含層を人手掘削する方法で進めた。しかし、調査範囲内には包含層はほとんど認められず、わずかに南斜面で発見された古墓群の周辺で厚さ50cm以下の包含層が確認されたのみであった。それ以外の範囲では、表土下で地山に至る。地山は調査地東側は花崗岩の岩盤、南側は花崗岩の風化土、中央から西側にかけて凝灰岩層となっており、層序は下層から花崗岩、花崗岩風化土、凝灰岩の順である。

調査の進行に伴い、4月23日に土塚墓-1を検出したが、それ以後、遺物の出土がほとんどみられない調査が続いた。そして5月31日に古墓-1・2が検出された。これまでの調査例から考えると、古墓が多数検出されることが予想されたため、慎重に調査を進め、古墓29基、土塚墓1基、土塚2基、墓道、溝を確認した。また、6月5日には調査地中央で天井の陥没した横穴を確認し、E号墳と仮称することにした。それ以後、未完成横穴や家形埴輪の発見などがあり、9月24日に調査を終了した。

その後、工事に伴う立会調査を続け、10月15日に調査地西端での工事中に横穴が発見された。横穴発見地付近は現状より約6mの切土となり、その切土工事によって横穴の奥壁に穴が開けられたものであった。横穴発見時には立ち会っていなかったが、区画整理組合から連絡を受け、現地を確認し、再び翌10月16日から横穴の調査に着手した。横穴は墓道が完全に埋没しているため、現況からは確認できなかった。しかし、横穴の北斜面に大阪文化財センターが1973年度に調査した際のトレチ跡が残っており、そのトレチで検出された東端の墓道がこの横穴に対応するものと考えられた。⁽¹⁾ そうであるならば、この横穴は112号墳、大阪府教育委員会の分布調査では、第4支群1号墳とされている横穴にあたる。⁽²⁾

112号墳の調査は10月22日まで実施し、設計変更によって保存できることになったため、11月4日に玄室内を土で埋め、調査を終了することにした。

今回の調査で発見されたE号墳と古墓群の保存を求めるが、これらの遺構が10m近い切土を予定している中央部分で検出されたため、保存は不可能となった。それと共に、樹木保全地の拡大を計り、1基でも多くの横穴を、少しでも良好な状態で残せるように再三にわたって協議

を重ねた。この点に関しては、区画整理組合もその重要性を認め、計画変更によって樹木保全地を拡大する案を8月に提出し、大阪府教育委員会との協議の結果、この案を最終決定することで合意に達した。なお、この間の詳細については、第4章で改めてまとめることにしたい。

また、この調査期間中に、高井田横穴群の現状を把握し、将来の保存、史跡公園としての活用において資料とするため、20基の横穴の実測を実施した。この20基の横穴は、史跡指定地とその周辺以外で開口している横穴の大部分にあたる。これらの横穴の実測図を第3章に掲載した。今後、保存方法を考えていくうえでの資料として有効に活用していきたいと考えている。

註

(1) 大阪文化財センター『大阪府柏原市高井田所在遺跡試掘調査報告書』1974

(2) 大阪府教育委員会『平尾山古墳群分布調査概要』1975

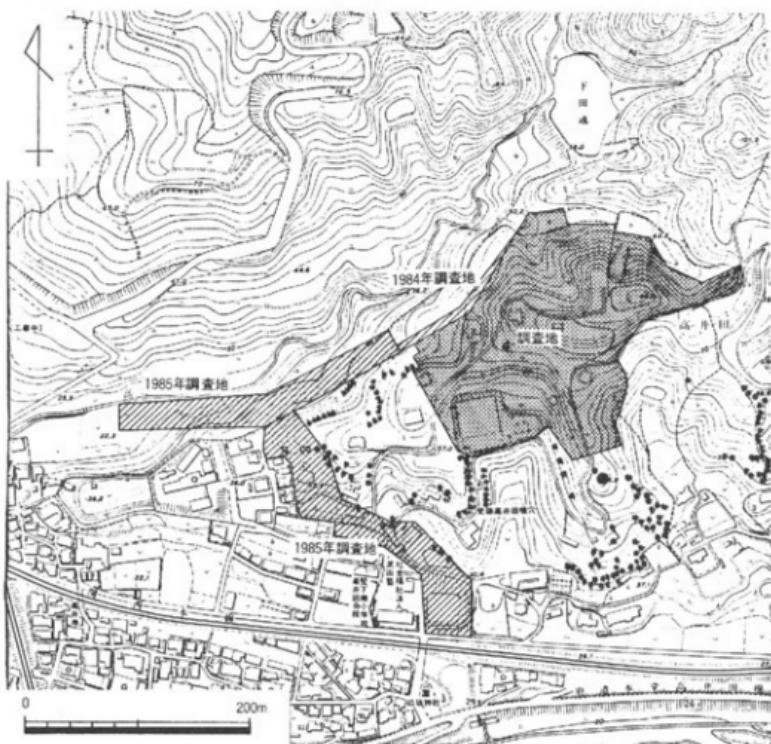


図-1 調査地位置図



図-2 調査地区全体図

2. 高井田横穴群の現状

高井田横穴群の研究史については『高井田横穴群』⁽¹⁾でまとめたので、重複を避け、ここでは高井田横穴群の現状について触れておきたい。

まず、横穴の総数についてであるが、1973年の大阪文化財センターの分布調査、および試掘調査によって、総数121基と報告されている。その後、1974年の大阪府教育委員会による分布調査で東方の府立修徳学院内、高井田川の北側の横穴が追加され、5支群147基と報告されて⁽²⁾いる。ただし、両調査では大阪文化財センターの27号墳（大阪府教育委員会第2支群33号墳）が分布図にはドットされているにもかかわらず、数え漏らしているため実際には148基となる。

そして、1985年の市道建設工事に伴う調査によって新たに4基が発見され、今回の調査で発見されたE号墳と共に新発見横穴は5基となる。また、調査中に既設家屋の解体によって発見された横穴が3基あり、これらは未調査である。更に、1986年12月に実施した府立修徳学院内の分布調査によって2基発見されたため、横穴の総数は158基となった。この中には、市道建設工事によって既に破壊された横穴や、高井田川北側の横穴のように確認できなかったものも含まれている。⁽³⁾しかし、横穴群の中心部分は全く調査されておらず、西辺の市道建設工事に伴う調査で4基が発見されたとことを考えると、更に多数の横穴が存在することは間違いない。⁽⁴⁾また、1917年の梅原末治氏の報文中の分布図に、現在では確認できない横穴が数基認められる。これらの諸事情を勘案すると、200基前後の総数になるものと思われる。

高井田横穴群における本格的な発掘調査は、1985・86年の両調査のみである。この2年間に調査された横穴は、部分的な調査も含めると17基になる。この中で、8基の横穴が工事によって破壊された。また、高井田川北側の1基と、府立修徳学院内の1基は、現在では存在しない。従って、現存する横穴は148基と報告しておきたい。

破壊された横穴以外にも、保存状態の著しく悪い横穴が見られる。南端の横穴群は畠地や墓地造成によって、かなり破壊されている。また、西方は凝灰岩層がもろく、砂岩状になっているため崩壊が著しい。比較的堅固な凝灰岩層に掘削されている史跡指定地付近の横穴も、崩壊が認められる。元米、凝灰岩はもろく、風化の早い岩質であるが、乾燥状態におかれると、その風化の速度は一層早められるようである。保存問題についても、第4章で詳しく述べることにしたい。

註

(1) 大阪文化財センター『大阪府柏原市高井田所在遺跡試掘調査報告書』1974

(2) 大阪府教育委員会『平尾山古墳群分布調査概要』1975

(3) 柏原市教育委員会『高井田横穴群』1986

(4) 柏原市教育委員会『高井田遺跡』1987

(5) 梅原末治「河内高井田に於ける横穴群について」『人類学雑誌』第31卷12号 1917

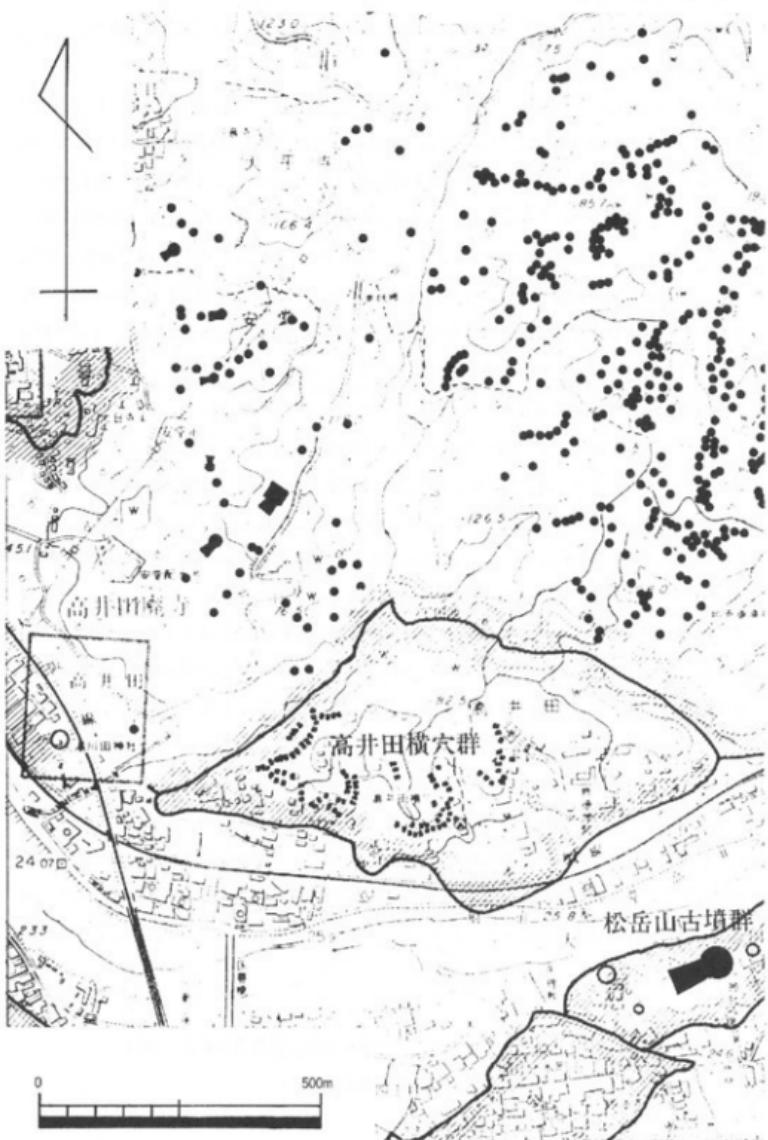
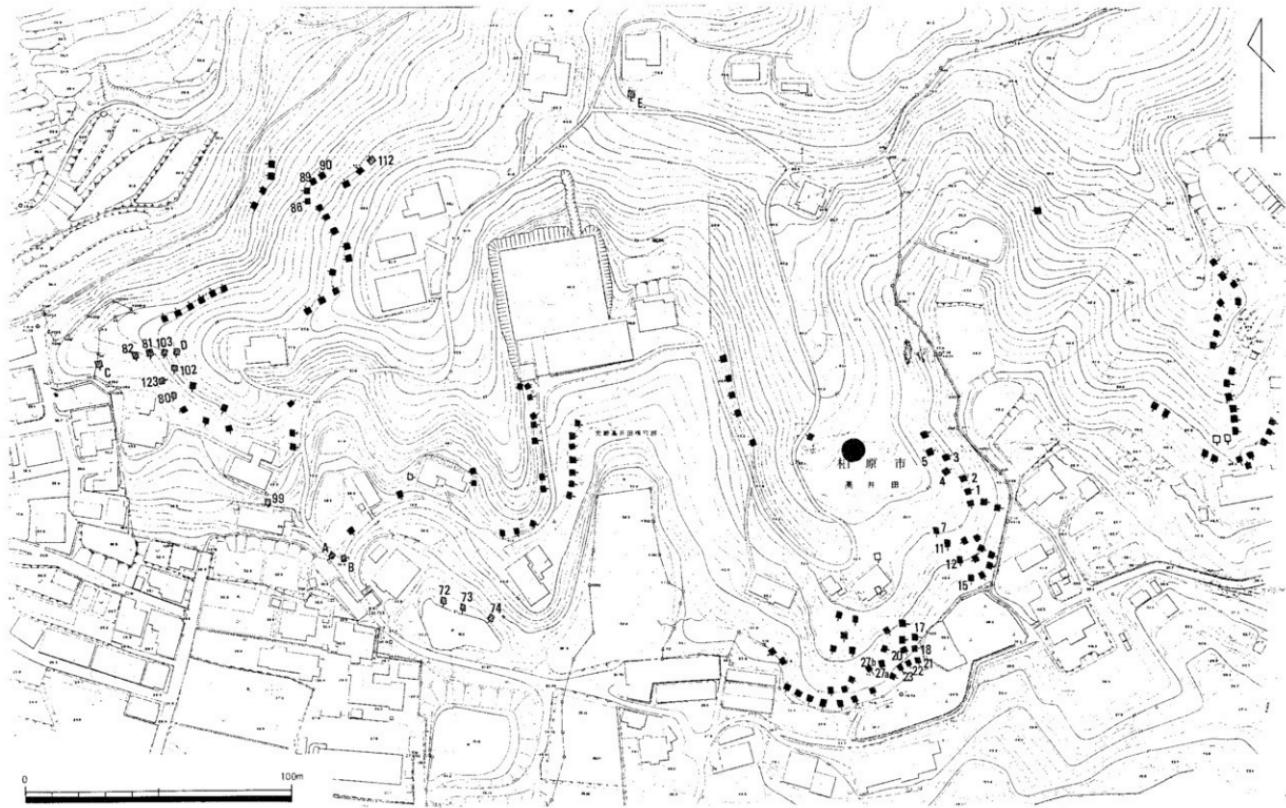


図-3 周辺の遺跡分布図



第2章 調査成 果

I. 遺構

調査によって検出された遺構は、横穴2基、未完成横穴3基、土塚4基、土塚墓2基、古墓29基、墓道1本、溝1条である。以下、順にその概要を記述していく。

E号墳⁽¹⁾

E号墳は調査地のほぼ中央、標高63m前後の地点で発見された。調査範囲内で確認された凝灰岩層の東端に位置し、玄室床面の奥壁部分は凝灰岩下層の花崗岩風化土に達している。E号墳のすぐ東側では、横穴墓道掘削途中で放棄されたと考えられる未完成横穴-1が検出されているが、西側は112号墳までの間に凝灰岩層が広がっているにもかかわらず、横穴は存在しなかった。E号墳は単独で存在しているのである。

E号墳周辺の凝灰岩層は、非常に脆弱である。凝灰岩質砂層と表現したほうが、むしろ適切であろう。そのため、E号墳も天井は崩落し、玄室壁面の崩壊も激しかった。しかし、墓道から墓道にかけては、ほぼ完存状態であった。

玄室は正方形に近い平面形を呈し、天井はドーム状であったと推測される。壁面と天井の境界は明瞭であるものの、その境界にテラス状の段はみられない。墓道は著しく東寄りに取り付き、右片袖式の形態になる。⁽²⁾ 墓道は短く、やはり壁面、天井の崩壊が認められる。墓道は墓門部分で最も広く、やや西寄りに振った後、再び東へ曲がりながら消滅している。

玄室長273cm、玄室幅298cm、推定玄室高160cm。玄室床面は、かなりの凹凸がみられるが、奥壁から玄門にかけて、かなり傾斜しており、比高差は38cmとなる。開口方向は、S-21°-Eである。

玄門の位置は、右側と左側で約20cmずれている。ここでは右側の位置を玄門の標準とする。墓道長は93cm、左壁がかなり崩れているが、墓道幅は約90cm、墓道高は約116cmと復元される墓門周囲の壁面と天井には、20~30cm幅の加工が施されている。また、墓門から墓道にかけて約90cmは天井を伴うが、それより南側の墓道には天井は見られない。これは、横穴掘削時の状況を留めていると思われる。

墓門部分での墓道幅は157cm、南へ向かうにつれて幅を減じ、最南端で80cmとなる。墓道総長は約760cmとなる。玄室で見られた床面の傾斜は、墓道から墓道にかけても続き、玄室奥壁部分と墓道南端との床面比高差は127cmとなる。これは、掘削手順による影響も考えられるが、玄室内の排水を意識したものと考えて間違いないであろう。なお、墓道が更にどのように続いているのかは、剖面等により、確認できなかった。

墓門付近には、閉塞石に使用されたと考えられる人頭大の石が、数個確認できた。遺物は、

玄室南半から墓道にかけて、かなり散乱した状態で出土しており、後世に激しく荒らされているようである。床面から出土した遺物は、土師器杯6点、壺4点、須恵器杯蓋1点、有蓋高杯蓋1点、高杯2点、脚付壺1点、壺1点、上玉100点以上である。しかし、須恵器長脚二段透高杯(14)と脚付壺(15)を除くと、残存状態は悪い。須恵器壺(16)は、その破片が玄室中央部から墓道にまで散在していた。

須恵器の形態から考えると、E丹墳は6世紀後葉頃に掘削、埋葬されたものと思える。須恵器小形高杯の脚部(13)は、7世紀前葉に下ると考えられるが、1点のみの出土であり、追跡か否か判断できない。一方、土師器は上層から出土している高杯(25)が7世紀代、床面出土の杯(4)が8世紀代と考えられるほかは、いずれも9世紀代の遺物と考えられる。横穴掘削時の埋葬に伴う遺物が渡道付近にかき出され、玄室床面から8～9世紀代の遺物が出土していることは注目される。しかし、これらの上器が埋葬に伴う遺物であるか否かは確認できなかった。東方の古墓群と時期的に重複することを考えると、その関係を無視できない遺物である。

土器以外の遺物として、100点以上の上玉があげられる。上玉は玄室中央よりやや東寄りに集中していた。また、鉄製品として、鎌1点、刀子2点、斧1点、鏡4点、釘10本以上があげられる。砥石も1点出土している。

土モヤや鐵鎌⁽⁴⁾①、刀子②・③の出土位置を考えると、玄室中央に1体の埋葬があったと推定される。しかし、この埋葬に伴うと考えられる木棺の棺釘は全く見出せない。釘は頭部の数から10本以上と考えられるが、いずれも土器と同様に玄門付近で集中して出土している。そのため、木棺の大きさなどは、復元不可能である。

板状の小型鉄斧⁽⁵⁾⑤は墓道上層から、砥石⁽⁶⁾⑥は玄門の床面よりやや浮いた状態で出土している。

玄室上層から出土した土師器杯・皿・壺(17～24)は、床面より約30～40cm上層の灰褐色土上面から出土している。床面出土の土師器と比較すると若干新しいと考えられるが、大きな時期差は考え難く、短期間の間に30～40cmの堆積があったものと考えられる。しかも、灰褐色土は奥壁から渡道への傾斜をもって堆積しており、奥壁、および天井の崩落による土砂堆積と考えられる。

一方、墓道から渡門にかけては黒褐色粘質土が堆積し、その上面で土師器皿(26・27)と瓦器楕(28～30)が出土している。13世紀後半代の遺物と考えられ、平尾山古墳群で普遍的に見られる中世における古墳再利用の一形態と思われる。時期も最も再利用の感んな時期に該当する。しかし、その再利用の実態が、埋葬に伴うものか、追善供養に伴うものか、あるいは何らかの祭祀、宗教儀礼に伴うものか、明らかにできた例は平尾山古墳群内では見られない。今回の例も、墓道上層から出土した遺物を指摘できるのみである。

黒褐色粘質土より上層に堆積している上層内からは遺物は出土していない。上層の堆積状況

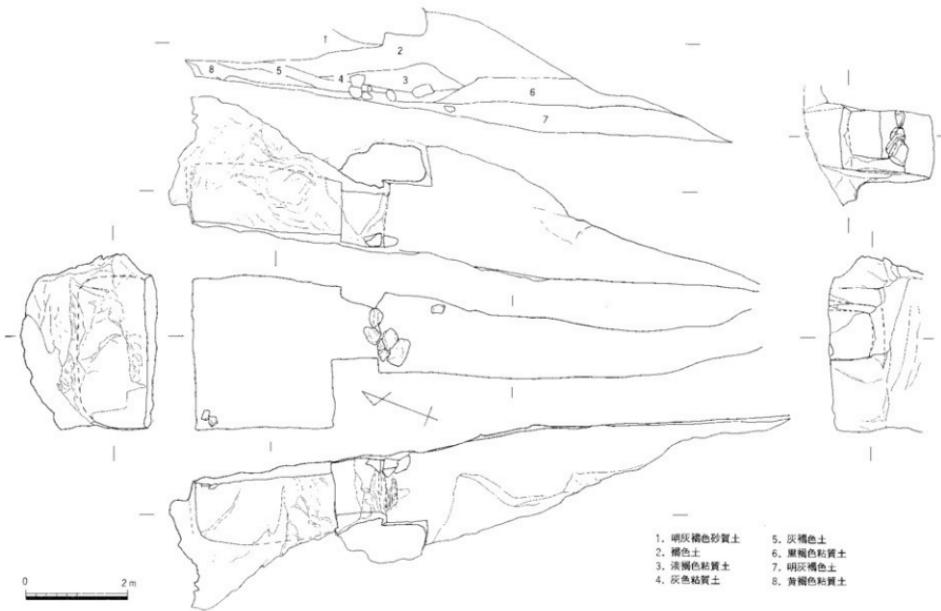


図-5 E号填実測図(レベル高63.5m)

からは、壁面や天井の崩壊が続き、墓道が完全に埋まった後、天井が崩落したものと判断できる。

このように、E号墳は後世にかなり荒らされているが、6世紀後葉に掘削、埋葬され、1回程度の追葬の可能性はあるが、追葬はあまり行なわれていない。その後、8世紀、9世紀、13世紀に、用途は不明であるが、再利用されており、天井が崩落、完全に埋没して現在に至ったとまとめられる。

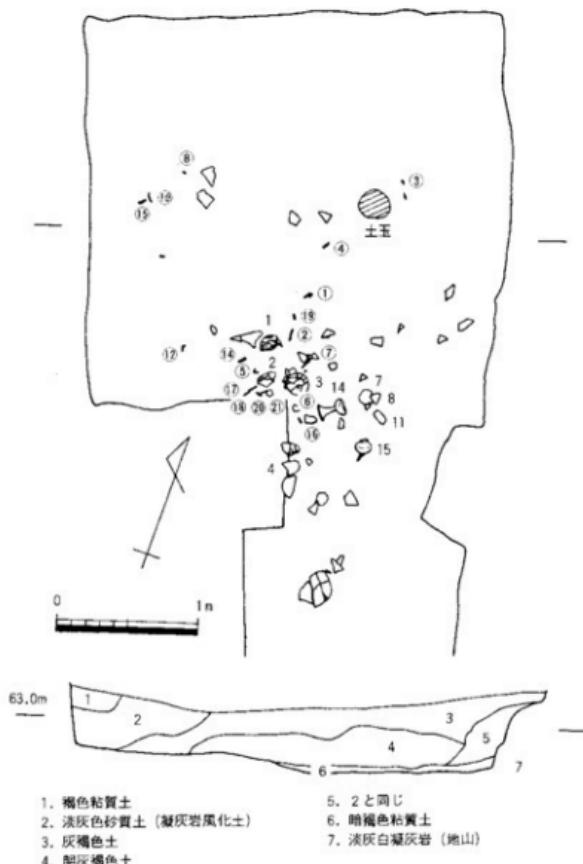


図-6 E号墳遺物出土状況

112号墳は、調査を終了した後、工事中に発見されたため、改めて調査を行った横穴である。重機による機械掘削中に、奥壁と右壁のなす隅角部の天井に穴が開いてしまった。開口部が調査範囲外の保存区域にあったために、調査で確認できなかったものである。発見当時、渓門は完全に土砂で埋まっていたものの、玄室内への土砂流入は少なく、また、完形の土器が露出していた。そのため、緊急に調査を実施する一方、保存できるように区画整理組合と協議をし、一部計画変更によって保存されることになった。しかし、ブロック擁壁の裏側に保存されることになり、現状のままでは崩壊の危険性があるため、玄室内に土砂を詰めて保存を計った。

この横穴は、1973年度の大坂文化財センターによる試掘調査で、B地区NO.1トレチで確認された112号墳に対応すると考えられる。112号墳は1トレチの東端部、地表下約4mで渓門から墓道にかけての一部が検出された。遺物は渓門付近から須恵器提瓶、器台が出土しているようである。⁽⁶⁾

112号墳は、壁面が部分的に剥落しているものの、極めて良好な保存状態であった。調査は墓道中央部から玄室にかけて実施し、渓門から墓道にかけては保存区域内にあり、将来的に調査も可能であるため未調査である。

玄室平面形は縦長の長方形を呈し、天井はドーム状をなし、壁面と天井の境界には明瞭な段がみられる。開口方向は、N-65°-Wである。

玄室長337cm、玄室幅284cm、玄室高170cm。奥壁中央部分でやや外方へ張り出しが、他の壁面はほぼ直線をなし、隅角部も直角に近く均整のとれた平面形態である。しかし、玄門部の位置が左右で13cmずれており、渓門でも15cm前後ずれているようである。玄室高は、ほぼ平均的な高さである。

壁面は、やや内側へ迫り出している。壁面と天井の境界には10~20cm幅の段が四周にめぐるこの段の角は幅2cm前後の面取りが施されている。このような面取りを施す例は、他の横穴にも多數見られ、脆弱な凝灰岩に対して角が崩れることを防ぐためになされたものと考えられる。

玄門の上部には、高さ24cm、幅108cmの平坦面が造り出されている。平坦面の上辺は玄門上辺と同様の彎曲を示す。壁面四周の段は、この平坦面で終わっている。

墓道は玄室のほぼ中央に取り付き、天井の彎曲は弱い。玄門での墓道幅は112cmであり、渓門へ向かってやや開いていると思われる。推定墓道長は164cm。中央での墓道高133cmである。玄門や渓門の角部にも面取りが施されている。渓道床面には浅い溝がみられた。幅は20cm前後で玄門から渓門へ向かってのびているが、深さは3cm前後であり、排水溝か否か不明である。なお、玄室から渓道へかけての床面比高差は、ほとんど見られない。

墓道は埋没しているため明らかでないが、渓門部での墓道幅は165cm前後と推定される。また、渓門上部にも平坦面が造り出されている。

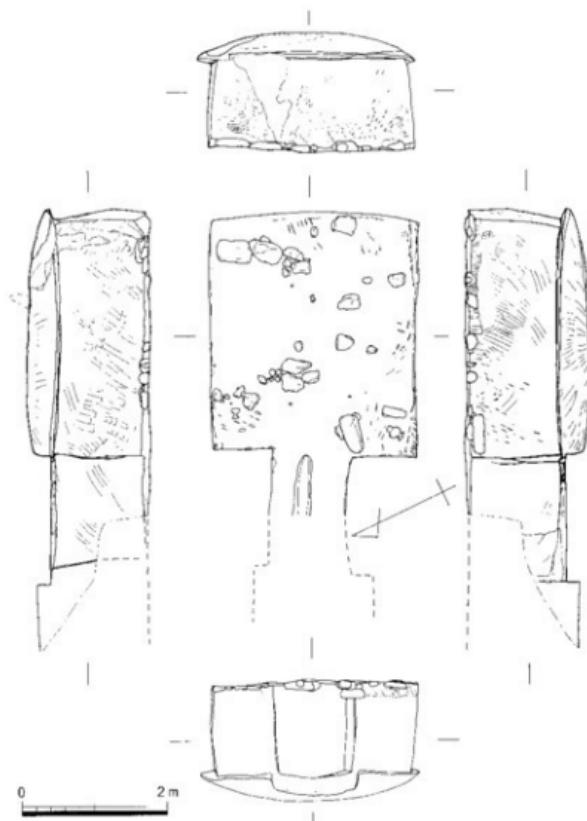


図-7 112号墳実測図(レベル高57.0m)

玄室内の状況からは、後世の再利用や、顯著な盗掘は考え難い。しかし、遺物、特に釘の出土位置を見ると、原位置にあるとは考えられない。かなり移動されているようである。

耳環が3対出土していることから、3体以上の埋葬があったことは確実であろう。左壁際の玄門近くで出土した銀環(8・9)は、22cmの間隔で出土しており、ほぼ原位置にあるものと考えられる。同様に右壁際の玄門近くで出土した耳環(10・11)も、ほぼ原位置を保っていると考えられる。ところが、銀環(6・7)は玄門近くと奥壁近くでそれぞれ出土している。両銀環は1対をなさない可能性もあるが、8・9と共に、ほぼ同じ形同大であり対になるものと考えられる。出土状況からは、奥壁近くにあった銀環(6)が、搔き出されたものと考えられる。耳環の出土状況からは、奥壁に沿って1体、左右両壁に沿って北頭位の埋葬がそれぞれ1体と考えられる。

土器は、比較的良好な状態で残存していたが、出土点数は少ない。左壁際の玄門近くで土師器把手付椀(2)と須恵器脚付壺(5)が出土している。いずれも、椀の把手部分を除いて完形である。把手付椀は、縦長の花崗岩の下から正立して出土しており、脚付壺は倒れた状態で出土した。左壁に沿った埋葬に伴う土器と考えられる。

土師器小型壺(1)と土師器高杯(3)は、耳環(10・11)の近くで出土している。小型壺は数点の破片となって出土しており、完形の高杯は倒れた状態で出土している。この2点の土器は、右壁に沿った埋葬に伴う土器と考えられる。いずれも、埋葬者の頭部近くに副葬された土器と考えられるものである。

須恵器壺(4)は、羨道の流入土上で倒れた状態で出土した。これは、後世に置かれたものと考えられる。この5点の土器以外には流入土内から少量の土師器や埴輪片が出土しているのみである。

鏡、鉄釘は床面全体から多数出土している。特に奥壁近くで集中して見られる。これらの遺物以外に、玄室ほぼ中央でガラス玉が1点出土している。

また、床面には人頭大の自然石が多数見られる。棺台として使用された可能性があるが、閉塞石か転落したことと考えられる。

出土遺物からは、6世紀後葉～7世紀初頭の年代が考えられる。しかし、初葬と考えられる奥壁沿いの埋葬に伴う土器が出土しておらず、横穴の掘削は更に遅ると考えられる。横穴の形態は高井出横穴群の中では古い形態であり、その形態からは6世紀中葉～後葉の年代が考えられ、初葬はその時期であると思われる。銀環(6)の出土位置から考えると、奥壁沿いの埋葬に伴う土器が櫛き出されている可能性がある。鏡、釘の出土点数から奥壁付近に2棺の埋葬があったことも考えられ、初葬に伴う副葬品の櫛き出しは追葬時に行われた可能性があることを指摘しておきたい。また、左壁と右壁の埋葬の前後関係は決め難いが、土器、耳環から左壁沿いの埋葬が先行するのではないかと思われる。

以上の調査成果から、112号墳の掘削は6世紀中葉～後葉、埋葬は3～4体で、奥壁沿い、左壁沿い、右壁沿いの順に「コ」の字型に埋葬され、その後、再び奥壁沿いに埋葬が行なわれている可能性がある。横穴自体は北西に開口するが、埋葬頭位は北を意識しているようである。

最後に、壁面の工具痕について触れておきたい。壁面、天井、および玄室床面の周囲には、工具痕が顕著に残る。壁面の工具痕は、基本的には右上から左下への工具痕であり、手斧状の工具を使用し、右利きの人が壁面の整形をしたことがわかる。奥壁について観察すると、北寄りの部分で刀幅15cm前後の平刃の痕跡が連続して残っている。南寄りの部分では、三角形状の深い工具痕がみられ、その観察から刀幅5cm前後の丸刃の工具痕と考えられる。この工具痕は左上から右下へ向かって残っている。南端には、刀幅10cm前後の工具痕が真下へ向かって残っている。拓影(図-9)は、奥壁南端部の下半のものである。

左壁の上方は、右上から左下への工具痕が、玄門側へ移動しながら施されている。床面近くは、壁面と床面との境界を明瞭にするために、縦方向の整形を再度行なっている。やはり玄門近くの工具痕は左上から右下へ向かっている。奥壁の場合も同様であったが、壁面に向かって右側は右利きの人にとって整形が困難であるため、左手に鋭い刃の工具をもって整形しているようである。

天井は、その中心部分から放射状に工具痕が残っている。

横穴の掘削に使用された工具は、少なくとも3種類以上あり、その目的によって使い分けられているようである。



図-8 112号墳遺物出土状況



图—9 112号填奥壁工具痕拓影

未完成横穴-1

横穴の墓道掘削途中で放棄されたと考えられる遺構が3箇所で確認できた。これを未完成横穴とする。

未完成横穴-1は、E号墳の東側約2.8mの位置で検出された。中軸はS-22°-Eとなり、E号墳にはほぼ一致する。南端から187cmの位置までは、緩やかな傾斜がみられるが、ほぼ平坦面をなす。それより北側は平均42°の傾斜面となり、この部分を掘削中に放棄されたと考えられる。

平坦面の横断面は、壁面がほぼ垂直になり、床面もやや丸味をおびるが平坦である。幅は80cm弱であり、これもE号墳の墓道南端の軸に一致する。

南端から187cmの位置までは、墓道としての形状を整えており、ほぼ完成している。また、方位、墓道幅から未完成横穴-1とE号墳の密接な関係が考えられる。埋土は褐色土上の單一層であり、遺物が出土地していないため、時期は不明である。

しかし、未完成横穴-1がまっすぐであるのに対して、E号墳の墓道南端は東へ反っている。この事実のみ考えると、未完成横穴-1がE号墳掘削に先立って掘り始められ、放棄された後にE号墳を掘削した可能性が考えられる。放棄された理由は明らかではないが、この付近は凝灰岩層が非常に薄く、未完成横穴-1をそのまま掘り進めると、花崗岩風化上に達し、玄室の掘削は不可能である。掘削開始後に、この事実に気付き、未完成横穴-1を放棄し、E号墳を改めて掘削したのではないかと思える。

未完成横穴-2

未完成横穴-2は未完成横穴-3と共に、調査地西方の112号墳が位置する北斜面で検出された。中軸はN-3°-Wで、ほぼ北向きになる。北端から340~350cm付近までは緩やかな傾斜面をなし、それより南側は約60°の傾斜面となる。幅は北端で約100cm、南端で約70cmとなる。

南端では、左右へ直径20cm前後、深さ20cm近くの円孔が穿たれている。目的は全く不明である。

埋土は傾斜に沿って、3層が堆積していた。下層は凝灰岩が風化した灰白色砂質土、中層は淡褐色土であり、黒斑を有する埴輪片が出土している。体部から頭部にかけてほぼ完形となる朝顔形埴輪(図61-1)の出土がみられる。また、土師器直口壺(図63-1)が出土している。

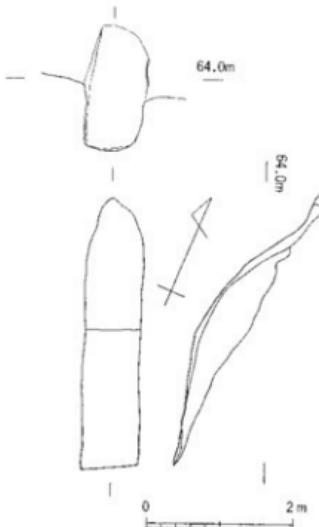


図-10 未完成横穴-1 実測図

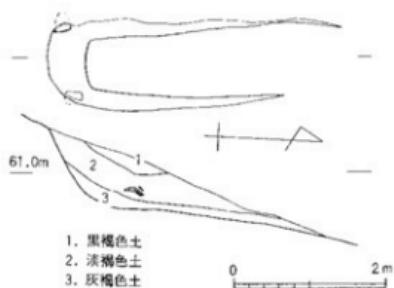


図-11 未完成横穴-2 実測図

未完成横穴-3

未完成横穴-3も北向きであり、中軸はN-5°-W前後となる。総延長は約930cm、その幅は40~70cmである。幅が少し狭すぎるようにも思えるが、墓道と考えてよいであろう。最も深い部分で約370cmの掘削が行われている。掘削土量は20m³近くに達すると思われる。

南面上半は、ほぼ垂直面をなしており、この部分から墓道の掘削を開始する予定であったと思われる。あらかじめ箇門の位置を決めて墓道の掘削が行なわれ、墓道床面を徐々に掘り下げながら、南面、すなわち箇門の上部を整形していたものと思える。

埋土は、下層が凝灰岩の風化した砂質土、もしくは凝灰岩のブロックであり、遺物はみられない。中層には淡褐色土が厚く堆積する。その上層には旧表土の黒褐色土、最近盛られたと考えられる灰白色砂質土と続く。淡褐色土と黒褐色土からは、黒斑を有する埴輪片が多数出土しており、7世紀前葉頃と思われる低い立ち上がりを有する須恵器杯身小片が出土している。淡褐色土は未完成横穴-2と同様に、ある時期に一度に埋められた土層と考えられる。

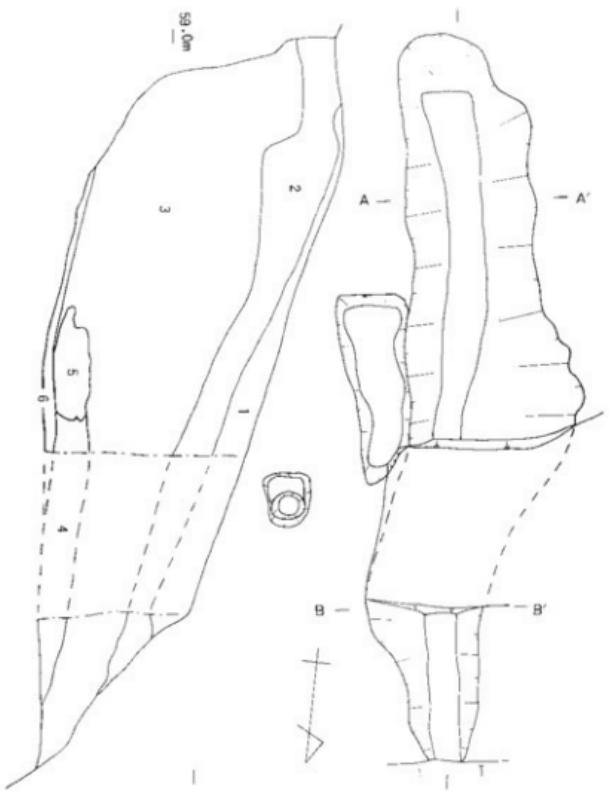
未完成横穴-3に接して東側に、長さ約260cm、幅約80cmの土壌状の遺構がみられる。更にその東側には、75cm×60cmの方形平面を呈する柱穴状の遺構がみられる。いずれも、その時期、性格は不明である。

未完成横穴-3は、墓道の掘削をほぼ終えており、墓道の掘削を開始する直前に放棄されたと考えられる。ここまで掘削するために要した労力は相当なものであったと推測されるが、それにもかかわらず放棄されている。落盤や湧水の可能性は全く考えられず、放棄された理由は自然条件以外の事情によるものであったと考えられる。

今回の調査区内で、掘削途中で放棄されたと考えられる横穴が3基発見された。高井田横穴群全体では、かなりの数に達する未完成横穴が存在すると考えられる。また、墓道のみを確認して横穴と考えているものの中に、未完成横穴が含まれている可能性も考えておかなければならぬ。なお、未完成横穴-3は埋没保存できたが、他の2基は保存できなかった。

未完成横穴-2が、如何なる理由で掘削途中に放棄されたのかは全く不明である。また、黒斑を有する埴輪が横穴に伴うとは考えられず、他に遺物の出土を見ないことから、その時期も不明である。

黒斑を有する埴輪は、未完成横穴-3からも多数出土しており、未完成横穴が埋められた際に混入したものと思われる。しかし、その埋められた時期に関しては全く不明と言わざるを得ない。



1. 灰白色砂質土
2. 黑褐色土
3. 淡褐色土
4. 淡灰色砂質土
5. 灰岩
6. 灰褐色粘質土

0 2m

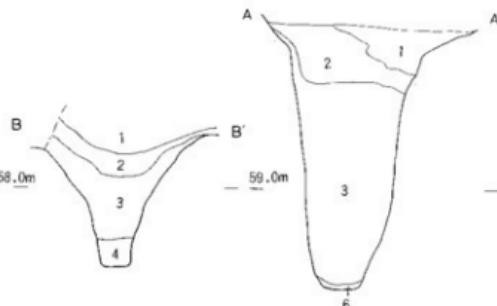


図-12 未完成横穴-3実測図

土塙-1

上塙-1は北東方向への緩傾斜面で検出され、凝灰岩の地山に掘り込まれている。長辺58cm、短辺34cmの鵝卵形平面を呈するが、西辺は弧状をなす。深さは約55cmである。

上塙内からは家形埴輪の一部が樹立状態で出土している。2間×2間の家形埴輪と考えられ、妻の一部と平の一部を残している。平面規模は約29cm×38cmと推定され、高床式、もしくは二階建の家である。各柱の間には方形の窓が開けられている。上塙-1のすぐ東側から、妻の屋根部分が出土しており、屋根は人母屋になると思われる。

埋土は、埴輪の裏込め土として白色シルトがみられ、暗黄褐色シルト、褐色粘質土の順に堆積する。他に遺物の出土は見られない。

出土状況から考えると、斜面上方からの力によって家形埴輪の他の破片は斜面下へ転落したものと考えられる。土塙-1の周囲には、弧状に幅30cm前後のテラスがめぐり、土塙-1に関連する施設かもしれない。しかし、土塙-1の西方、最も高い部分は地山の削平が著しく、土塙-1が古墳に伴うものかどうか全く不明である。また、土塙内に残存していた家形埴輪の下部が欠損しており、この家形埴輪が2次的に埋められた可能性も考えられる。

家形埴輪は野焼きであり、黒斑を有する埴輪群と同時期と考えられる。

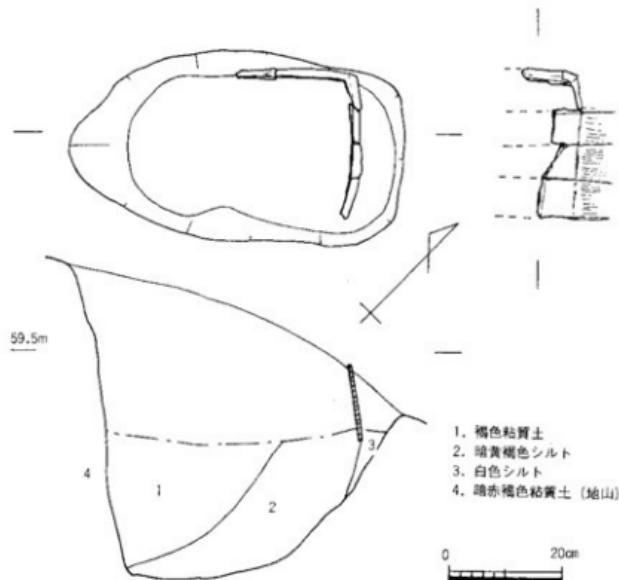


図-13 土塙-1 実測図

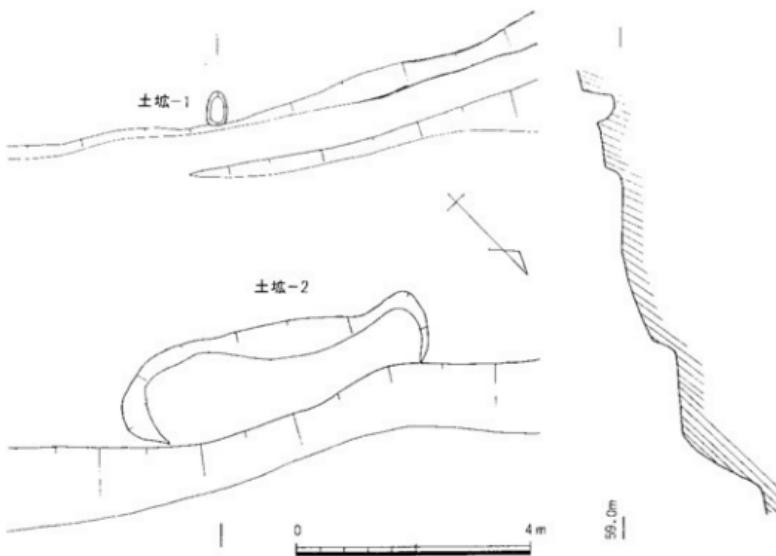


図 14 土塙-1・2 実測図

土塙-2

土塙-2は圓丸方形状を呈するが、北東側が削平されている。現存部分の規模は、160cm×540cm、深さは30～60cmである。

長辺の略際中央から須恵器顎頭帯（図63-2）が正立状態で出土している。また、調査着手前に上塙-2の近辺で表探した須恵器高杯部（図63-3）も、土塙-2に伴う遺物の可能性がある。6世紀後葉頃と考えられるが、上塙の性格は不明である。

土塙-3

上塙-3・4は古墓群の西端で検出された。

上塙-3は長径167cm、短径106cmの梢円形平面を呈し、深さは約40cmである。土師器、須恵器の小片が出土している。埋土は暗褐色土。

土塙-4

長径180cm、短径83cm、深さ30cmで不規形平面となる。北側に半月状の突出部が見られ、2基の土塙が切り合っているのかもしれない。埋土は暗褐色土。土師器、須恵器の小片が出土している。

土塙-3・4は、いずれも時期が不明である。古墓群に近い位置にあることから考えると、上塙墓の可能性も考えられるものである。

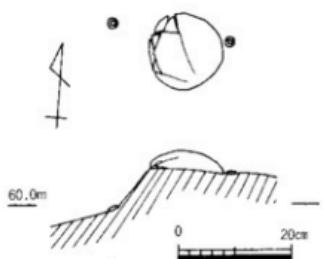


図-15 土塙墓-1 実測図

土塙墓-1

土塙墓-1は、調査地中央部で検出された。土塙墓と考えたが、墓壇は全く不明であり、倒立状態の土師器杯と金環1対が出土したのみである。

土師器杯（図63-4）は、表面の刻離が激しく、調整等は全く不明であるが、8世紀前葉頃の時期が考えられる。金環も破損が激しいか小形のものである。

出土状況からは、倒立状態の土師器杯を枕にした北頭位の埋葬が想定される。

土塙墓-2

土塙墓-2は、古墓-20・21の西側で検出された。長径195cm、短径75cmの綫長楕円形平面を呈し、深さは北端で31cm、南端で2cmを残す。底面は北から南へ向かって緩やかに傾斜して

おり、11cmの比高差がみられる。中軸の方位はN 9° -Eとなる。

埋土は灰褐色土の單一土で、焼土、炭、灰等は全く見られない。

底面の中央やや北寄りから、土師器杯が倒立状態で出土している。しかし、検出時には細片となっており、復元は不可能であった。8世紀代の杯と思われる。

また、底面よりやや浮いた状態で、刀子が出土している。切先と柄端を欠損しており、小形の刀子である。

その他には、土師器小片が出土しているのみで、時期を明確にできる遺物は見られなかった。また、七塙墓と考えたが、人骨も確認できておらず、積極的に墓とする根拠はない。土塙の形態、規模と周囲が墓域であるという理由による。

土塙墓-2が墓であるならば、古墓群の中で最も早く営まれた墳墓と考えられ、それ以後、火葬墓へと葬制の変遷がみられるようである。

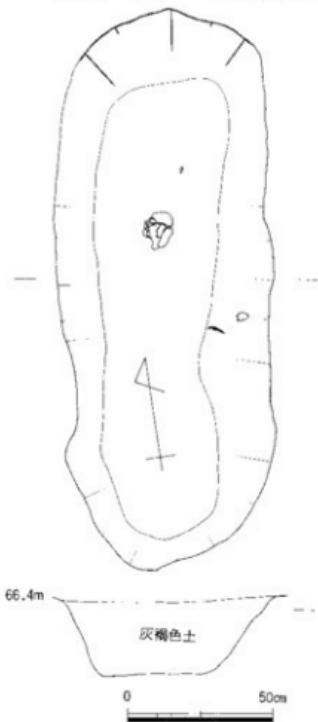


図-16 土塙墓-2 実測図

古墓群

古墓群は調査地中央の南斜面に位置する。東西は南側へ迫り出した小尾根状の地形を呈し、緩やかに北へ湾曲した等高線の奥部を中心に、東西20m、南北16mの範囲に分布している。標高は62.8m～68.3mである。

古墓は29基検出され、藏骨器を伴うものと伴わないものがみられる。時期は8世紀中葉頃から10世紀前葉頃にかけてと思われる。古墓は4～5箇所の群をなしており、その配置に規則性があったようである。古墓群の中央には、西南西から東北東へ延びる溝状の遺構があり、墓道と考えられるものである。それ以外に、土塙墓-2と溝-1が古墓群内に位置する。

古墓の大部分は火葬墓と判断できるものであるが、古墓の壁面が全く熱を受けておらず、またその大きさから考えても火葬地は埋葬地と別の場所であったことが確実である。今回の調査地内では火葬の痕跡を示す遺構は発見されていない。

副葬品を伴う古墓は少ない。副葬品としては、数点の玉類と刀子をあげうるのみで、錢貨が全く出土していない点も不思議である。

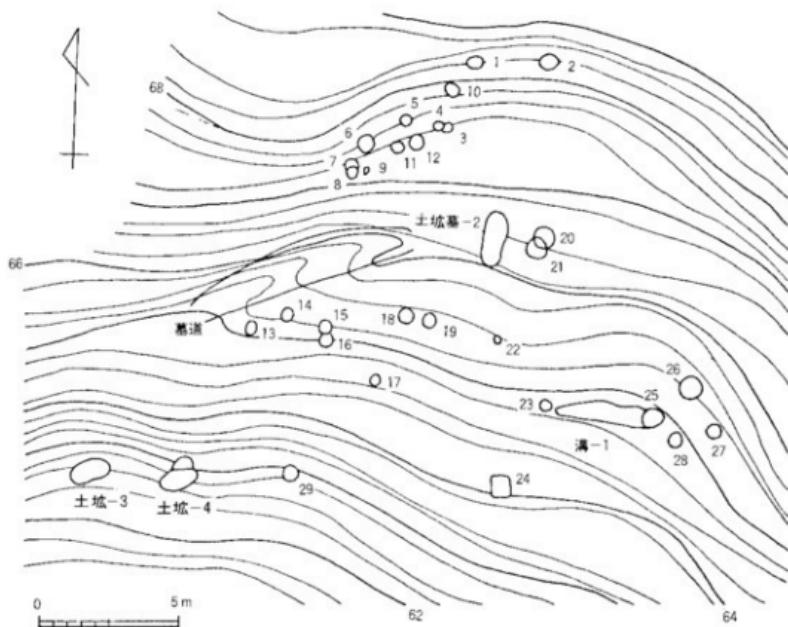


図-17 古墓群全体図

古墓-1

古墓-1は古墓-2と並んで、最高所にある。縄釉陶器の椀に倒立させた須恵質の壺を藏骨器としたものである。

墓地は東西114cm、南北70cmの梢円形平面を呈する。墓地表面は緩やかな傾斜をなし、藏骨器を埋置した部分のみ、直径約40cmの円形に深さ約25cmまで掘り下げられている。埋土は黒灰色の炭を含む灰層である。埋土内からは土師器杯9点、鉄釘2本が出土している。また、藏骨器の須恵質壺は、焼成後に口縁部が打ち欠かれ、完全に欠損している。

埋葬過程を復元すると、他所で火葬を行ない、口縁部を打ち欠いた壺に拾骨した火葬骨を納め、埋葬地へ持ってくる。ここで二段の墓地を掘り込み、壺に縄釉椀を倒立状態でかぶせ、その藏骨器を倒立させて埋置する。その際に、土師器杯1点を同時に埋めている。埋土は、炭や

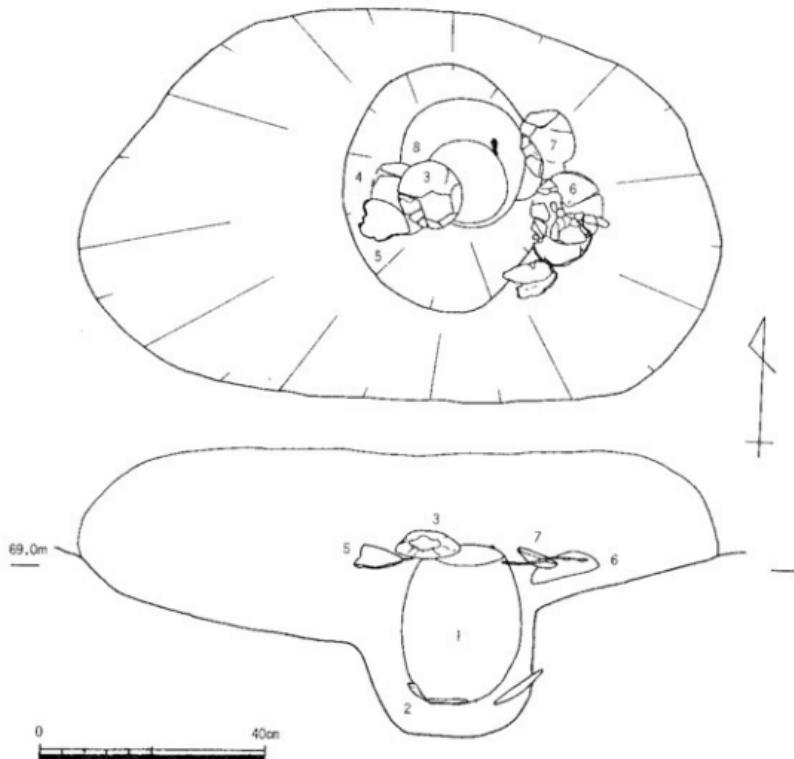


図-18 古墓-1 実測図

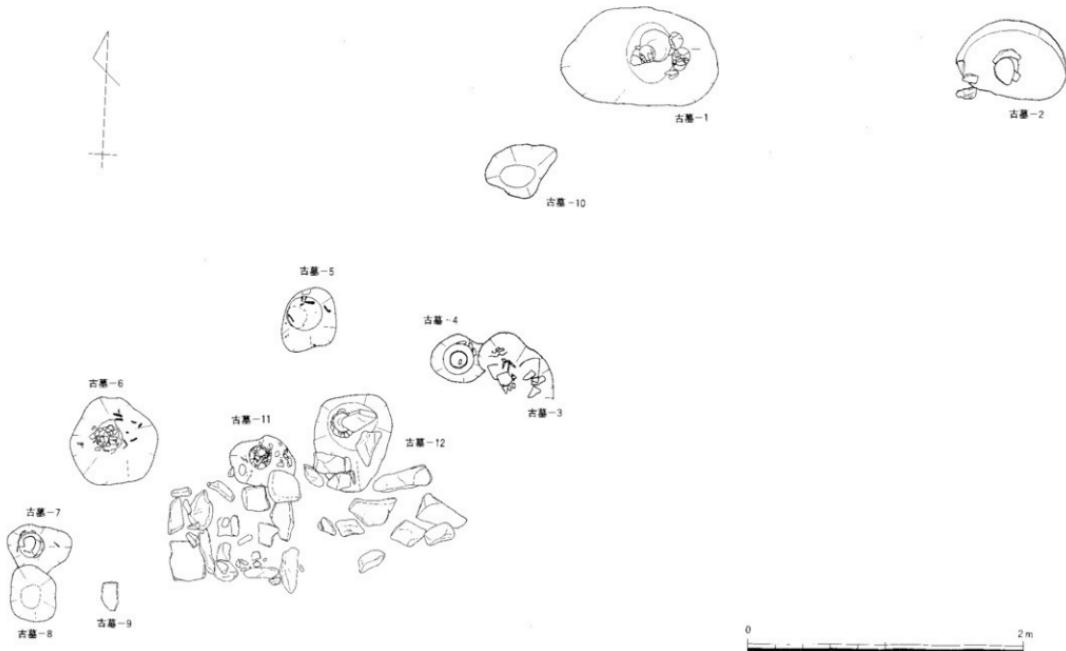


图-19 古墓群平面图①

灰を含んでいることから、火葬した際の灰を別の容器に入れて埋葬地まで運んできていると考えられる。その灰で藏骨器を埋め、ほぼ埋まつた段階で土師器杯 8 点を副葬する。土師器杯は東西 2 群に分かれ、各 4 点ずつ出土している。西群では正位の杯(4・5)の上に倒位の杯(3・8)が重ねられ、東群では正位の杯 3 点(7)の上に倒位の杯(6)が重ねられていた。再び灰で埋め戻されて埋葬は終了する。更に墓塚を掘削した残土を封土状に盛っているかもしれない。釘は壺の底部に接着した状態で 1 点、埋土最上層から 1 点⑥が出土している。

藏骨器の壺口縁部を打ち欠いている点、藏骨器を倒置している点、土師器杯の副葬、しかも上部の杯を逆に置いている点など、葬送における信仰の一形態を示していると考えられる。

縁軋椀と須恵質壺のセットによる藏骨器、しかもそれを倒置している点は、1983 年度に調査した太平寺・安堂遺跡の古墓-1 と全く同じ埋葬方法であり、両者の関連性を考えられる。⁽⁷⁾

縁軋椀は破損が著しく、土師器杯も破損、磨滅のため 9 点中 6 点を実測できたのみである。これらの遺物からは 9 世紀後葉から 10 世紀前葉頃の時期が考えられよう。

古墓-2

古墓-2 は、古墓-1 の 2.5m 東で検出された。墓塚は東西 81cm、南北 56cm の半月状を呈するが、南辺が削平されているため、本来は梢円形平面であったと思われる。底面は平坦で、墓塚の中央に 21cm × 10cm、厚さ 4cm の上面が平坦な石を置き、その上に須恵器の壺を正位で置いていたものと思える。検出した時は、壺が石よりもやや南側で出土したが、これは後世の削平によって壺上半を欠失した時に移動したもので、本来は石の上に置かれていたものと思える。

壺の内部には火葬骨や炭が多く残っていたが、壺の埋土は墓塚を掘削した際の暗黄褐色粘質土であった。また、墓塚外の南西部から自然石が数点出土しており、古墓の上面に自然石による何らかの施設、例えば墓標のような施設が存在した可能性が考えられる。

藏骨器の壺(9)は、低い高台を有するものであるが、上述のように、後世の削平によって上半を欠失しており、全体の形態は明らかでない。これ以外には出土遺物がなく、時期は 9 世紀代と考えられる。

古墓-3

古墓-3 ~ 9、11・12 は東西 4 m、南北 2 m の範囲に集中している。古墓-3 は古墓-4 を切って営まれており、古墓-3 のほうが新しいことがわかる。

墓塚は南北に長い梢円形平面を呈する。東西は 52cm、南北は 60cm 以上であるが、削平されており、南端は不明である。藏骨器の須恵器壺は、削平のため転倒し、破損していた。藏骨器内からは火葬骨と共に、水晶製切子玉が 1 点出土している。壺を取り除くと、正立した土師器碗の上に、倒立した土師器杯が重なった状態が観察できた。埋土は、上層は不明であるが、下層は炭・灰を含む黒灰色土であった。実測図には検出状況(上面)、火葬骨や壺の小片を取り除いた状況(中面)、壺を取り除いた状況(下面)の 3 面を図示した。

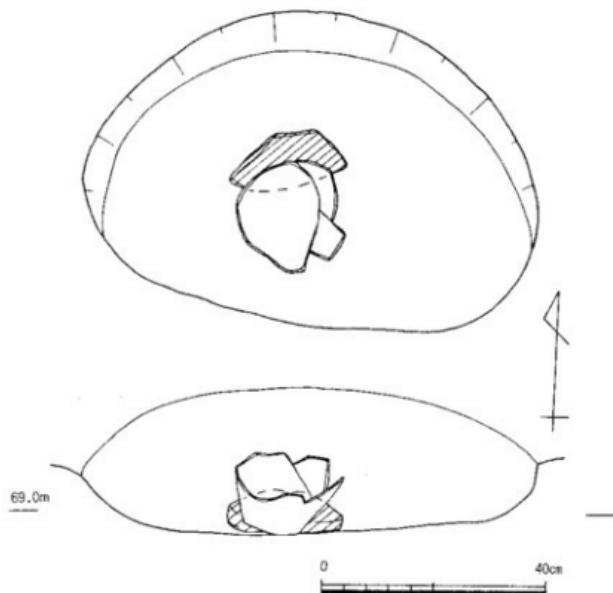


図-20 古墓-2 実測図

古墓-3の埋葬過程を復元すると、他所で火葬した火葬骨を蔽骨器である壺の中に入れ、埋葬地へ運んでくる。壺(10)はやはり口縁部上半が意図的に打ち欠かれている。この壺の口縁部に正立状態の土師器杯(11)をかぶせる。杯の口径は、壺の口縁残存部の直径にはほぼ等しい。更にその上に、土師器椀(12)を倒立状態でかぶせる。椀の残存状態が非常に悪く、高台部分しか岡化できなかったが、椀の口径は壺の残存部口径を上回り、壺の口縁部に覆い被さる状態で蓋としての機能を果したものと思われる。これら3点の土器をセットにした蔽骨器を、倒立させて埋置している。埋戻す際に使用された土は、やはり火葬地から運んできたと考えられる灰である。

古墓-3の壺も、古墓-1と同様に口縁部が打ち欠かれていた。しかし、古墓-3の場合は、信仰的な意義だけでなく、椀を蓋として代用するために打ち欠いて口径を整えている可能性が大きい。古墓-1においても、同様な可能性が考えられる。

古墓-3では、蔽骨器内の水晶製切子玉以外に副葬品は認められなかった。そのため、これら3点の土器から年代を考えると、埋葬方法にも共通点が指摘できる古墓-1に近い年代、9世紀後葉から10世紀初頭頃の年代と考えておきたい。

なお、上層から鉄釘4本②～④が出土している。

古墓-4

古墓-4では、須恵器の壺が正立状態で出土している。検出時には口縁部を欠損していたが、古墓の南側から出土した口縁部片が接合でき、ほぼ完形に復元することができたものである。

墓壇の平面形は直径約35cmの円形である。墓壇は壺が埋置されていた部分のみ更に掘り下げられ、2段墓壇となる。検出時には壺の内部は土で埋まっていたが、本来は何らかの蓋を有していたのであろう。埋土は墓壇廻削に伴う暗褐色粘質土である。埋土内からは上師器杯が2点出土している。

古墓-3との切り合い関係から、古墓-4が古墓-3に先行することは明らかである。しかし、藏骨器の須恵器広口壺(13)と十師器杯(14・15)の形態から考えると、大きな時期差は考えられない。従って、古墓-4の年代は9世紀中葉から後葉にかけての時期が推定される。



図-21 古墓-3 実測図

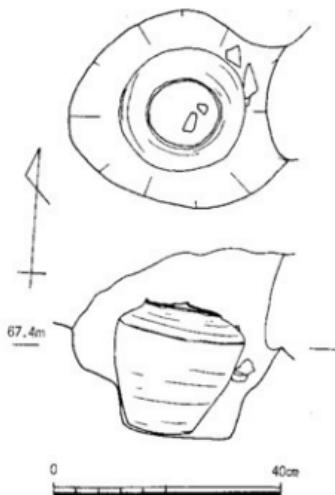


図-22 古墓-4 実測図

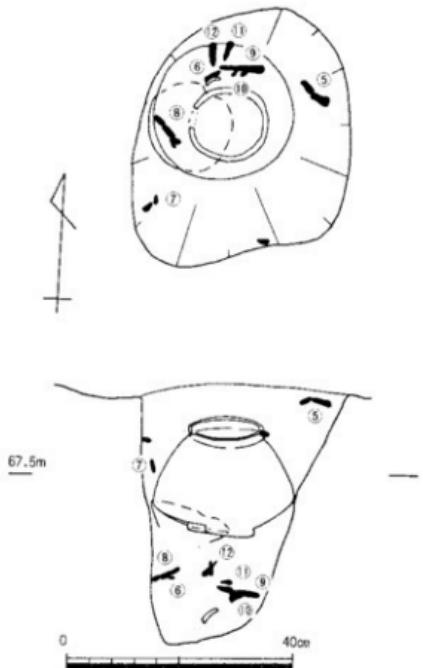


図-23 古墓-5 実測図

古墓-5

古墓-5は、東西38cm、南北44cmの不整形平面を呈する。深さは46cmと非常に深い。蔵骨器は倒立した須恵器の短頸壺と灰釉陶器の皿である。灰釉皿は、底面から約22cm浮いた状態で出土している。埋土は炭・灰を含んだ黒灰色土であり、分層はできなかった。

副葬品は見られなかつたが、鉄釘が10点出土している。灰釉皿より下層で6点⑥・⑧～⑫、壺より上層で4点⑤・⑦が出土している。

古墓-5の埋葬過程を復元すると、墓塚を掘り込んだ後、釘6点と上部器片を含んだ黒灰色土で約20cm埋めている。この行為は、単に蔵骨器の深さを調整するためであるのか、あるいは何らかの意味をもつものであるのかは不明である。

次に火葬骨を納めた須恵器の短頸壺(16)に灰釉陶器の皿(17)を蓋として被せ、それを倒立させて埋置する。出土状況では灰釉皿と短頸壺の口縁がややすれていたが、これは後世の土圧によるものか、あるいは埋置した際にややすれたものと思える。この蔵骨器を再び炭・灰を含んだ黒灰色土で埋戻している。

副葬品が見られないため、短頸壺と灰釉皿からその年代を考えねばならない。短頸壺は口縁部が短く外反しており、肩部の張りはやや弱く、高台もそれほど高くない。灰釉陶器の皿は比較的古いものであると考えられ、9世紀中葉～後葉としておく。しかし、短頸壺の形態は、もう少し遡るようにも思える。

須恵器の短頸壺は、その器形から有蓋短頸壺と思われる。それにもかかわらず、灰釉皿を蓋として利用している点は興味深い。単なる代用にすぎないのか、それとも当時としては貴重品であったと思われる灰釉陶器を使用することに何らかの意義があったのか。これも葬制について考える際の資料として重要であろう。

古墓-6

古墓-6は直径約60cmの円形平面を呈し、底面に置かれた扁平な石の上に、倒立状態の土師器甕を藏骨器として埋置したものである。

土師器甕は底部が破損し、内部にその破片が落ち込んでいた。土師器甕の周囲からは鉄釘が14点出土しているが、副葬品は見られない。埋土は炭・灰を含む淡黒灰色土である。

埋葬過程を考えてみると、甕の蓋として扁平な石が使用され、倒立状態で埋置したとは考え難い。石の重みに甕は耐え切れないであろう。そう考えるならば、石は墓壇底にあらかじめ据えられており、そこへ甕を倒立状態で安置したと考えられる。しかし、甕の蓋となるべき土器は見られない。あるいは木製の蓋が存在したのかもしれないが、調査では明らかにできなかった。

土師器の甕(18)は、9世紀後半代のものと思われる。

鉄釘⑩～⑯は、墓壇北東部から集中して出土している。

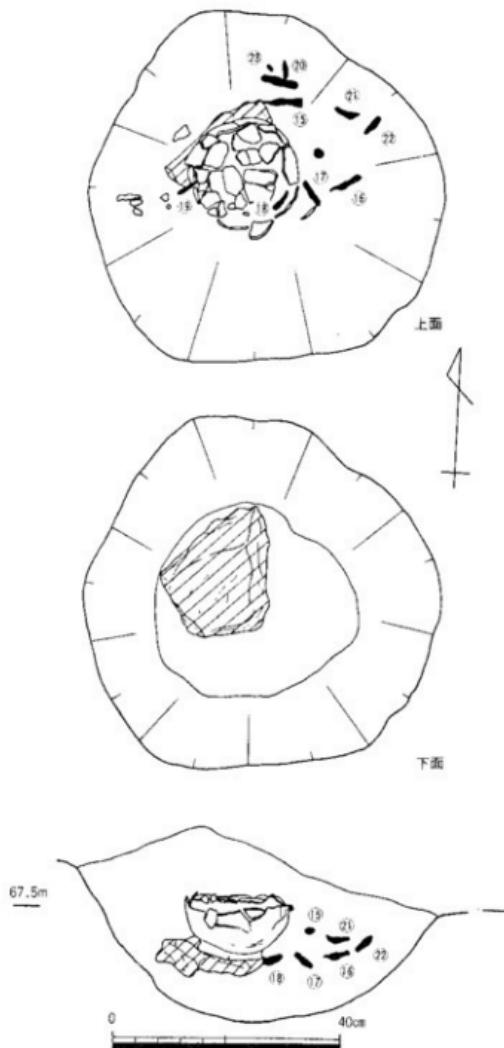


図-24 古墓-6 実測図

古墓-7

古墓-7は、東西46cm、南北36cm前後の梢円形状の平面形態と思われるが、南端は古墓-8によって切られている。藏骨器は須恵器の広口壺で、正位で置かれていた。広口壺の内部から1点、周囲から壺を取り巻くように7点、計8点の土師器杯が出土している。埋土は炭・灰を含む淡黒灰色土。埋土内から釘4点が出土しているが、他に副葬品は見られない。

須恵器の広口壺(19)は、口縁部を欠失した状態で検出された。周辺から出土した破片を接合することによって口縁部を一部復元できたが、口縁部上半は埋葬時から欠失していたものか否か不明である。壺内から出土した土師器杯(20)は、壺の周囲から出土した杯(21~24)と同形態のものである。19は壺内上層から破片となって出土しており、壺の蓋として、正位で壺口縁部内にはめ込まれていたものであろう。また、内面を内側に向けて壺の周囲を取り巻んでいた7点の杯も、何らかの信仰に基づくものであろう。

壺、杯の形態から、古墓-7の年代は9世紀前葉～後葉頃と思える。

古墓-8

古墓-8は、古墓-7の南側で検出された。東西27cm、南北42cmの梢円形平面を呈し、約30cmの深さを有する。遺物は全く出土していないが、炭・灰を含んだ黒灰色土で埋められており、人骨の細片も出土していることから、古墓と判断したものである。火葬した人骨や灰を無作為に取り上げて、容器に入れることなく埋葬した墳墓と考えられる。

切り合い関係から古墓-8は古墓-7より新しいことがわかるが、時期は不明である。

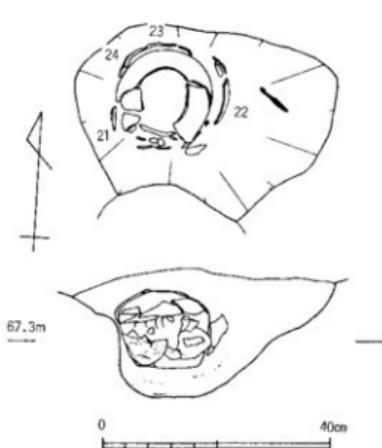


図-25 古墓-7 実測図

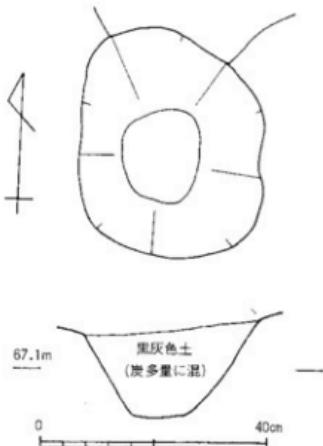


図-26 古墓-8 実測図

古墓-9

古墓-9は古墓-8の東側で検出したが、墓地は明らかにできなかった。正置された盃も、大半を欠失していたが、盃の内部には火葬された人骨が残存していた。

副葬品は全く認められず、藏骨器である須恵器の壺(25)も、その全形を知り得ない。従って、時期も明確にはできなかった。

古墓-10

古墓-10は古墓-1の南西で検出された。55cm×40cmの不整形の平面形を呈し、深さは約18cmを測る。下層は墓地を掘削した際の土が5cm前後の厚さでみられ、上層は炭・灰を多量に含んだ黒灰色粘質土で埋められている。遺物は全く出土していないが、古墓-8と同様に、火葬骨を炭や灰と共に埋葬した墳墓と考えてよいであろう。その年代は、全く不明である。

石敷き遺構

古墓-11について述べる前に、古墓-11・12の上層で検出された石敷き遺構について記述しておく。

古墓-11の南西上層に東西80cm、南北90cmの方形に、自然石が約40点敷き並べてあった。方形区画の中央付近は、こぶし人の石を2~3層に積み重ねている部分もみられた。方形区画の北東と南西の隅には扁平な方形の石が傾かれ、4辺には細長い石が使用されている。

また古墓-12の南側上層でも自然石が數点認められた。これらは明瞭な区画をなすものではない。

この石敷き遺構の上面からは遺物が出土しておらず、墓標とも祭壇とも考えられるものである。この石敷き遺構上面と古墓-3~6の検出面が同一レベルにあり、これらの石を除去した後に、古墓-11・12を検出した。従って、古墓-11・12の検出面は、古墓-3~6の検出面より5~10cm深い面にあたる。この石敷き遺構は古墓-3~12のはば中央に位置することが注目される。また、いずれの古墓も上面がやや削平されているため、このような石敷き遺構が他に存在した可能性もある。

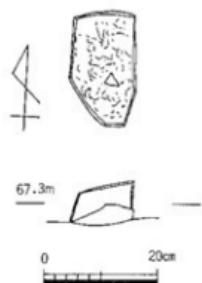


図-27 古墓-9
実測図

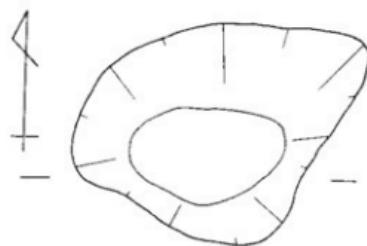


図-28 古墓-10実測図

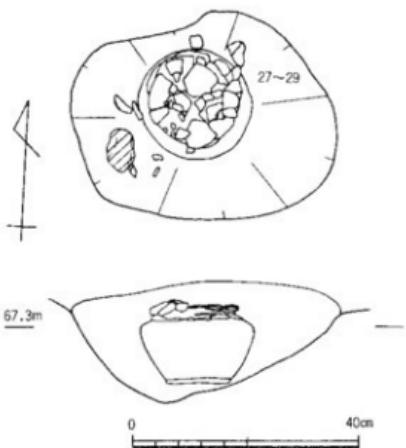


図-29 古墓-11実測図

古墓-11

古墓-11は東西46cm、南北36cmの楕円形平面を呈する。墓壇は桶鉢状になり、深さは約20cmである。

藏骨器は須恵器の壺である。壺は焼成後に口縁部を打ち欠かれている。この壺を墓壇底中央に正置し、その上に土師器の杯3枚を重ねて倒立状態で被せ、蓋としたものである。

埋土は炭・灰を多量に含む黒灰色土である。副葬品は壺の内部より水晶製の玉が1点出土しているが、他にはみられない。鉄釘も1点も出土していない。

須恵器の壺(26)は高台を有し、比較的張り出した肩部に凹線を伴う。蓋として被せられていた土師器の杯（上から順に27~29）は、残存状態が非常に悪いが、低い高台を伴うものである。これらの土器から、9世紀中葉～後葉頃ではないかと思える。

古墓-12

古墓-12は東西55cm、南北70cmの楕円形平面を呈する。墓壇は2段に掘り込まれており、下段の墓壇は直径約35cmの円形平面を呈する。

墓壇底には土師器杯が2枚重ねで正置されており、その横から刀子が1点出土している。埋土は炭・灰を多量に含む黒灰色土である。埋土内からは、須恵器の瓶形壺が多数の破片となって出土している。また、埋土上面から綠釉陶器の椀が、これも破片になって出土している。これ以外には、埋土上面から鉄釘2点と器種不明の土師器片が数点出土している。

出土状況からは明確にできなかったが、須恵器の壺(30)が藏骨器であると思える。土師器杯(32)の口径は、壺の口径を上回っており、壺に土師器杯(32)を蓋として被せ、更に口縁の大きい土師器杯(33)を被せて倒立状態で埋置したものではないだろうか。仮りにそう考へるならば、倒立状態の壺底部は墓壇検出面より上位に位置することになり、後世の削平によって壺が損壊したものと考えることができる。

また、上面から出土した綠釉陶器の椀(31)は副葬品と考えられるものであるが、他の古墓に伴う可能性も否定できないものである。

出土土器の形態からは、古墓-11と同時期か若干遅るのではないかと思われる。一応、9世紀中葉～後葉頃としておきたい。

古墓-11・12は、前述のように古墓-3～6の下層で検出されている。しかし、上器の形態から考えると、古墓-5のはうが、古くなる可能性が考えられる。特殊な器形の土器が多く、土器による年代観も確実なものではないが、そのように考えた場合、この矛盾をどのように考えればよいであろうか。

古墓-12の上面は、その検出状況から、少なくとも10cm程度の削平が考えられる。この10cmの削平を考慮すると、古墓-12の上面は古墓-5の検出面にはほぼ一致する。このことから、古墓-11・12の墓壇上面は、本来、古墓-3～6の検出面と同一面にあったと考えられる。古墓-11・12の上面を若干削平して石敷き遺構が築かれているようである。

この石敷き遺構は古墓-3～12のほぼ中央にあり、全ての埋葬が終了した頃、すなわち9世紀末葉～10世紀初頭頃に築かれたものではないかと思える。そのように考えると、墓標的な性格が濃厚であり、石敷きの上面に墓塔が建てられていた可能性も考えられる。

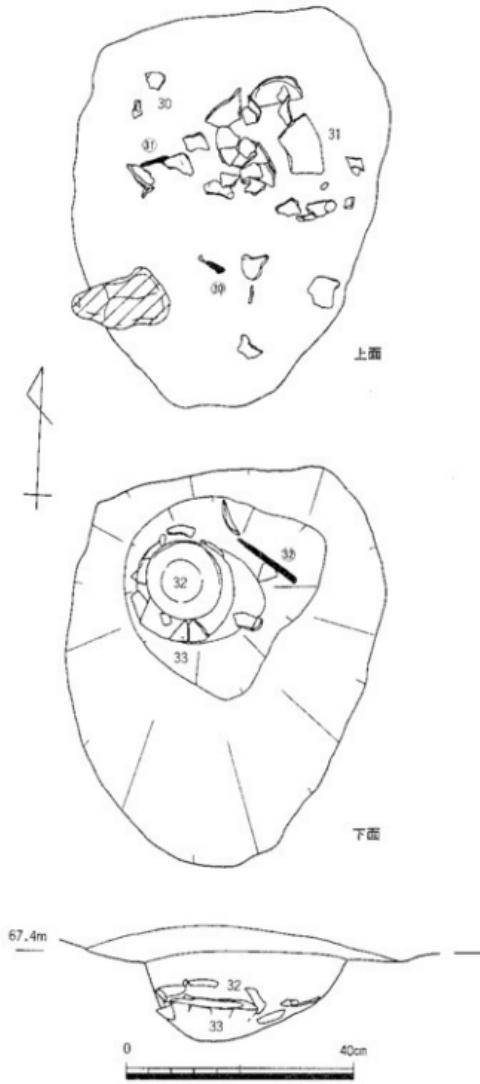


図-30 古墓-12実測図

古墓-13

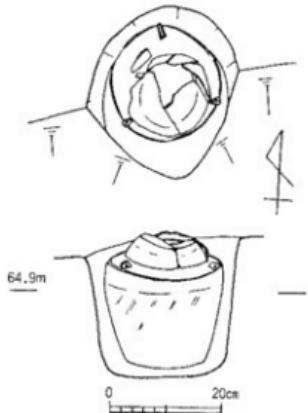


図-31 古墓-13実測図

墓壇は直径約30cmの円形と考えられ、墓壇壁は垂直に近く掘り込まれる。深さは約25cmを残し、墓壇底は平坦である。この墓壇に、蔵骨器として須恵器の有蓋三耳壺が埋置されていた。墓壇は蔵骨器を納めることができる最小限の大きさに掘られている。埋土は墓壇を掘削した際の暗黄褐色粘質土である。

蔵骨器内には火葬骨が納められていたが、副葬品は全く出土していない。鉄釘の出土もみられない。

古墓-13の年代を示すものは、蔵骨器の有蓋短頸三耳壺(34・35)のみである。三耳壺は平坦な底部に、肩は鋭く張った稜をなし、凹線を伴う。蓋は偏平なつまみを有するものである。9世紀中葉を前後する時期であろうか。

古墓-14

古墓-14は、古墓-13の約130cm東側で検出された。東西36cm、南北45cmの南北に長い梢円形平面を呈する。深さは約20cm、撲鉢状の断面形を呈する。蔵骨器は口縁部を打ち欠いた土師器の壺であり、倒立状態で埋置してあった。墓壇底のやや北寄りの位置からは、土師器杯が2枚重ねで出土している。埋土は炭・灰を含む黒灰色土。上層から鉄釘が1点出土しているが、副葬品は見られなかった。

検出時には倒立状態の壺底部が破損し、破片が壺内部に散乱していた。壺内部には火葬骨や炭が詰まっていた。墓壇底の杯も、壺の重量のため細片となっていた。そのため、下層の1点は図化不能であったが、どちらも同一形態である。

土師器の壺(36)は口縁部が打ち欠かれており、全形を知り得ない。やや肩の張った丸みをおびた体部に、小突起が2箇所に見られる。把手の退化したものであろうか。この壺に火葬骨を納め、土師器の杯(37)で蓋をし、更に土師器杯を被せている。壺口縁部の打ち欠きは、やはり杯を蓋として利用するためであろうか。この蔵骨器を倒立状態で埋置しているが、倒立させたままで蔵骨器を埋置するのは困難であったようであり、蔵骨器は墓壇中央に位置せず、北側へ寄っている。蔵骨器の埋置には、やはり火葬地から運んできたと考えられる灰を使用している。

壺は類例の少ない形態であるが、杯の形態から考えると、古墓-14の年代は9世紀中葉～後葉と考えられる。

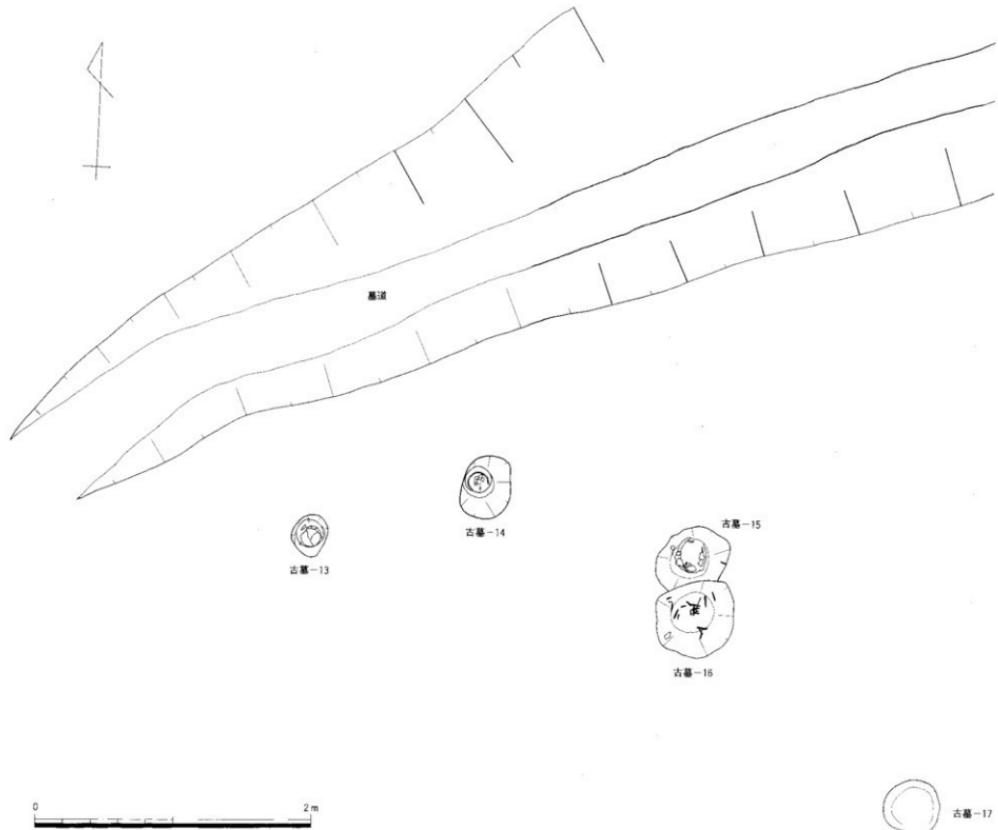


图-32 古墓群平面图②

古墓-15

古墓-15は、古墓-16と切り合っており、古墓-15のほうが古い。墓壇は直径50cm前後の円形平面を呈し、墓壇底は丸味をおび、平坦面をなさない。藏骨器は土師器の有蓋無頸壺であり、墓壇底に正置されていた。しかし、検出時には壺の上部と蓋が破損し、壺内部に落ち込んでいた。

埋土は2層からなり、下層は墓壇掘削に伴うと考えられる灰褐色粘質土と暗黃褐色粘質土である。墓壇掘削時の土を再び埋めているのは、やや安定性を欠く壺を安定させるためであろう。壺が正置された後、炭・灰を多量に含む黒灰色粘質土と灰褐色粘質土の混合土で埋められている。上層からは鉄釘が3点(⑩・⑪)出土している。

副葬品は全く出土していない。従って藏骨器である土師器の有蓋無頸壺のみが年代を示す遺物であるが、類例の乏しい器形であり、時期を決め難い。壺は一部接合できず、岡上で復元したものである。やはり、9世紀代であろう。

古墓-16

古墓-16は、古墓-15の南側で、古墓-15を切って営まれていることから、古墓-15に後出する。藏骨器を伴わず、土師器、須恵器片が墓壇上面から数点出土しているのみである。副葬品も認められない。しかし、鉄釘が21点出土している。頭部の残存しているものみ図化したものが16点になる。墓壇の平面形は直径50~60cmの円形であり、深さ約25cm、断面は弧状をなす。

埋土は2層に分かれ、下層は多量に炭・灰を含む黒灰色粘質土、上層はやはり炭・灰を含むがその量がやや少ない灰褐色粘質土である。鉄釘は、その大部分が下層の黒灰色粘質土から出土しており、墓壇底中央に集中する傾向がみられる。鉄釘⑫~⑯は、7~8cmの長さを測り、形態、長さともほぼ均一である。先端を欠損するものも多いが、他の古墓から出土している鉄釘に比して、その残存状態は良好である。

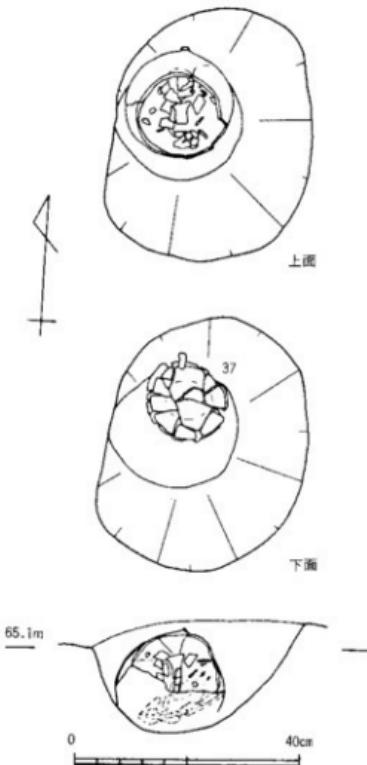
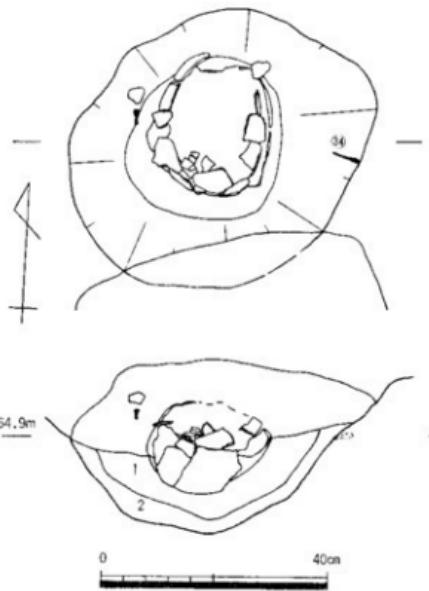
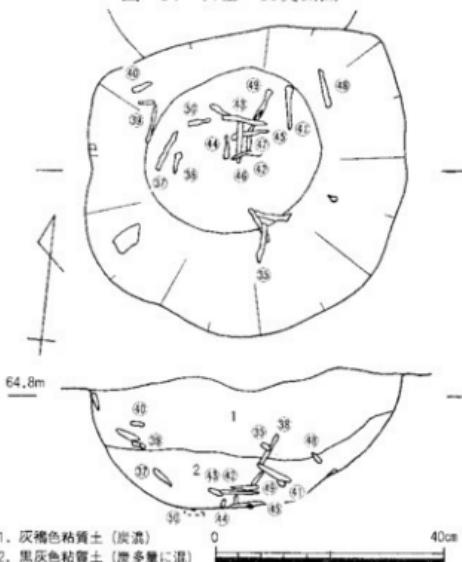


図-33 古墓-14実測図



1. 黒灰色粘質土+灰褐色粘質土(炭多量に混)
2. 灰褐色粘質土+暗黄褐色粘質土

図-34 古墓-15実測図



1. 灰褐色粘質土(炭混)
2. 黒灰色粘質土(度多量に混)

図-35 古墓-16実測図

古墓-16の墓域底の鉄釘は、重なるように出土しており、その出土状況に意味がありそうに思える。しかし、出土状況からは木櫃のようなものは考えられず、他の釘の出土状況も考慮すると、下層の黒灰色粘質土が埋められる際に、混入したものと考えられる。上層から出土している鉄釘も全て西壁際から出土していることを考えられると、これらも黒灰色粘質土と共に埋められたと考えられる。この黒灰色粘質土が火葬骨を含んでいる層と考えられるが、これらの釘が意識的に埋設されたものか、偶然に混入したものかは判然としない。少なくとも、古墓-16の堆積が木櫃に納められたものでない点と、古墓-16の場所で火葬が行われた痕跡が認められないことは確認できる。

古墓-16は藏骨器、副葬品とも伴っておらず、時期を明らかにできない。古墓-15との切り合い関係から、時期の明確でない古墓-15より新しいことだけは確認できる。つまり、9世紀以後という漠然とした時期と考えておきたい。

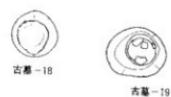
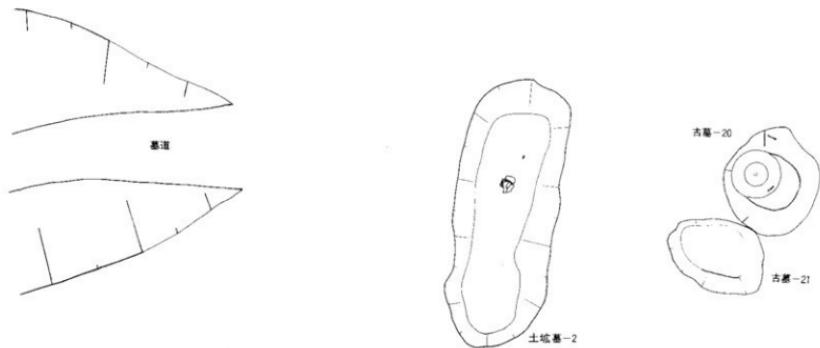


图-36 古墓群平面图③

古墓-17

古墓-17は直径約40cmの円形平面を呈し、深さは11cmを測る。墓塙底は比較的平坦である。理上は2層をなし、西半に墓塙掘削に伴う暗黄褐色粘質土に炭・灰を含む黒灰色粘質土が少量混じった土が堆積し、その上層、中央から東半にかけて炭・灰を多量に含む黒灰色粘質土がみられる。断面の上層からは、墓塙を暗黄褐色粘質土である程度埋め戻した後、改めて墓塙を掘り、黒灰色粘質土で埋めているようである。あるいは平面では確認できなかったが、2基の墓塙が切り合っている可能性も考えられる。

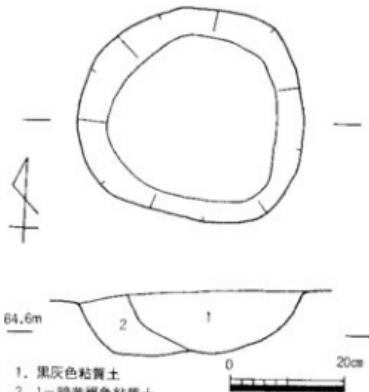


図-37 古墓-17実測図

上層の黒灰色粘質土内に火葬骨が火葬の際の炭・灰と共に埋められたと考えられるが、藏骨器、副葬品だけでなく、鉄釘も全く出土していない。従って、時期を示すものは全くなく、古墓-17の年代は不明である。

古墓-18

古墓-18は倒立させた土師器甕を藏骨器とする古墓である。墓塙の平面形は直径33cmの円形である。甕の体部最大径が21.3cmと復元でき、墓塙と甕の間には6cm弱の空間しか存在しなかったことになる。つまり、墓塙は甕を納めることができる最小限の大きさのものであったと考えられる。検査時には、甕の体部下半が既に欠失していた。破片の一部が甕内に転落していたが、大部分が残っておらず、後世の削平を受けたものと思える。

倒立状態の甕を取り上げると、下向きに置かれた土師器の杯が出土した。杯は南西方向に傾いており、削平を受けた際の外力によるものと思える。

甕内から土師器杯が1点出土しているが、他に副葬品は見られなかった。鉄釘も出土していない、埋土には炭・灰を含まない灰褐色粘質土であり、甕内の火葬骨の残存状態は非常に悪かった。

埋葬過程を復元すると、火葬骨を納めた甕(40)に、口縁部を上に向かた状態で土師器杯(41)を蓋としてのせる。杯の口径は甕の口径より小さく、頸部径より大きい。つまり甕の口縁部にはまり込んだ蓋となる。この藏骨器を倒立させ、藏骨器より少しだけ大きい墓塙に納め、墓塙を掘削した際の土で埋め戻している。

土師器の高台付きの杯(41)と甕内から出土した土師器杯(42)の形態から、古墓-18の年代は9世紀末葉～10世紀前葉と考えられ、古墓群の中では最も時期の下る古墓の一つと考えることができる。

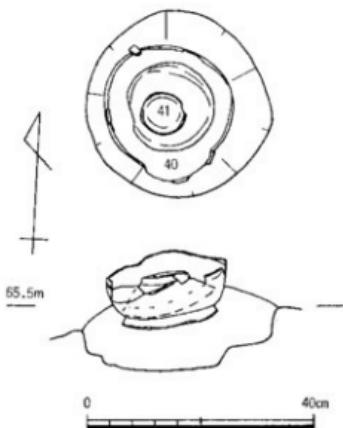


図-38 古墓-18実測図

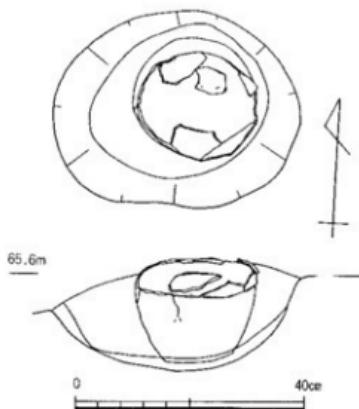


図-39 古墓-19実測図

古墓-19

古墓-19は、古墓-18の約80cm東側で検出された。東西43cm、南北35cmの稍円形平面を呈する墓壇内に、須恵器の短頸壺を正置したものである。短頸壺は、肩部より上が破損していたが、壺内に転落していた破片から、ほぼ完形に復元できたものである。

埋土は2層に分層できる。下層は灰褐色土であり、墓壇底から壁面にかけて2~3cmの厚さに堆積している。これは墓壇の掘削土を少量だけ流し込むように埋め戻し、蔵骨器の安定を計ったものと考えられる。蔵骨器を安置した後は、炭・灰を多量に含む黒灰色粘質土で埋められている。黒灰色粘質土上層からは鉄釘が3点出土している。⑩・⑪のみ同化できた。副葬品は全く認められなかった。

蔵骨器である須恵器の短頸壺(43)は有蓋器種と思われるが、蓋の破片は壺内はもちろん、周囲からも出土していない。しかし、短頸壺は正置されており、おそらく蓋を伴ったものと思える。短頸壺の口縁部は短く直立し、肩部は張り出しがやや弱く、体部最大径は器高の約3分の1の位置に求められる。高台は低く、外方へのびることなく下方に取り付き、その断面は台形状を呈する。

古墓-19の年代を示すものは、この短頸壺のみである。短頸壺の形態としては、古墓-5の短頸壺より明らかに新しいと考えられる。しかし、10世紀代まで下ることもないと思われる。従って、9世紀後葉を前後する時期と考えておきたい。

古墓-20

古墓-20は直径70cm前後の円形平面を呈し、墓塚底は比較的平坦である。須恵器の有蓋短頸壺を蔵骨器とし、墓塚底西端に正置されていた。墓塚の埋土は、墓塚を掘削した際の暗黄褐色粘質土である。壺の肩部から1点◎と墓塚上面近くから1点◎の鉄釘が出土している。壺の内部には人骨がぎっしり詰まっていた。人骨は熱によって黒色に変化したと考えられるものもあるが、熱を受けたとは考えられないものも見られる。縫合面を明瞭に残した頭蓋骨片や関節、上腕骨、臼歯などが大量に残っており、未鑑定であるが、性別や年齢もおそらく判明できると考えられる資料である。人骨の遺存状況からは、おそらく火葬されたと考えられるが、低い熱によるものと推定され、燃えつきるまで火葬したとは考え難い状況である。また特筆すべきは、人骨を洗骨していると考えられる点である。壺内には炭・灰はもちろん、土砂も全く見られず人骨のみであった。他の古墓では火葬骨と共に少なからず炭・灰を含んでおり、対照的である。

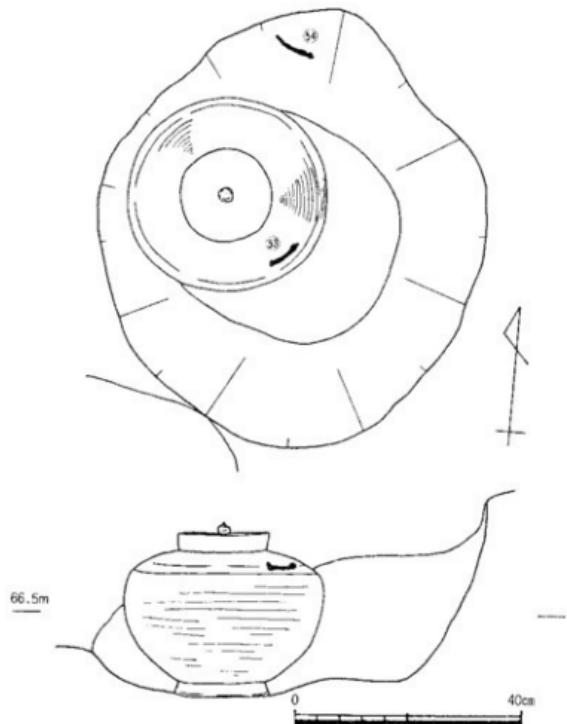


図-40 古墓-20実測図

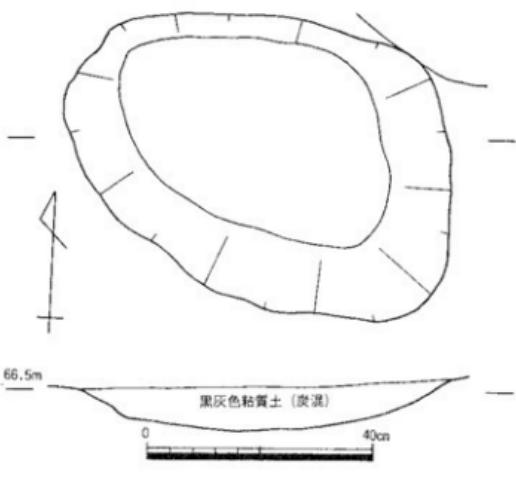


図-41 古墓-21実測図

藏骨器の底面からガラス玉が24点出土している。人骨を納める前に、壺に埋納されたものと考えられる。

須恵器の有蓋短頸壺(44・45)は、体部最大径の位置がやや低く、体部が丸みをもっており、やや新しい特徴が指摘できる。しかし、高台は外方へふんばる高いものであり、蓋の口縁部が天井部から直角に屈曲する。宝珠つまみも均整のとれたものであり、8世紀後葉～末葉と考えられる。

古墓-21

古墓-21は古墓-20の南西に接して位置する。長径74cm、短径50cmの橢円形平面を呈し、深さ約8cmを残す。埋土は炭・灰を多量に含んだ黒灰色粘質土。遺物は全く出土していないが、炭・灰と共に火葬骨を埋置した墳墓と考えられるものである。

遺物の出土がないため、年代は全く不明である。

古墓-22

古墓-22は、土師器甕を藏骨器としたものである。墓壇は土師器甕の直径にはほぼ等しい直径約32cmの円形平面を呈し、深さは22cmを残す。墓壇底には自然石が1石置かれ、その上に土師器甕が埋置してあった。埋土は墓壇掘削に伴う暗黄褐色粘質土である。

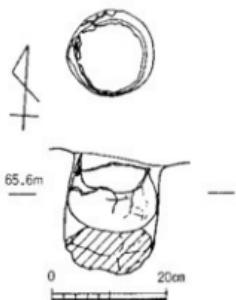


図-42 古墓-22実測図

土師器甕は検出時から口縁部を欠失しており、甕の内部にもその破片を見出せなかった。また残存状態が非常に悪く、復元することができなかっただため、復元することは不可能であった。そのため、甕の全形を推測することもできず、当然その年代も不明である。

甕が正置されているため、蓋が存在したものと思えるが、それについても全く不明である。副葬品や釘も全く出土していない。



古墓-23

溝-1

古墓-25

古墓-26



古墓-27



古墓-28



古墓-24



图-43 古墓群平面图④

古墓-23

直径約40cmの円形平面を呈する墓壇内に、倒立状態の土師器甕を藏骨器として埋置したものである。埋土は灰褐色粘質土であり、炭・灰をほとんど含まない。

倒立状態の甕は著しく破損し、体部は全て小片となって積み重なるような状況であった。甕を取り上げると、土師器杯が下向きに置かれてあった。この出土状況は、古墓-18と全く同一である。つまり、火葬骨を納めた甕に土師器の杯を口縁部を上にした状態で被せ、蓋として代用したものである。埋葬に際しては、これを倒立させて埋めている。

土師器の甕(47)と杯(46)も古墓-18出土土器に酷似し、ほぼ同時期、すなわち9世紀末葉から10世紀初頭の年代と推定される。

副葬品、釘は全く出土していない。

古墓-24

古墓-24は、古墓群の最南端で検出された古墓である。1辺約65cmの方形平面を呈するが、南辺は弧状をなす。墓壇は約13cmの深さまで掘り込んだ後、更に掘り込まれている。下段の墓壇は直径20cm前後の円形平面を呈し、約7cmの深さを有する。この墓壇底に藏骨器である須恵器の壺を置き、墓壇を掘削した際の黄褐色粘質土で埋め戻し、壺の安定を計る。その上を、炭・灰を含んだ黒灰色粘質土、褐色土で覆っている。黒灰色粘質土、褐色土からは鉄釘が7本出土している。副葬品は出土していない。

検出時の状況は、壺の上面まで褐色土で覆われており、壺は完全に埋没した状態であった。それにもかかわらず、壺内部には全く土が入り込んでおらず、水が溜まっていた。土層からは確認できなかったが、壺に木製の蓋が被せられていたのではないかと思われる。その蓋が腐朽した後は褐色土が均衡を保って崩れることがなかったようである。

古墓-24は、藏骨器の壺以外に年代を決めることができる遺物は見られない。藏骨器の須恵器壺(48)は、瓶形を呈したものであり、その形態から9世紀前葉を前後する時期のものであろうと思える。

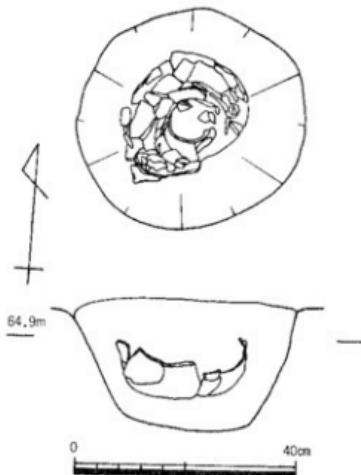


図-44 古墓-23実測図

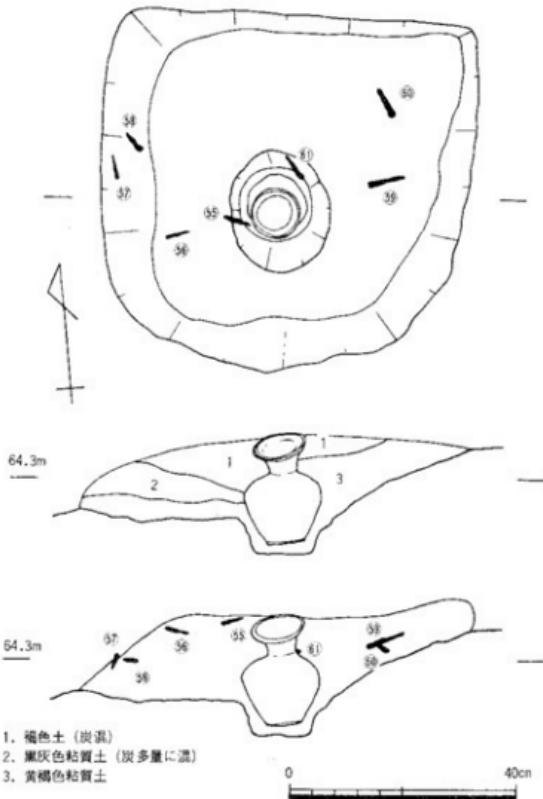


図-45 古墓--24実測図

古墓-25

古墓-25は長径120cm、短径70cmの不正楕円形平面を呈し、深さは10~20cmである。墓壇底の西辺中央に直径約26cmの円形平面を呈する墓壇が2段に掘り込まれている。深さは約14cmを測る。しかし、下段の墓壇内からは全く遺物が出土していない。土層は明確にできなかったが、下段の墓壇内に火葬骨が埋葬されたのであろう。埋土は炭・灰・焼土を多量に含む褐色土の單一層である。

下段の墓壇上面からは、土師器片が数点出土している。いずれも土師器杯と考えられるが、小片となっており、國化できたものは(49)のみである。その上面に、墓壇を覆うように扁平な石が一枚置かれていた。

墓埴埋土内からは多数の土師器片と平瓦片2点、釘10点が出土している。土師器はいずれも小片であり、図化できるものは無かった。平瓦は縄目叩きを有する一枚作りのものである。釘は頭部の残存するもの8点(⑩~⑫)を図化した。

結局、古墓-25の時期を示すものは、土師器の杯(49)のみであり、9世紀末葉~10世紀初頭頃と思える。

蔵骨器を伴わないにもかかわらず、二段墓壇であるのは古墓-25のみである。また、墓壇平面が必要以上に大きい点も注目される。しかし、調査状況からは、その埋葬過程を復元するには至らなかった。

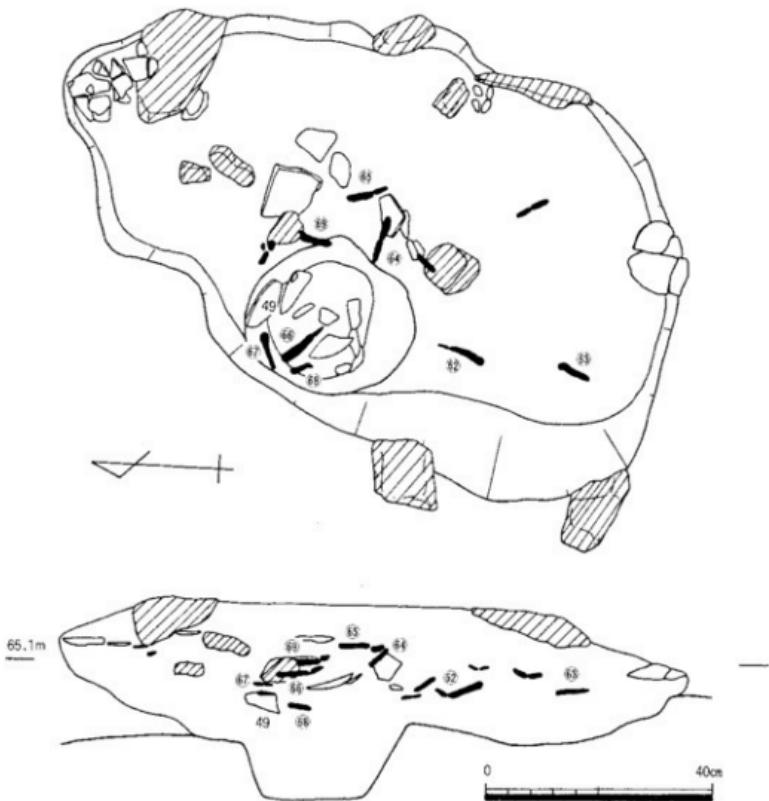


図-46 古墓-25実測図

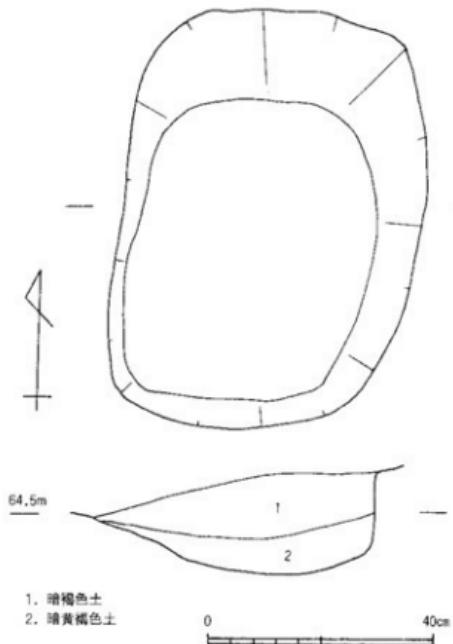


図-47 古墓-26実測図

古墓-26

古墓-26は長辺75cm、短辺54cmの南北に長い隅丸方形状平面をなす。深さは約18cmを測る。

埋土は2層に分けられ、下層は墓塙掘削土である暗黄褐色土、上層は少量の炭・灰を含んだ暗褐色土である。

遺物は全く出土しておらず埋土からも墳墓であることを見分けるものは見られなかった。しかし、その形態や周辺に古墓に関連する遺構以外は認められないことから、古墓と判断した。

遺物が出土していないため、当然のことながら、その時期は不明である。

古墓-27

古墓-27は直径約40cmの円形平面を呈する。墓塙東壁は、ややえぐり込まれており、西壁は緩やかな傾斜を示す。藏骨器は須恵器の広口壺を使用しており、倒立状態で埋設されていた。壺は、やや西側へ傾いた状態で検出されている。埋土は炭・灰を含んだ黒灰色土である。

須恵器の壺は口縁端部を数箇所打ち欠かれている。火葬骨を納めた壺に十師器杯を上向きの状態で嵌め込む。杯は壺の口縁部にきれいに納まり、蓋として機能する。この藏骨器を倒立させて、火葬の際の炭や灰で埋めている。この場合の壺口縁部を打ち欠く行為は、明らかに信仰に伴うものと考えられる。

須恵器の広口壺(50)は、外方へふんばる高い高台を有し、肩が陵をなしており、蓋だけを考えるならば8世紀代とも考えられるものである。しかし、蓋として使用された土師器の杯(51)や埋土内から出土した十師器杯片(52)は、9世紀中葉を測ることはないと思われる。とりあえず、9世紀後半代としておきたい。

埋土内からは、土師器・須恵器の小片、釘1点が出土しているが、副葬品は出土していない。

古墓-28

古墓-28は長径66cm、短径58cmの橢円形平面を呈し、墓壁壁は鏽鉢状をなす。埋土は2層に分けられ、下層が炭・灰を多量に含む黒灰色粘質土、上層は墓壇の掘削土と炭・灰を含む土が混じったようであり、灰褐色粘質土に黄褐色粘質土が混入したものである。

おそらく、火葬骨は下層の黒灰色粘質土に埋葬されたと考えられる。

埋土上層の墓壇東壁に接する位置から、釘が1点⑦出土している。他の古墓からも釘は多数出土しているが、釘の頭部は全て一方へ折り曲げられた形態を示す。ところが⑦は、鉗頭の形態であり、頭部平面は円形である。

1点のみの出土であり、その使用法や年代は全く不明であるが、画一的な釘の中にあって特異なものである。

釘以外には、少量の土師器片が出土しているのみであり、器種、形態を明らかにできるものは見られなかった。

従って、古墓-28の年代も不明と言わざるを得ない。

古墓-29

古墓-29は、古墓群の南西端で検出された。墓壇の平面形は、直径約55cmの円形をなし墓壁の傾斜は緩やかであるが、墓壇底は平坦面をなさない。埋土は炭・灰と共に、細片となった火葬骨片を含んでいる黒灰色土である。

やはり、古墓-28と同様に、埋土内から鉄釘⑦を1点出土しているのみであり、他に遺物は認められなかった。しかし、火葬骨片が出土していることから、墳墓であることは疑いない。遺物が出土していないため、やはり古墓-29の時期も不明である。

碳骨器を伴わない古墓も多数検出されたが、それらの古墓には土器さえもほとんど副葬されていないことが指摘できる。従って、年代を明らかにすることは困難であり、他の古墓と切り合っている場合にのみ、その前後関係を指摘できるにすぎない。

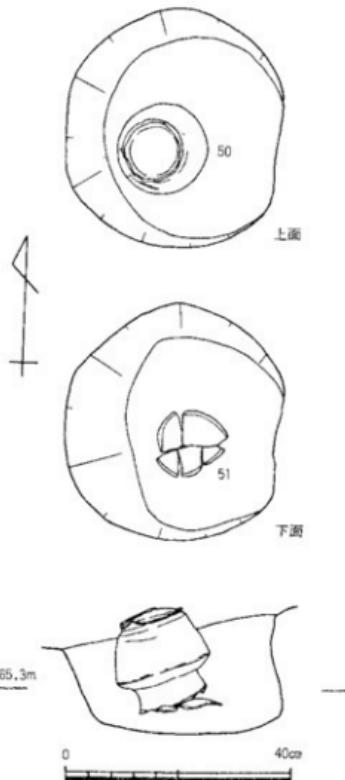


図-48 古墓-27実測図

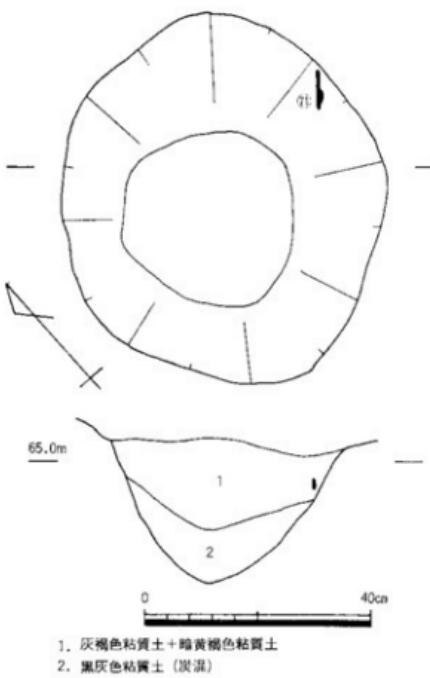


図-49 古墓-28実測図

人の人間が歩くことのできる幅である。墓道の埋土は灰褐色粘質土。埋土からは土師器や須恵器の小片が出土しているが、時期を明らかにできるものは見られなかった。

しかし、墓道と古墓が重なることはなく、墓道の上下に古墓が集中することを考えると、古墓群が営まれている間、墓道は機能していたと考えられる。また墓道東端に古墓群の中では最も時期が遅ると考えられる土塙墓-2と古墓-20が位置することを考えると、墓道が築かれたのは古墓群の成立時と考えられる。この区域を墓域として設定し、墓道の正面にまず初期の古墓を築き、その後、墓道の上下に築くようになったと考えられる。

また、調査状況からは確認できなかったが、標高64~64.5mの等高線に沿って、西から東へ延びる墓道が想定できる。標高64~64.5m付近は等高線の間隔がやや広くなり、平坦面が見られる。この墓道は上塙-3の北側付近で上述の墓道と一体になると推定される。墓道は古墓-17と29、23と24の間に抜け、溝-1付近に至っていたと考えられる。あるいは、溝-1は墓道の痕跡であるのかもしれない。

墓道

古墓群のはば中央で、墓道と考えられる遺構を検出した。古墓-1~12の一組と古墓-13~19の一組の間に西南西から東北東へ延び、土塙墓-2や古墓-20・21に向かって途切れている。

墓道は約8mの長さを残している。山側を大きく削って掘り込み、谷側は10cm前後掘り下げられており、溝状を呈する。底面は西南西へ向かって緩やかに下がっており、古墓-13の西方で消滅している。墓道が更にどのように続いていたのかは明らかにできなかったが、現在の地形から考えると、等高線に沿って更に西へ延び、E号墳の南側付近で南へ下っていたものと考えられる。あるいはE号墳の墓道を利用しているのかもしれない。

墓道の底面の幅は40~60cmで、一

溝-1

溝-1は古墓-23と25の間で検出された。西端はそれぞれの古墓に至り、検出状況からは古墓のほうが新しいようであるが、必ずしも明確にできたものではない。

溝-1の長さは約320cm。幅は西端で約40cm。東へ向かうにつれて幅は次第に広くなり、東端では約110cmとなる。底は比較的平坦であり、深さは10cm前後である。埋土は灰褐色ないし赤褐色の粘質土であり、全面から土師器や須恵器が出土した。

しかし、土器の残存状態は悪く、土師器は風化が著しかった。須恵器は同一形態の杯が大半を占めている。杯は口縁端部が外方へ強く屈曲する特徴を有するものである。(53~56)

土器の出土状況や器種に偏りがみられることを考えると、祭祀遺構の可能性が考えられる。しかし、祭祀の内容については不明であり、前述のように、墓道の可能性も考えられるものである。また、溝-1から多数出土した特殊な形態の須恵器杯が、古墓から1点の出土もみない点も疑問である。

出土遺物や古墓-23・25の関係から考えると、溝-1の年代は8世紀代ではないかと考えられる。

以上のように、古墓群からは古墓29基、土塙墓1基、石敷き遺構2箇所、溝1条、墓道1本、墓道の可能性が考えられる部分1箇所が確認できた。これらの遺構は、8世紀中葉から10世紀前葉にかけて次々と営まれたものと考えられる。

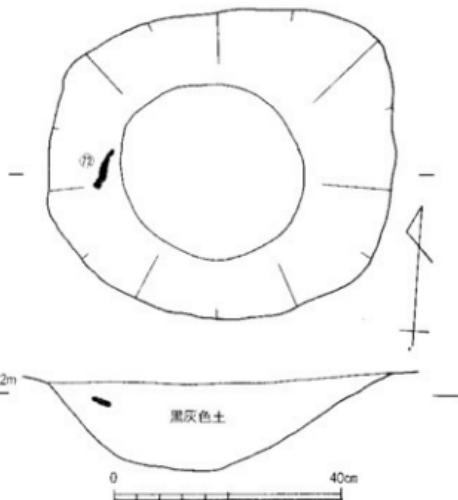


図-50 古墓-29実測図

2. 遺物

E号墳

土器 E号墳からは多数の土器が出土している。1~16は床面、もしくは床面近くから出土した土器であり、17~30は上層から出土した土器である。

1~10は土師器、11~16は須恵器である。1~5は杯。1は口縁部に弱い段が見られ、浅い皿状の形態を呈する。口縁部ヨコナデ、体部ナデ調整、2・3・5は平坦な底部から、口縁部が斜外方へまっすぐのびる。体部外面は指頭調整、内面はナデ。口縁部には強いヨコナデを施す。9世紀後半代の土器である。4は浅い杯部から立ち上がった口縁部が端部で内方へ屈曲する。体部外面はナデ、内面には放射1段暗文が施される。8世紀中葉の土器である。1~4は玄室から淡道右壁にかけての床面から、5はそのやや上層から出土している。

6は皿。底部は平坦で、口縁部は斜外方へ立ち上がる。淡道床面近くから出土している。

7~10は甌。いずれも、口縁部が短く外反する形態である。体部は内外面共にナデ。7の体部内面には工具の当たり痕跡がみられる。全て淡道から墓道にかけての下層から出土している。

11は杯蓋。外面の稜はほとんどみられない。天井部にヘラ記号が記される。淡道から墓道にかけての床面近くから数点の破片になって出土。

12は有蓋高杯の蓋。天井には偏平なつまみを伴う。淡道下層から、やはり数点の破片となって出土した。

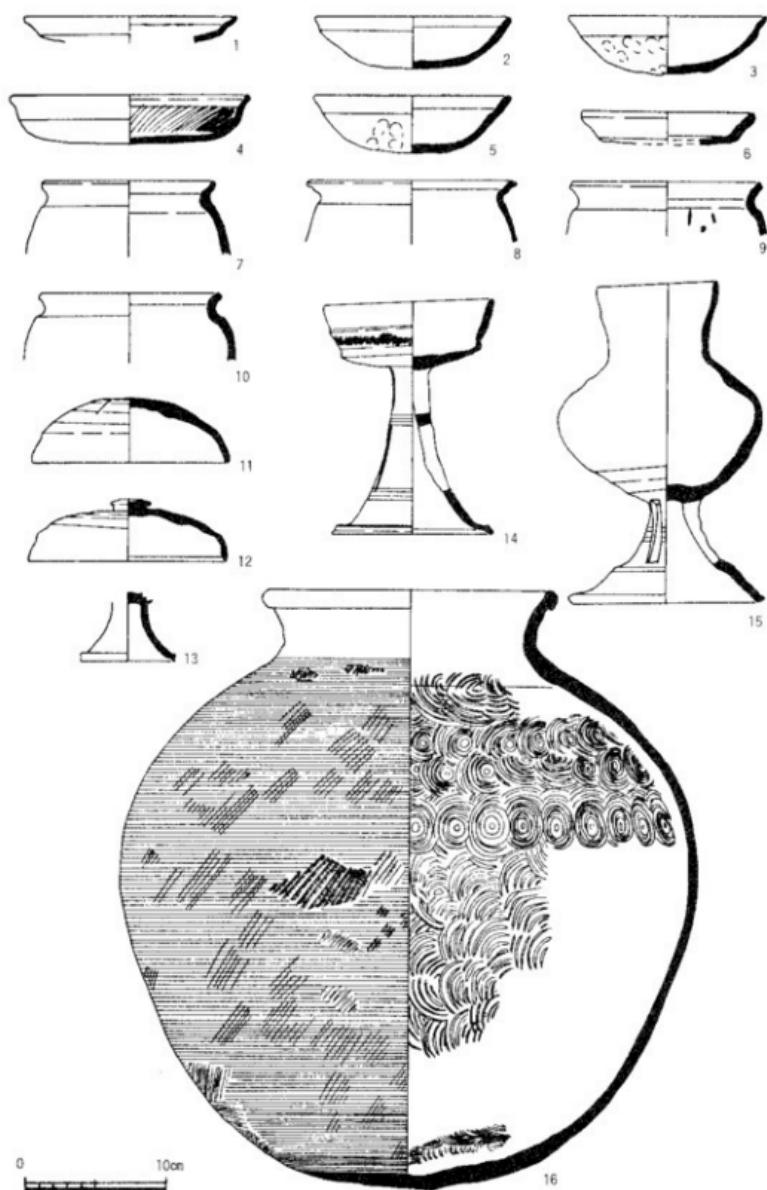
13は小形高杯の脚部。脚端部は下方へ垂下する。淡道下層から出土。

14は長脚二段三方透しの高杯、杯部外面には2段の弱い段がみられ、その間に難な刺尖文がめぐる。脚部に施される透しは細い長方形を呈する。それぞれの透しの下には2条の凹線がめぐる。脚端部は外方へ張り出した後、斜下方へのび、段をなす。玄門床面から完形で出土。

15は脚付甌。体部は強く張り出し、口縁部はやや内房気味に立ち上がる。脚は中央に弱い段がみられ、上方に浅い2条の凹線がめぐる。その2条の凹線を切って、綫長の長方形透し窓が三方に穿たれる。淡道部から数点の破片になって出土した。

16は甌。口縁部は短く、外反する。口縁端部は肥厚し、丸味をおびる。体部は球形を呈し、最大径は器高のほぼ中央に位置する。体部外面は平行叩き目を部分的に残し、全面に細かいカキ目をすることによって叩き目を消している。内面は同心円の当て具痕が全面に明瞭に残る。当て具痕は左まわりに、上方へ向かって叩きが施されたことを示している。玄室中央から淡道にかけての床面、もしくは床面や上層から數十片の破片となって出土したが、ほぼ完形に復元できたものである。

須恵器は横穴の埋葬に伴う遺物と考えられるが、土師器は8世紀以後の再利用に伴う遺物と考えられる。また再利用は最低2度、上層から出土した遺物を考慮すると4回以上にわたって行われているようである。



图—51 E号墳出土遺物

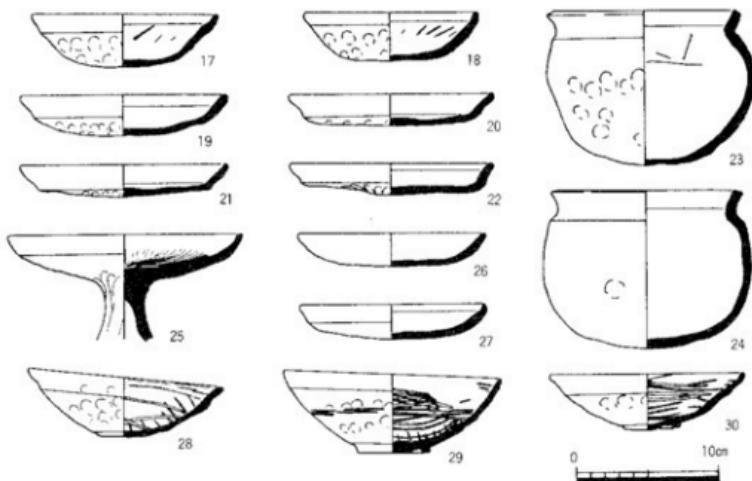


図-52 E号墳上層出土遺物

17~27は土師器、28~30は瓦器である。17~22は杯。17・18は杯部が深く、19~22は皿状の形態である。いずれも体部外面に指頭痕が顕著に残る。全て玄室内上層から出土している。9世紀前葉～後葉の時期である。

23・24は土師壺型。やはり玄室内上層から出土している。形態は7~10の壺と同一である。外面に指頭痕が残り、23の内面には工具痕が残る。

25は高杯。杯部内面に放射暗文がめぐり、脚は細い。墓道や上層から出土。

26・27は杯。体部内外面共にナデ調整。

28~30は瓦器椀。いずれも高台は低く、いびつな形態である。28・30は平行暗文、29は格子暗文が見込みに施される。内面のヘラミガキは粗く、外表面は指頭痕が多数残り、ヘラミガキはほとんど施されない。26~30は、いずれも墓道上層からまとめて出土している。

土玉 土玉は玄室の中央、床面から出土した。非常に多く、破損したものが多いが、総数は140点前後と思われる。その中から、残存状態の良好なもの90点を図化した。

土玉は短円筒形を呈するが、偏平なものや球形を呈するものも見られる。直径は6~7mm、厚さ5~7mm、孔径は1~1.2mmである。いずれも土製で、焼成されており、外表面は黒灰色、断面は褐色を呈する。

高井田横穴群C号墳から同様の土玉が出土しており、焼成、胎土は酷似する。⁽⁸⁾しかし、C号墳出土土玉に比して、直径はやや小さく、形態も統一されている。概して、製作は丁寧になされている。

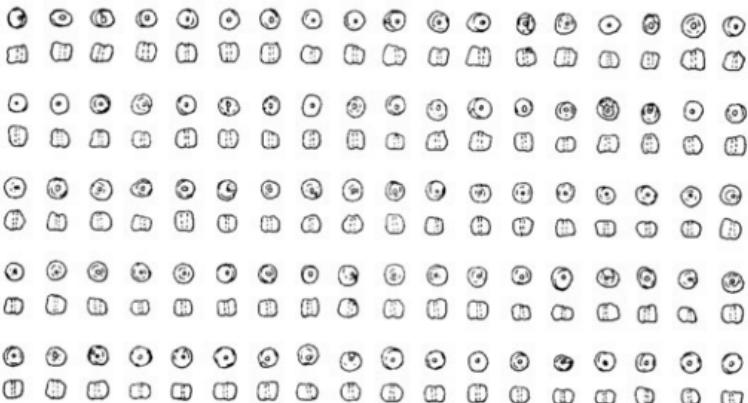


図-53 E号墳出土土玉(1:2)

鉄製品 E号墳からの鉄製品の出土は、岡化し得たもので23点存在し、鉄鎌1点、刀子2点、鍔4点、鉄釘15点、鉄斧1点である。これらはすべて鍛造製である。

鉄鎌①は、方頭斧箭式鉄鎌である。残存長6.5cmを測る。鎌身部は、逆三角形を呈する。幅約3.0cm、厚さ0.4cmを測る。莖部は、先端側の一部を欠失しており、途中で屈曲する。幅は0.7cm、厚さ0.3cmを測る。京都府久美浜町湯舟坂2号墳、兵庫県相生市小丸第1号墳⁽⁹⁾等から同形式のものが出土している。

刀子②③は、②は柄の部分が欠失している。残存長は8.2cmである。刃部と柄はほぼ同幅であり、その間は不明瞭である。刃部幅0.7cm、厚さ0.1cm、莖部幅0.6cm、厚さ0.3cmを測る。

③は刀部先端側の一部が残存する。切先は欠失しており断面は紡錘形を呈する。残存長2.5cm、幅1.0cm、厚さ0.1cmを測る。断面は三角形を呈する。

鍔④～⑦は、完形品はない。④⑤は背部と手部の一部、⑥は手部の一部、⑦は背部は完存し、手部の一部が残存する。④は他の3点と比較すると大型であり、場所により使い分けていると考えられる。⑥には横方向の木目が残存する。

鉄釘⑧～⑫は、完形品が2点存在する。頭部が残存するものは9点存在し、それらの成形は全て頭部を片側へ屈曲させた折頭形である。また、頭部の形態は方形、長方形、台形を呈し、台形のものが最も多く、次いで、長方形のものが多く、方形のものは1点のみである。長さは完形のものでは5.5cm前後のものであるが他のものも5cm程度のものが多いと思われる。

これらの緊結具の残存数より考えると棺は恐らく1棺であったと思われる。また、鉄釘の出土状況をみると2次移動をうけているものが多く、これらの使用場所や木棺を復元することは不可能である。

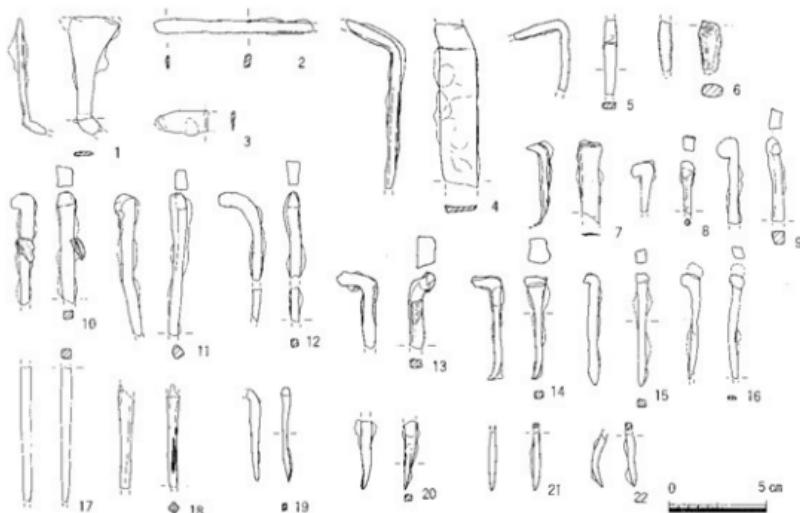


図-54 E号墳出土鉄製品

鉄斧⑩は、板状鉄斧である。刃部は、刃辺側の幅が広くなる形態をとる。全体長5.8cm、刃辺の長さ3.2cm、厚さ0.3cmを測る。

以上の鉄製品の他に砥石⑪が出土した。砥石面は4面である。完形品でないため全体の形状、長さ等は不明である。表面には擦痕が残存しており、その擦痕の方向に石が湾曲している。端部は、石を打ち欠いた痕跡が残存する。残存長7.0cm、幅4.2cm、厚さ2.9cmを測る。流紋岩製である。

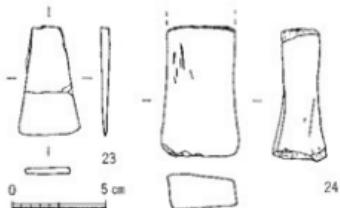


図-55 E号墳出土鉄斧・砥石

No	頭部成形	頭部形態	長さ(cm)	No	頭部成形	頭部形態	長さ(cm)	No	頭部成形	頭部形態	長さ(cm)
8	折頭	方形	(2.7)	13	折頭	台形	(4.0)	18			(5.4)
9	折頭	長方形	(4.4)	14	折頭	台形	5.3	19			(4.9)
10	折頭	台形	(5.8)	15	折頭	台形	5.7	20			(3.5)
11	折頭	長方形	(7.3)	16	折頭	台形	(5.4)	21			(3.0)
12	折頭	長方形	(4.5)	17			(6.9)	22			(2.7)

表-1 E号墳出土鉄釘観察表 () は残存長

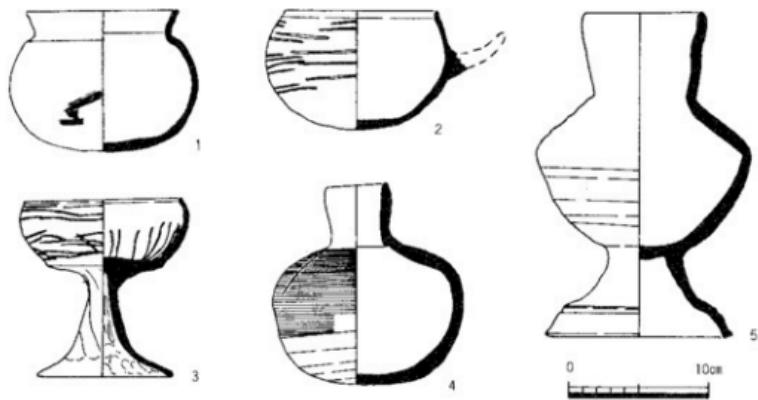


図-56 112号墳出土遺物

112号墳

土器 1は土師器小形の甕。外面上半ナデ、下半ハケメ調査。2は土師器把手付きの椀。外面には横方向のヘラミガキが施される。3は土師器高杯。杯部は深く、内面に放射暗文、外面に横方向のヘラミガキが施される。脚部外面はユビナデ、内面には指頭痕が残る。1～3は、いずれも玄室床面から出土している。

4は須恵器壺、体部は偏平な球形を呈し、口径は小さい。体部上半はカキ目、下半は回転ヘラケズリ。肩部にヘラ記付が見られる。5は脚付壺。体部は肩が張った形態を呈する。脚には段が見られる。透し窓は見られない。4は渡道上層から、5は玄室床面から出土している。

耳環 6～9は銀環、10・11は銅芯であるが、表面は剥落している。6・7は外径約3cm、内径1.7cm。8・9は外径3.1cm、内径1.5cmを測る。いずれも端部は密着している。10・11は外径2.8cm、内径1.9cm。断面は細い。6・7、8・9、10・11がそれぞれ対をなすと考えられる。

ガラス玉 12は白玉状のガラス玉である。色調は赤紫色、透明である。側面は丸いが、上面には製作時に生じたと考えられる凹凸がみられる。玄室床面中央の奥壁寄りから出土している。

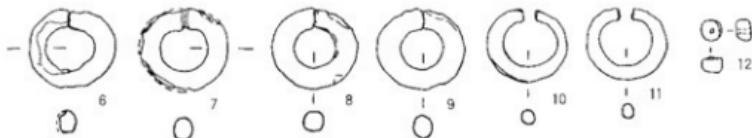


図-57 112号墳出土耳環・ガラス玉(1:2)

鉄製品 112号墳からの鉄製品の出土は、図化し得たもので103点存在し、鉄釘66点、銛37点であった。これらは全て鍛造製である。鉄釘の残存状態は比較的良好で、木目を残すものも認められる。

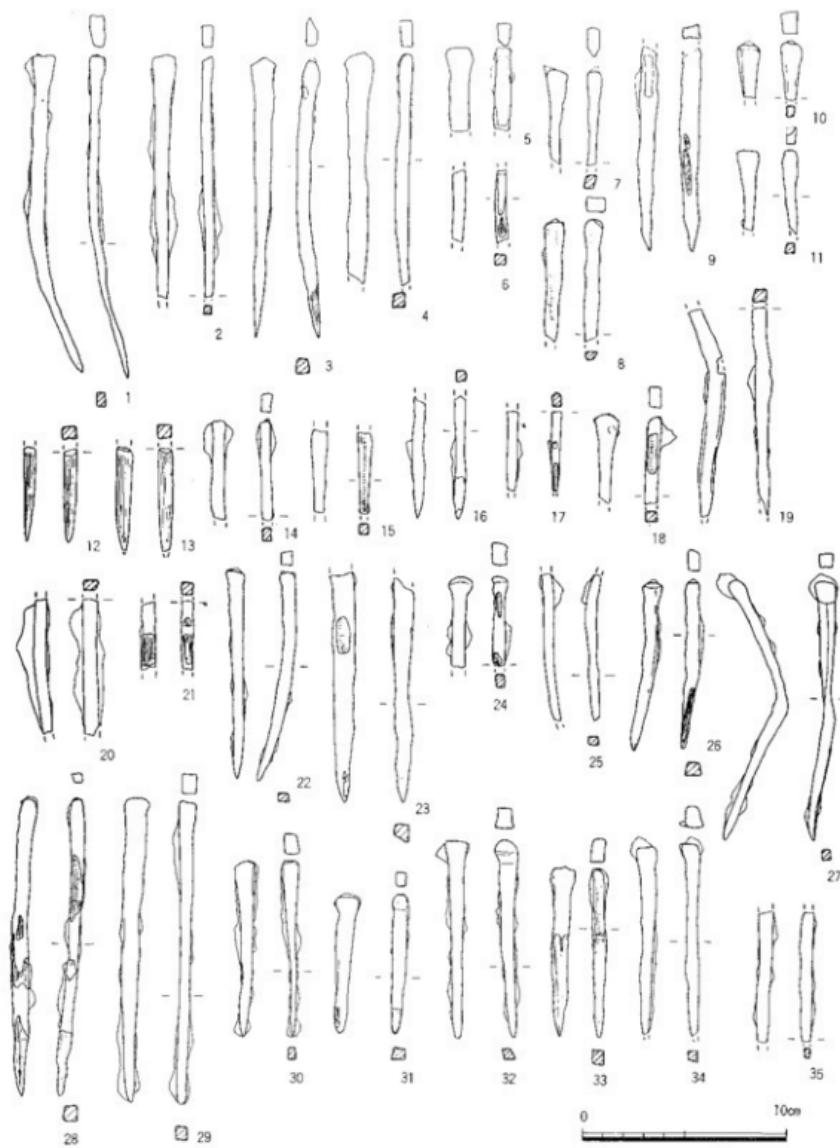
鉄釘①～⑩は、完形品が16点存在する。頭部が残存するものは42点存在する。頭部の成形は⑩の1点が丸頭であるのを除くと全て長方頭である。また、頭部の形態も長方形が最も多い。長さは、完形品の中では10cm以上の大型のものが半数以上を占める。完形品以外のものでも10cm以上のもの（確実に10cmを越えると思われるものを含めて）が12点存在する。また、全体中33点に木目が残存する。そのうち⑪・⑫・⑬・⑭について縦横2者の木目の存在により、その木棺材の厚さが各々5.1cm、3.0cm、3.0cm、3.2cmと判明した。

銛⑯～⑰は、完形品が1点も存在しない。大型品と小型品は概ね、半数ずつ存在する。また木目の残存するものは28点存在するが、銛1点中に縦横2者の木目が残存するものは存在しない。

これらの緊結具の出土状況は原位置を保っているものは少なく、その出土状況をみると奥壁沿いに1棺、左右側壁沿いに各々1棺ずつの計3棺の存在が考えられる。但し、奥棺の存在を考えた位置には鉄釘30点以上、銛10点以上と1棺の緊結具の数としては他の2棺と比較すると多く、この位置には2回以上の埋葬があった可能性もある。しかし、これらは鉄釘のタイプからみると大小はあるものの2分することなく各鉄釘がいずれの棺のものであるかは決し難い。その奥棺については、緊結具の散布状況よりみると奥壁に沿った南北方向に安置されたと考えられる。それらの内、鉄釘⑮～⑯が木棺腐敗後の2次の移動をうけていないと思われる。その鉄釘の出土状況より考えるとこれらは小口部に使用されたものであり、北方向に倒壊したと考えられる。⑮⑯は各々蓋と底板から小口板に打ちこまれたものと考えられる。また、⑮の木目の残存により小口板は縦方向の木目の板を使用しており、また、底板の厚さは5.1cmであるということが推定できる。⑯は蓋から小口板に打ちこんだと考えられるため蓋板は平坦な板の使用が考えられる。⑯についても、⑮の縦方向の木目より次の可能性が考えられる。1つは、⑮⑯と同様に蓋板から小口板に鉄釘を打ち込んだ場合である。この場合、中央に⑮⑯の様な大型の鉄釘を打ちこみその間に小型の(⑯)を打ちこんだと考えられる。もう1つは、両側板を小口板ではさみこみ小口より側板に(⑯)を打ちこんだ場合である。鉄釘⑮⑯がこの棺に使用されたものとすると、これらの2者による使用方法が考えられる。

以上、2つの可能性を想定したが、現状ではどちらか明確にすることは不可能である。この様な縦の木目の残存する鉄釘は約10点存在する。また、横方向の木目が残存する鉄釘については多くの可能性が考えられるため、各鉄釘の使用場所を復元することは不可能である。

銛については、奥棺に使用されたと考えられるものの中にも先述のように大小2タイプが存在するが、E号墳でみられたように1棺中に大小両タイプのものを使用していることを考える



图·58 112号墳出土鉄釘①

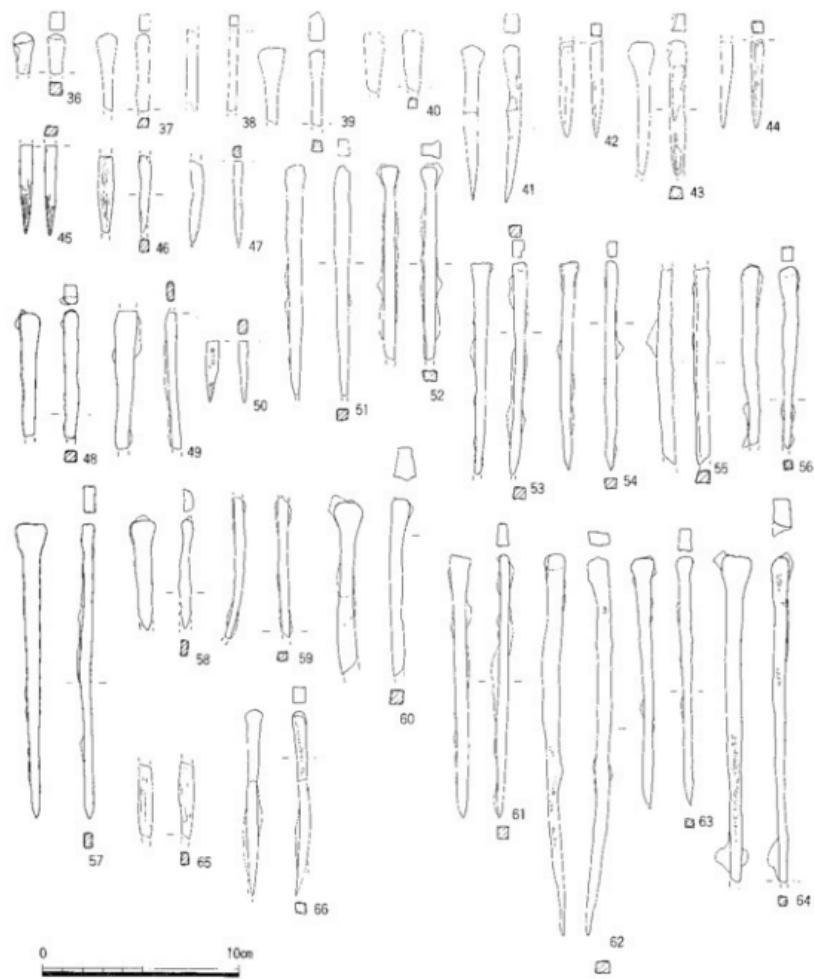


図-59 112号墳出土鉄釘②

と鉄釘と同様にこれらの鍔がいずれの柵のものであるか決し難い。また、木目が残存するものも全て横方向のものであり使用場所等も不明である。

柵の大きさについては、もう一方の小口部は鉄釘①②③、鍔⑧⑨がまとまって出土した辺りと思われる。⑨には、縦横向者の木目が残存しており、反対側の小口部で考えた構造と同じ可能性が考えられる。これらの2つの場所を小口部とした場合、長さは、約1.5mと推定できる。

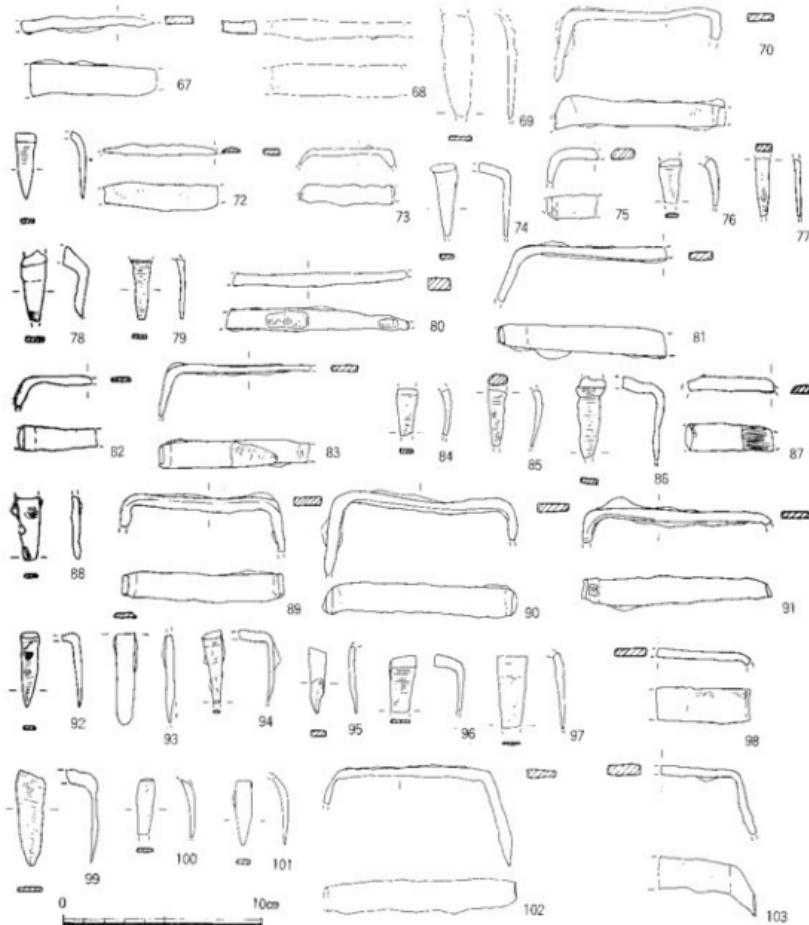


図-60 112号墳出土木棺

次に、左側壁部の棺についてみると、この棺は緊結具の散布状況、銅環の出土地点から考え木棺の位置が概ね想定でき、棺は東西方向に安置されたと考えられる。この棺に使用されたと考えられる緊結具は、鉄釘約15点、鎌約10点と思われるが、2次的移動をうけたものが多い。鎌は、手部が上向きに出土しており、原位置を保っている可能性が高く、側板で底板をはさみこみ、それを下から打ちこんだかあるいは、底板を数枚組み合わせて1枚の板とするために打ちこんだものとの2者が考えられる。この場合、底板の厚さは3.5cm以上あると考えられる。

また、鉄釘⑩は、縦横2者の木目の残存により木棺材の厚さが3.0cmと推定できるが、どの部材かは不明である。また、奥壁側で出土した鉄釘⑪もその木材の厚さが3.0cm、⑫は3.2cmと推定され、同一の木棺に使用された可能性もある。また、鉄釘⑬～⑭のうち⑬⑭に縦の木目が残存するが、この辺が小口部と推定される。出土状況からは鉄釘の使用場所は不明である。

鎧は、大小2タイプに分かれるが、先述の⑮が大型のものであり、鎧の大小には使いわけがあったと考えられる。

右側壁側の棺は、これも左側壁側の棺と同様に緊結具の出土状況、耳環の出土地点から考えると木棺の位置が東西方向に安置されたと考えられる。この棺に使用されたと考えられる緊結具は、鉄釘、鎧とも10本前後と思われる。2次的移動をうけたものが多く木棺の復元までには至らない。

鉄釘は、今回出土の中で最も長いもの⑯を含み、この棺に使用したと考えられる鉄釘は約半数が10cmを越す大型のものである。

鎧も大小約半数ずつ存在し、ほとんどのものに木目が残存するが、全て横方向のものである。

以上、112号墳出土の鉄製品（緊結具）についてみてきたが、2次的移動をうけているものが多く木棺の完全な復元是不可能であったが、これらの出土状況によって木棺3～4棺が存在したこと、また、一部原位置を保っていると考えられる緊結具と鉄釘に残存する木目の検討により部分的にではあるが木棺を復元することができた。

No.	成形	形	長さ(cm)																
1	長頭	長方形	15.9	16			(6.1)	31	長頭	長方形	6.9	46			(4.0)	61	長頭	舌形	13.6
2	長頭	長方形	(13.0)	17			(3.9)	32	長頭	舌形	9.8	47			(4.3)	62	長頭	長方形	19.7
3	長頭	舌形	13.7	18	長頭	長方形	(4.4)	33	長頭	長方形	8.3	48	長頭	長方形	(6.6)	63	長頭	長方形	(12.7)
4	長頭	長方形	(11.4)	19			(10.3)	34	長頭	長方形	(9.5)	49			(7.0)	64	長頭	長方形	(16.9)
5	長頭	五角形	(4.2)	20			(6.7)	35			(6.5)	50			(3.2)	65			(4.0)
6			(3.6)	21			(3.4)	36	長頭	長方形	(2.1)	51	長頭	長方形	(11.9)	66	長頭	長方形	(9.6)
7	長頭	五角形	(4.6)	22	長頭	方彌	10.4	37	長頭	長方形	(4.0)	52	長頭	長方形	(10.0)				
8	長頭	長方形	(6.1)	23			(11.3)	38			(4.2)	53	長頭	長方形	(10.9)				
9			(10.1)	24	長頭	長方形	(4.5)	39	長頭	長方形	(4.0)	54	長頭	長方形	10.8				
10	長頭	長方形	(2.8)	25			(7.3)	40			(3.1)	55			(11.1)				
11	長頭	長方形	(4.1)	26	長頭	長方形	(8.3)	41	長頭	長方形	5.1	56	長頭	長方形	(9.4)				
12			(4.6)	27	長頭	方彌	13.8	42			(4.9)	57	長頭	長方形	14.2				
13			(5.1)	28	丸頭	舌形	14.7	43	長頭	長方形	(7.0)	58	長頭	長方形	(5.6)				
14	長頭	長方形	(4.9)	29	長頭	長方形	15.0	44			(4.6)	59			(7.2)				
15			(4.1)	30	長頭	長方形	8.6	45			(4.6)	60	長頭	舌形	(9.2)				

表-2 112号墳出土鉄釘観察表 () は残存長

未完成横穴-2

上層から土師器の直口壺が1点出土している。口縁部は斜上方へまっすぐに立ち上がるが端部を欠く。体部は下ぶくれとなり、平底状を呈する。(図63-1)

朝顔形埴輪の体部から頸部にかけての破片が出土している。(1) 内外面共にナデ調整、頸部に断面三角形の凸帯がめぐる。体部の凸帯の突出土は高い。

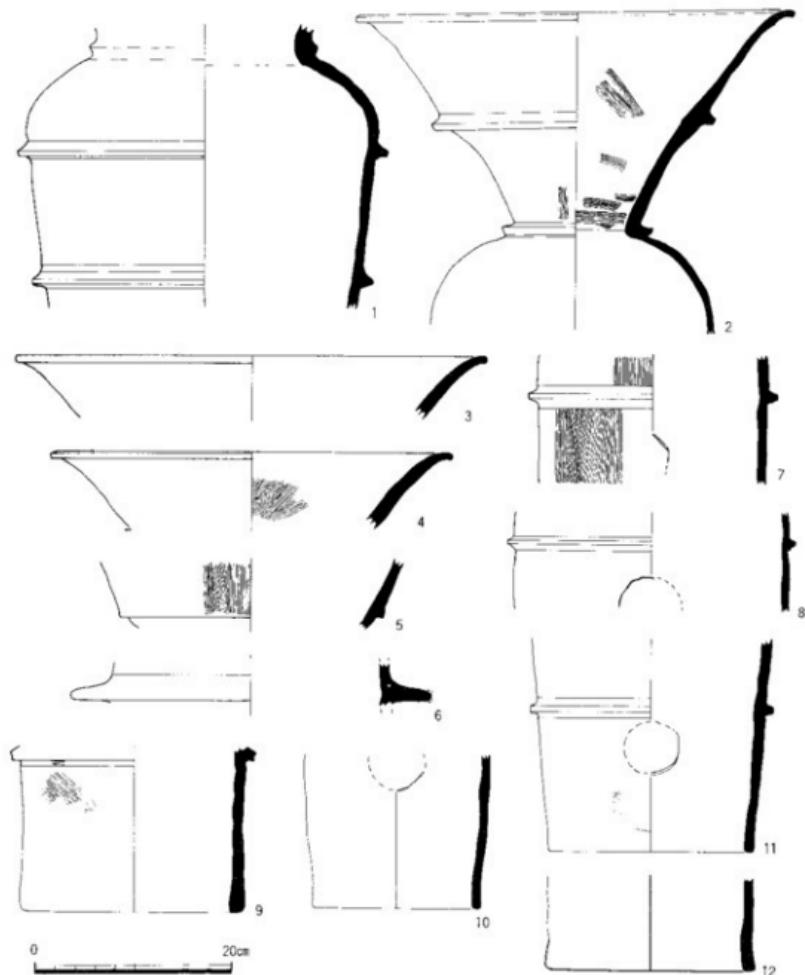


図-61 未完成横穴-2・3出土埴輪

未完成横穴-3

2~12は未完成横穴-3から出土した埴輪片である。

2は1に比して、体部や頸部の直径が小さく、体部最大径は28.8cm、頸部径13.0cmである。口徑は44.6cm。この数値や形態の特徴は、1985年度の高井田川改修工事に伴う調査で出土した壺形埴輪に酷似しており、おそらく壺形埴輪であろう。⁽¹¹⁾ 口縁部は斜外方へまっすぐにび、端部は水平に近く外反する。口縁部中央と頸部に1条の凸沿がめぐる。外面は表面剥離が激しく、調整は不明であるが、一部にタテハケが残る。口縁部内面は左上がりのハケメ、頸部内面は横方向のハケメ、体部内面はナデ調整である。

3・4は朝顔形、もしくは壺形埴輪の口縁部である。口縁端部は水平に外反し、2と同形態となる。口徑はそれぞれ48.0cm、41.0cmとなり、2の口徑に近い数値となる。どちらも、壺形埴輪の口縁部ではないかと思える。3は内外面共にナデ調整。4は内面に細かいタテハケを残すが、外面の調整は不明。

5は形態を明らかにできないが、二重口縁の壺形埴輪の口縁部ではないかと思える。外面に凸沿状の段がみられるが、粘土紐を貼り付けたものではなく、段として意識されたものである。段より上部は細かいタテハケ、下部はナデを施す。内面はナデ調整。

6は壺形埴輪の体部に取り付く鈎部分であろう。鈎の厚さは1.4cm、突出の長さは4.1cmである。体部径は28.8cm。1985年度の調査で出土した壺形埴輪には鈎の剥離痕が残っており、その位置から推定すると、鈎は肩部直下に取り付いたようである。

7・8は円筒埴輪の体部。しかし、円筒埴輪の口縁部と確認できるものが全く出土していないため、朝顔形埴輪の体部である可能性が強い。7の体部径は約23.4cm。凸沿は高さ1.1cmでタテハケ。内面はナデで仕上げる。8の体部径は約28.2cm。凸沿高約0.9cmでやはり低い。円形の透し孔を伴う。外面の調整不明、内面はナデ調整。

9~12は体部から底部にかけての破片である。凸沿を伴うものは朝顔形埴輪の可能性が強く、凸沿を伴わないものは壺形埴輪の可能性も考えられる。9・11の凸沿も低く、9の凸沿はやや垂下する。10・11には円形の透し孔がみられる。いずれも底部はやや厚くなるが、ナデで仕上げており、特別な調整は見られない。底径はそれぞれ22.8cm、17.2cm、21.2cm、21.5cmであり、10が壺形埴輪の底部である可能性が極めて強い。

1~12の埴輪は、いずれも黒斑を有する野焼きの埴輪である。明らかに横穴に伴う埴輪ではなく、時期は4世紀末葉前後ではないかと思える。未完成横穴-2・3の南側には家屋が壁っていたため、かなりの削平が行われている。この家屋付近、すなわち最高所におそらく古墳が存在したと考えられる。家屋建設時、もしくはそれ以前の削平に伴って、くぼみとして残っていた未完成横穴-2・3内に削平土と共に転落したものと考えられる。

土塙-1

土塙-1から、家形埴輪の一部(14)が樹立状態で出土した。妻部分2間、平部分1間の壁面の一部である。土塙-1の大きさなどから、29cm×38cm、2間×2間の建物と想定される。妻は5~6cmの太さの柱を表現し、柱の間に約6cm四方の窓を切り込んでいる。窓下端から約5cm下方に横方向のヘラ描きの線が施される。この部分には約2.5cmの厚さの床を表現する凸帯状の粘土板が貼り付けられていたのであろう。更にその下方にも方形の窓状の切り込みが認められ、二階、もしくは高床を表現したものと思える。平側もほぼ同形態となるが、柱の太さが約6.6cm、柱間が約8.6cmとやや規模が大きい。外面には全体に細かいハケメが残り、内面はナデ調整である。

13は土塙-1東側から出土した家形埴輪の屋根の一部である。胎土、焼成、大きさ等から14と同一個体であることは間違いない。柱の太さ等から、14の残存していた妻と反対側の妻の屋根と考えられる。屋根は寄棟式であるが、頂部にまっすぐ立ち上がる突起部分がみられ、おそらく入母屋となるであろう。全形は知り得ないが、1~12の埴輪に伴う時期であろう。また土塙-1に2次的に樹立された可能性が高いものである。

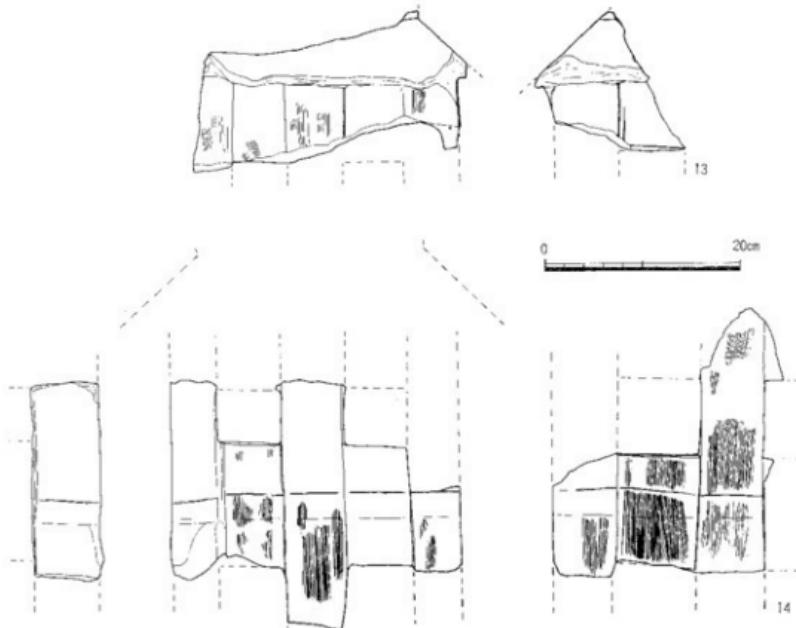


図-62 土塙-1 出土地輪

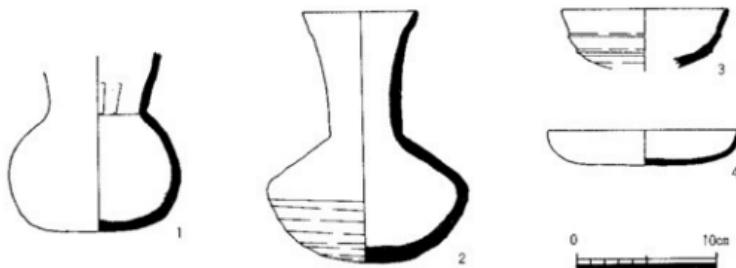


図-63 遺構内出土遺物

土塚-2

土塚-2からは須恵器の長頸壺(2)が完形で出土している。体部は外方へ強く張り出す。体部下半回転ヘラケズリ、他は回転ナデ調整。

また、表探遺物ではあるが、須恵器の高杯杯部(3)も土塚-2に伴う遺物である可能性が強い。外面には2段の弱い棱がみられ、下半は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ調整。

土塚墓-1

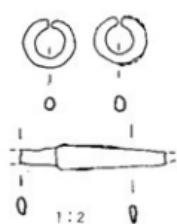
土塚墓-1からは土師器杯(4)と金環1対が出土している。

土師器杯は表面の剥離が著しく、口縁端部の形態と内外面の調整が明らかでない。杯部は浅く、緩やかに湾曲しながら口縁部に至る。

金環も残存状態が悪く、金箔は一部に残るのみである。いずれも外径約1.9cm、内径1.0cm、断面は直径0.4cm前後の円形である。

土塚墓-2

土塚墓-2からは、土師器杯と刀子が出土しているが、杯は細片となり、図化不可能であった。



刀子は刃先と柄端を欠く。刃と柄の境は段をなす。刃の残存長3.9cm、柄の残存長1.3cm。刃の断面は二等辺三角形状を呈し、柄の断面は梢円形を呈する。木質は全く遺存していなかった。

図-64 土塚墓-1・2
出土耳環・刀子

古墓群

古墓群から出土した遺物は一括し、土器、玉類、鉄製品の順に記述を進めていくことにする。

土器

古墓-1 藏骨器は須恵質の壺(1)と縁釉陶器の椀(2)であり、副葬品として3~8の土師器杯が出土している。須恵質の壺(1)は体部の張りが弱く、底部は平底である。口縁部は焼成後に打ち欠かれており、不明。外面には3条の沈線がめぐる。外面はタテ、もしくは左下がりの平行叩きを施し、底部付近は横方向の回転ヘラケズリの後、ナデ。内面は調心円の当て具痕をナデ消している。縁釉陶器の椀(2)は多数の破片になっており、暗緑色の釉の剥落も著しい。高台は低く、やや外方へのびる。器高は低く、口縁部は外反しない。

3~8の土師器杯は、いずれも同一形態である。器高は低く、全体に丸味を有する。外面は指頭調整、内面はナデ、口縁部はヨコナデを施す。

古墓-2 藏骨器の須恵器壺(9)は体部下半を残すのみである。低い高台を有し、体部は斜上方へまっすぐにのびる。内外面共に回転ナデ調整。

古墓-3 須恵器の壺(10)を藏骨器とし、その蓋として土師器杯(11・12)を使用している。壺(10)は非常に低い高台を伴い、肩部は直角に近く張り出す。頸部直径は大きく、まっすぐに立ち上がり外方へ開くものと考えられる。体部は内外面共に回転ナデ調整。底部近くは回転ヘラケズリ調整。底部は内外面共にナデで仕上げるが、内面は凹凸が顕著である。土師器杯(11)は3~8と同形態であるが、底部はやや平底状となる。土師器高台付きの杯(12)は、高台部分のみ岡化可能であった。高台は高く、外方へふんばる形態をなす。

古墓-4 須恵器の広口壺(13)が藏骨器として使用され、土師器杯(14・15)が埋土内から出土している。広口壺(13)は平底を呈し、体部最大径はやや上位に位置する。頸部は太く、外反する口縁部は端部でつまみ上げた形態となる。体部は内外面共に回転ナデ調整。外面底部近くのみ回転ヘラケズリ。底部内面ナデ仕上げ、外面は未調整である。

土師器杯(14・15)は口径が13cm強とやや大きい。器高も高く、底部は平底状を呈する。15は口縁部を2段にヨコナデする。

古墓-5 須恵器の短頸壺(16)が藏骨器、灰釉陶器の皿(17)をその蓋として使用したものである。須恵器の短頸壺(16)は有蓋器種と思われる。体部は丸味を有し、肩部の張りは強い。口縁部は強く外反し、高台は高く、ハの字形に外方へふんばる。内外面共に回転ナデ調整。体部外面の下方は回転ヘラケズリ調整。灰釉陶器の皿(17)は高台を有し、口縁部はまっすぐにのびて端部を丸くおさめる。内外面の上半に淡緑灰色の釉が施される。底部外面に回転糸切り痕を残す。他は回転ナデ調整である。

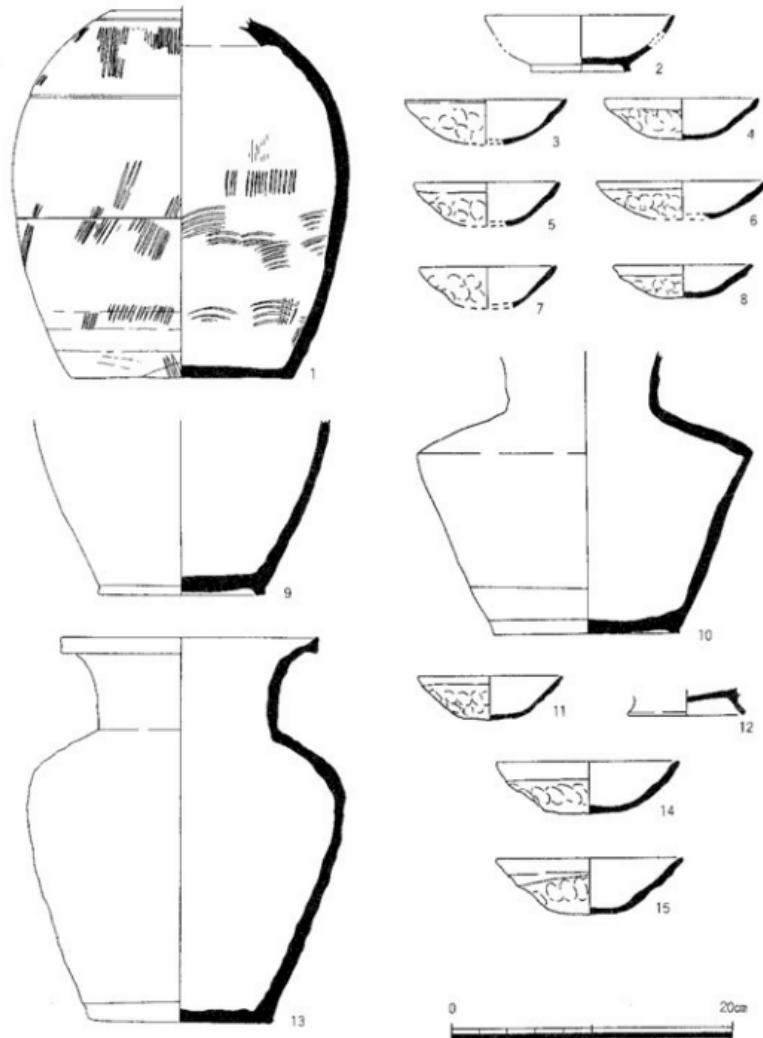


図-65 古墓 1 ~ 4 出土遺物

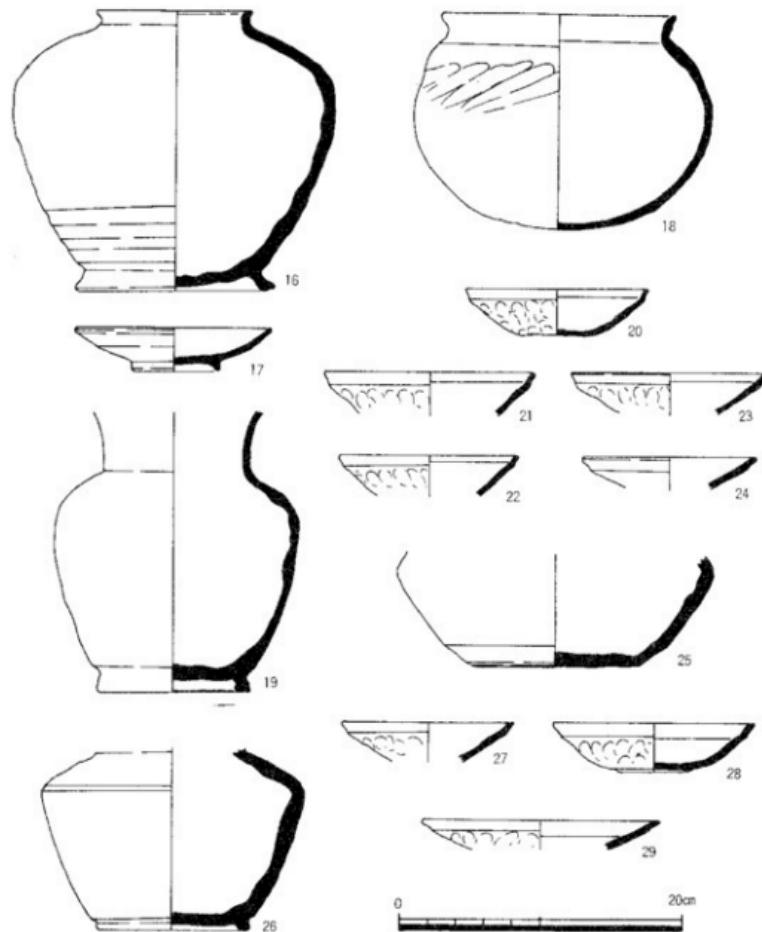


図-66 古墓5～11出土遺物

古墓-6 上部器の甕(18)が藏骨器として使用されていた。甕は偏平な球形を呈し、口縁部は短く、外反する。体部外面は左下がりの指ナデによって調整し、内面は丁寧なナデを施す。口縁部は強いヨコナデを施す。外面は剥離がみられる。色調は暗黄褐色、一部に黒斑が見られる。焼成は良好であるが、器壁が薄いために非常にもろい。

古墓-7 須恵器の壺(19)が藏骨器であり、藏骨器内から土師器杯(20)、埋土内から上師器杯(21~24)が出土している。須恵器の壺(19)は広口壺と思われる。断面が方形状の高台を有し、肩部の張りは弱い。頸部は太く、口縁部は外反するが、端部を欠損する。内外面共に回転ナデ調整。

土師器の杯(20~24)は、ほぼ同一形態である。体部外面指頭調整、内面ナデ調整。口縁部は強いヨコナデを施す。

古墓-9 藏骨器の須恵器壺(25)は上半を欠失しており、全形が不明である。器高は低く、肩部の張りは強い。底部は平底である。体部は回転ナデ、外面底部付近のみ回転ヘラケズリ。底部は内外面共にナデ調整であるが、ナデは雑であり、内面には凹凸が多数見られる。

古墓-11 須恵器の壺(26)が藏骨器として、土師器の杯(27~29)が蓋として使用されていた。須恵器の壺(26)は、低い高台を有し、肩部は張っている。体部は丸味がみられず、直線的になる。口縁部は焼成後に打ち欠かされている。肩部外面には1条の四線がめぐる。内外面共に回転ナデ調整。土師器の杯(27~29)は既述の杯と同形態、同一手法であるが、28は断面三角形の非常に低い高台を有する。

古墓-12 須恵器の壺(30)を藏骨器とし、土師器の杯(32・33)を蓋として使用したと考えられる。縁粒陶器の椀(31)は副葬品であろう。須恵器の壺(30)は瓶形を呈する。非常に低い高台を伴い、底部は平底である。体部は丸味を有し、肩部の張りは小さい。頸部は細く、外反する口縁部は端部でつまみ上げ気味に段をなす。体部は回転ナデ、内面は特に強い回転ナデを施す。底部外面は回転糸切り痕を残す。縁粒陶器の椀(31)は深く、高い高台を有する。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。全面回転ナデ調整。釉は暗緑色、胎土は乳白色を呈する。土師器の杯(32)は低い高台を伴い、外面に規則的な指ナデを施す。杯(33)は、口径が大きく、底部は平底となる。口縁部は器壁が非常に薄く、端部で肥厚する。

古墓-13 須恵器の有蓋二耳壺(34・35)が藏骨器として使用されていた。蓋(34)は幅半なつまみを有し、端部で段をなす。天井部は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整である。三耳壺(35)は張り出した肩部に1条の四線がめぐり、円孔を有する方形の耳を三方に伴う。口縁部は短く直立し、底部は平底である。体部は左下がりの平行叩きの後、回転ナデを施す。体部下方は左上がりのハケメがみられる。内面、および口縁部は回転ナデ、底部はナデを施すが、雑である。

古墓-14 土師器の壺(36)を藏骨器に、土師器の杯(37)をその蓋に使用していた。壺(36)は口縁部を欠失し、体部は須恵器の広口壺の体部に酷似する。底部は平底。肩部に橢円形の突起がみられ、対向する位置にも突起の剥落痕が認められる。外面は左上がりのハケメ、内面はナデ調整、底部は内外面共に雑なナデを施す。杯(37)は低い高台を有し、体部外面は指頭押圧による調整である。

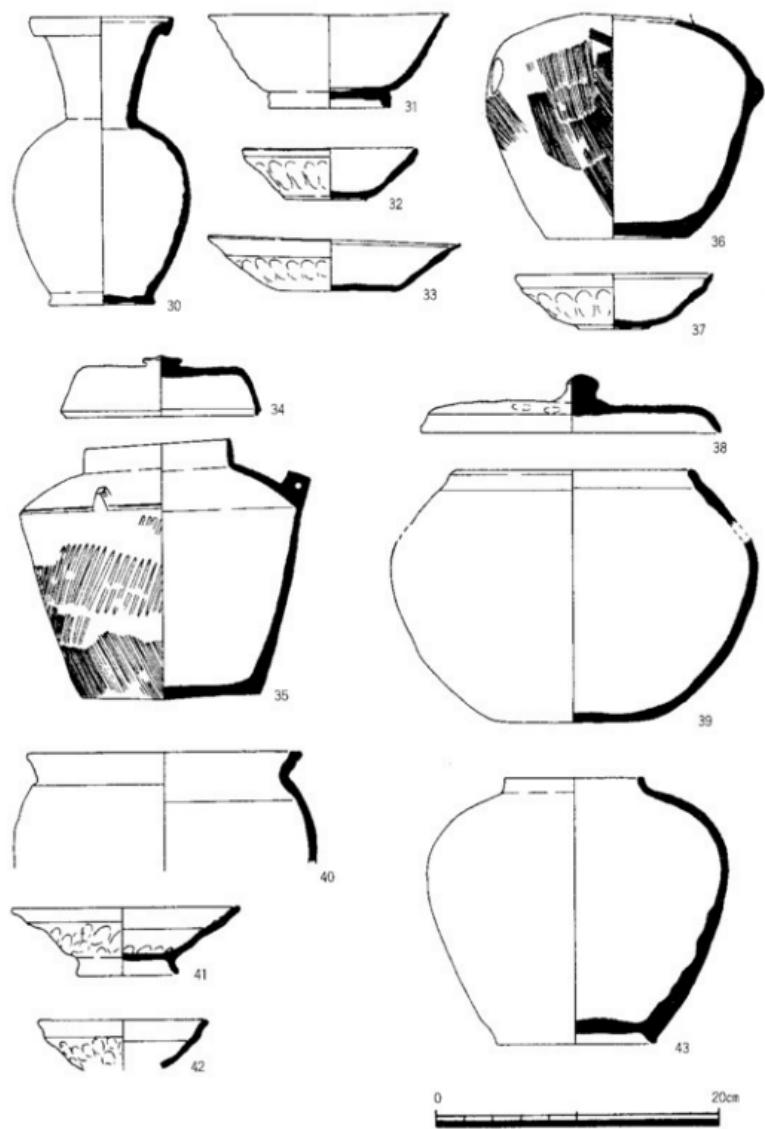


図-67 占墓12~19出土遺物

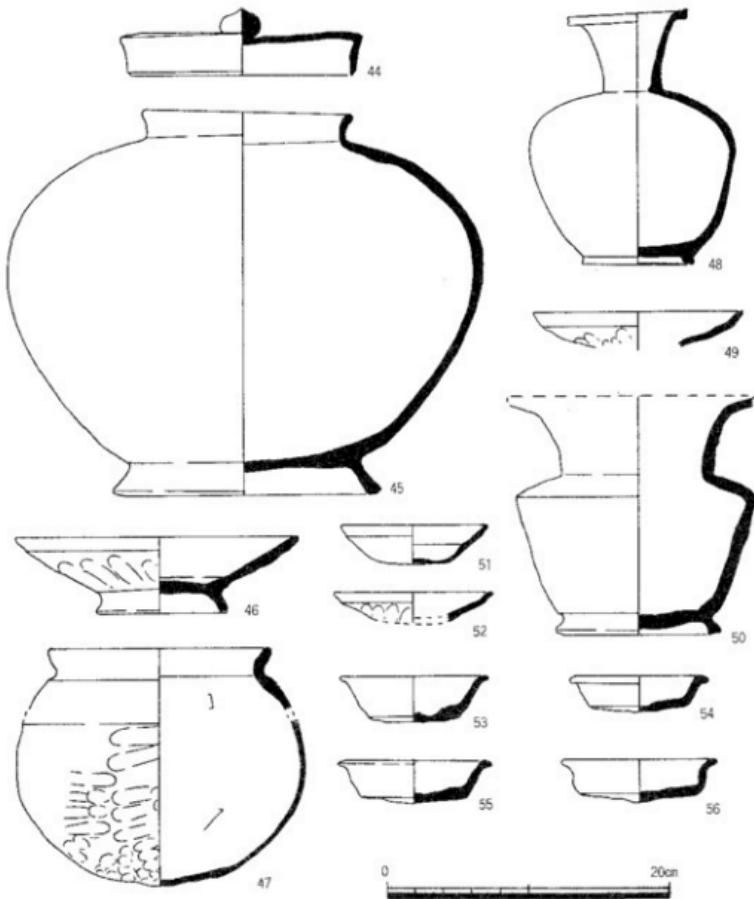


図-68 古墓20~27・溝-1 出土遺物

古墓-15 上部器の有蓋無頸壺(38・39)を蓋骨壺とする。蓋(38)は宝珠形とは言い難い、くずれたつまみを有する。平坦な天井部に浅い口縁部が続く。天井部は指ナデと指頭押圧による調整、内面はナデ、口縁部はヨコナデを施す。無頸壺(39)は、球形に近い体部に、体部からまっすぐにのびた口縁部が取り付く。口縁部はヨコナデを施し、端部を丸くおさめる。体部外面はナデと指頭押圧による調整、内面は丁寧なナデによって仕上げる。底部もナデ調整であり、やや平底状をなす。

古墓-18 土師器の蓋(40)を藏骨器、土師器の杯(41)を蓋に使用していた。藏骨器内からは、土師器の杯(42)が出土している。蓋(40)は口縁部から体部の一部を残すのみである。蓋(18)と同形態のものであろう。外面はナデと指頭押圧による調整、内面はナデ調整。41は高台を有する杯。高台は高く、ハの字形を呈する。口縁部は強いヨコナデによって、弱い段をなす。土師器の杯(42)は、他の古墓から出土した杯と同形態のものである。

古墓-19 須恵器の短頸壺(43)が藏骨器として使用されていた。短頸壺は断面台形の高台を伴い、口縁部は短く、緩やかに立ち上がる。体部最大径はかなり上位に位置する。内外面共に回転ナデ調整。

古墓-20 藏骨器として、須恵器の有蓋短頸壺(44・45)が出土している。蓋(44)は丸く、大きい宝珠形のつまみを伴う。口縁部は天井から直角に屈曲し、端部は段をなす。天井部は回転ヘラケズリ、口縁部はヨコナデ、内面は不定方向のナデである。短頸壺(45)は球形の体部を呈し、体部最大径は器高のほぼ中央に位置する。高台は非常に高く、外方へふんばる形態を呈する。口縁部は短く外反し、端部は丸くおさめる。体部は回転ナデで仕上げるが、外面上半と内面は非常に丁寧なナデを施し、外面下半のナデはやや難である。

古墓-23 土師器の蓋(47)を藏骨器、土師器の杯(46)をその蓋として使用する。杯(46)は高い高台を有し、口縁部は斜め上方へまっすぐにのびる。体部外面は斜め方向の指ナデ、内面はナデ調整。蓋(47)は球形の体部に短く外反する口縁部を伴う。体部外面指ナデ、底部は指頭押圧による調整。体部上方はナデ、口縁部はヨコナデを施す。内面は丁寧なナデ調整であるが、工具の当たり痕がみられる。

古墓-24 藏骨器として完形の須恵器の壺(48)が出土している。壺は瓶形を呈し、低い高台を有する。肩部は強く張り、細い頸部から外反する口縁部に至る。口縁端部は水平に外反した後、つまみ上げるような形態を呈する。口縁部、体部は全体に回転ナデ調整であるが、体部内面の調整は不明である。底部と高台下面にはヘラ切り痕が認められる。

古墓-25 墓址上面から土師器杯(49)が出土している。杯は浅く、口縁部はやや内方へ屈曲する。外面は指ナデ、内面はナデによって調整する。口縁部は強いヨコナデを施す。

古墓-27 藏骨器として須恵器の広口壺(50)が使用され、その蓋として土師器の杯(51)が使用されていた。土師器の杯(52)は理士内から出土している。須恵器の広口壺(50)は、比較的高い高台を有し、肩部は強く張り出す。頸部は太く、まっすぐ立ち上がった頸部は強く外反する口縁部に至るが、口縁端部を欠損する。口縁部、体部は回転ナデ調整、底部は内外面共に難なナデで仕上げる。土師器の杯(51)は、ややくぼんだ平底から斜上方へまっすぐにのびる口縁部を有する。内外面共にナデ、口縁部ヨコナデ調整。もう1点の杯(52)は、51に比してやや浅く、口径は大きい。底部を欠損するが、平底に近い形態となるであろう。口縁部はヨコナデによって弱い段をなし、体部は指頭痕が顕著に残る。

溝-1 53・56は溝-1から出土した須恵器の杯である。底部には凹凸がみられ、安定性を欠く。形態は、底部から斜上方へ立ち上がった口縁部が端部で強く屈曲するもの(54・55)と強く外反するもの(53・56)がみられる。体部は回転ナデ、底部内面は一方向のナデ、底部外面は回転ヘラ切り未調整。同形態の杯が多数出土している。

玉類

古墓-3 古墓-3の藏骨器内から水晶製切子玉が1点出土している。⁽¹⁷⁾両端が細く、中央がふくらみ、横断面は六角形となる。中央には円形の貫通孔が穿孔されている。孔壁には縱方向の細かい削りの痕跡がみられる。色調は無色透明。表面は非常に平滑に仕上げられているが、内部には数箇所に細い亀裂が認められる。長さ2.85cm、中央での最大幅2.0cm、端部での幅1.2cm、孔径0.5cmである。熱は全く受けていない。

古墓-11 古墓-11の藏骨器内からも水晶製の玉が出土している。形態は涙滴形とでも呼ぶべきものであり、卵形の先端を切り取った形態である。上端の平面形は両端の尖った橢円形状を呈し、ほぼ平坦な面となる。側面は丸味をおびるが、両側面の境は鋭い棱をなす。側面上方に円形の貫通孔が穿たれる。長さ1.9cm、幅1.4cm、厚さ1.05cm、上端は長径0.7cm、短径0.5cm、孔径は0.15cmである。色調は無色透明、やはり内部に多数の亀裂が認められる。

古墓-20 古墓-20の藏骨器内底部から24個のガラス玉が出土した。ガラス玉の平面形は円形を呈し、断面は上下端が平坦で偏平な橢円形状を呈する。直徑に比して孔径は大きい。穿孔した際に溶融状態のガラスが立ち上がった部分が認められる。24個体を平均すると、直徑6mm、厚さ4mm、孔径2.5mmとなる。色調は緑色透明で、表面は滑らかである。藏骨器の底部におかれていいため、火葬骨から溶け出したカルシウム分が表面に付着し、白色の皮膜となっているものが多く認められた。

古墓群から出土した顯著な副葬品としてとりあげができるものは、これらの玉類のみであり、29基の古墓中、わずか3基に認められるにすぎない。概して、古墓からの副葬品は貧弱であるといえよう。

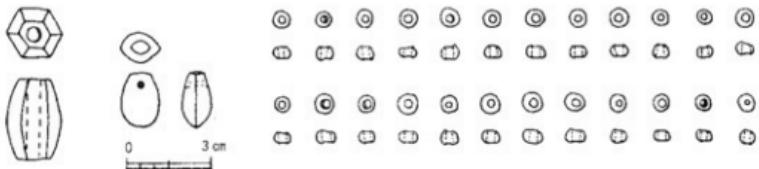


図-69 古墓出土玉類

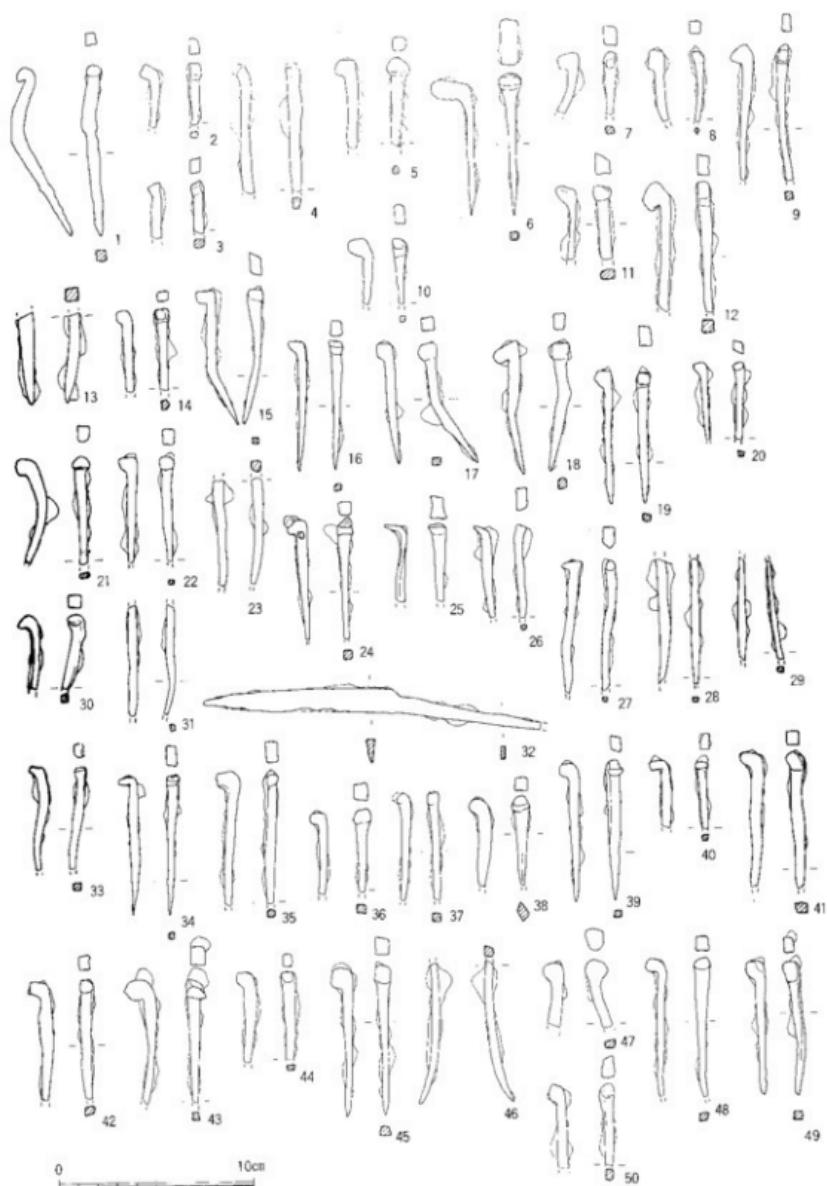


図-70 古墓出七鐵製品①

鉄製品

古墓群からの鉄製品の出土は、図化し得たもので72点存在し、鉄釘71点、刀子1点であり、それらの内、完形品が13点存在する。また、これらの鉄製品は全て鍛造製である。

鉄釘①～⑩⑪～⑯は、古墓-1、3、5、6、7、12、15、16、19、20、24、25、27、28、29から出土し、数的に古墓-16からの出上が最も多く、次いで、古墓-6からの出土が多かった。頭部の成形は、⑦の鉢頭形の1例を除くと全て頭部を片側へ屈曲させた折頭形である。また、頭部の形態は長方形、方形、台形、円形、多角形を呈するものがあり、長方形のものが最も多く、半数以上を占める。次いで、方形のものが多い。長さは、7cmを前後するものが多い。また、古墓毎にみてもその数値は近似したものが出土している。これらも、7cmを前後するものが多い。これらは、先述の112号墳と比較すると小型である。また、本目が残存するものは1点も存在しないため木棺の復元は不可能である。これらの鉄釘の不規則な出土状況や古墓の墓域の形状を考えるとこれらは葬骨器を納める木槨に打たれたものではなく、遺体を納めた木棺に打たれたものを葬骨器や炭と共に墓壇内に埋納したと考えられる。

刀子⑯は、古墓-12から出土した。柄の一部を欠失しており残存長は、17.3cmを測る。刃部は完存し、10.0cmを測る。断面は三角形を呈する。幅1.2cm、厚さ0.4cmを測る。茎部は、残存長7.3cm、幅0.7cm、厚さ0.2cmを測る。刃部と茎部の間は明瞭であるが、そこを境に全体的に刃刃側へ湾曲する。

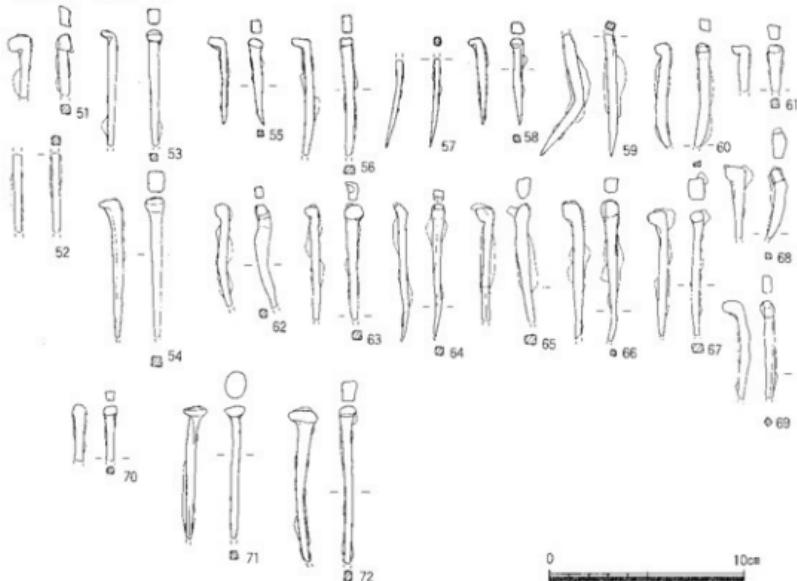


図-71 古墓出土鉄製品②

No	出土墓	成形	形態	長さmm	No	出土墓	成形	形態	長さmm	No	出土墓	成形	形態	長さmm
1	古墓1	折頭	方形	8.7	25	古墓7	折頭	長方形	(4.0)	50	古墓16	折頭	台形	(4.4)
2	古墓3	折頭	長方形	(3.2)	26	古墓7	折頭	長方形	(4.7)	51	古墓19	折頭	台形	(3.2)
3	古墓3	折頭	長方形	(2.9)	27	古墓7	折頭	五角形	(6.9)	52	古墓19			(4.0)
4	古墓3			(7.6)	28	古墓7			(6.4)	53	古墓20	折頭	長方形	(6.0)
5	古墓5	折頭	方形	(4.6)	29	古墓7			(5.3)	54	古墓20	折頭	長方形	(7.1)
6	古墓5	折頭	長方形	7.1	30	古墓12	折頭	方形	(3.8)	55	古墓24	折頭	長方形	4.4
7	古墓5	折頭	長方形	3.2	31	古墓12			(5.7)	56	古墓24	折頭	長方形	(4.5)
8	古墓5	折頭	方形	(3.6)	33	古墓15	折頭	長方形	(5.3)	57	古墓24			(4.5)
9	古墓5	折頭	長方形	(7.0)	34	古墓15	折頭	長方形	7.2	58	古墓24	折頭	台形	4.5
10	古墓5	折頭	長方形	(3.4)	35	古墓16	折頭	長方形	(6.9)	59	古墓24	折頭		(6.9)
11	古墓5	折頭	台形	(3.8)	36	古墓16	折頭	長方形	(4.2)	60	古墓24	折頭	台形	(5.3)
12	古墓5	折頭	長方形	(6.8)	37	古墓16	折頭		(5.6)	61	古墓24	折頭	長方形	(2.4)
13	古墓6	折頭	方形	(4.7)	38	古墓16	折頭	方形	(4.5)	62	古墓25	折頭	長方形	(5.3)
14	古墓6	折頭	台形	(4.2)	39	古墓16	折頭	長方形	(7.2)	63	古墓25	折頭	長方形	(5.9)
15	古墓6	折頭	台形	6.9	40	古墓16	折頭	長方形	(3.5)	64	古墓25			(6.9)
16	古墓6	折頭	長方形	6.7	41	古墓16	折頭	方形	(7.0)	65	古墓25	折頭	五角形	(6.1)
17	古墓6	折頭	方形	6.3	42	古墓16	折頭	長方形	(6.2)	66	古墓25	折頭	方形	(7.2)
18	古墓6	折頭	長方形	6.9	43	古墓16	折頭	長方形	(6.4)	67	古墓25	折頭	長方形	(6.4)
19	古墓6	折頭	長方形	6.9	44	古墓16	折頭	長方形	(4.7)	68	古墓25	折頭	長方形	(3.9)
20	古墓6	折頭	長方形	(4.0)	45	古墓16	折頭	台形	7.7	69	古墓25	折頭	長方形	(5.1)
21	古墓6	折頭	台形	(5.6)	46	古墓16			(7.3)	70	古墓27	折頭	方形	(2.9)
22	古墓6	折頭	長方形	(5.5)	47	古墓16	折頭	圓形	(3.5)	71	古墓28	折頭	圓形	(6.8)
23	古墓6	折頭	台形	(5.4)	48	古墓16	折頭	方形	(7.1)	72	古墓29	折頭	長方形	(8.1)
24	古墓6	折頭	方形	(6.2)	49	古墓16	折頭	長方形	6.9					

表-3 古墓出土上鉄釘観察表 () は残存長

包含層出土遺物

土器・埴輪 古墓群の包含層から1~11の遺物が出土しており、調査地区東方から12~14の遺物が出土している。

須恵器杯蓋(1)は古墓・3~12の下層から出土した。蓋内面のかえりは消失し、端部が下方へ屈曲する。つまみは偏平である。8世紀前葉~中葉の杯蓋と考えられ、古墓・3~12の上限を示すと共に、古墓群形成期の年代の1点を示す遺物と考えられる。他にも同時期の遺物が数点出土している。

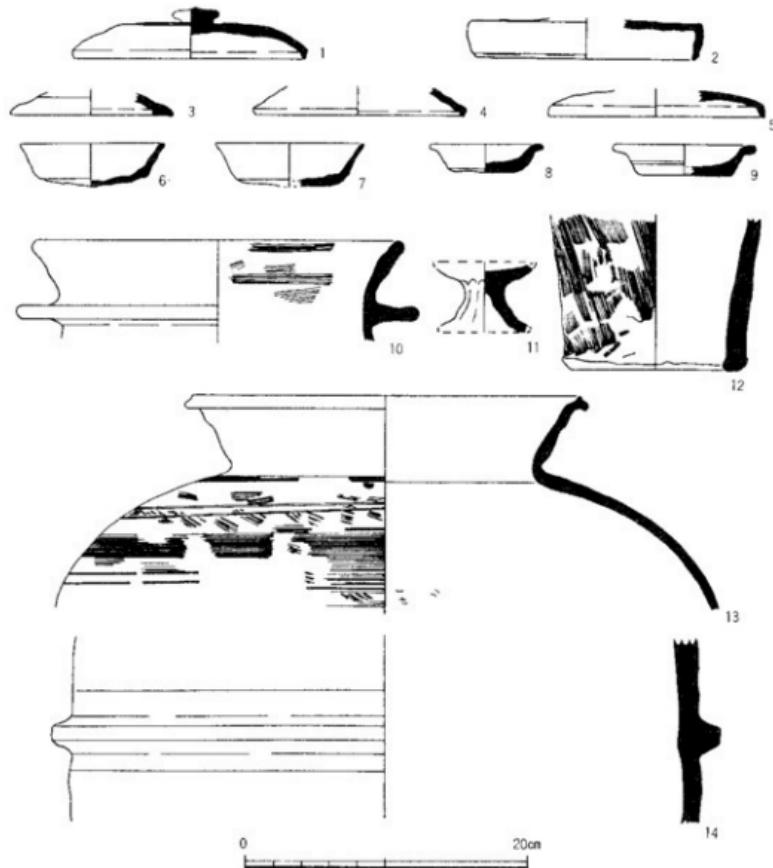


図-72 包含層出土遺物

2は須恵器有蓋壺の蓋であろう。平坦な天井部から直角に屈曲する口縁部を有し、口縁端部は段をなす。おそらく宝珠状のつまみを伴うものであろう。天井部回転ヘラケズリ、他は回転ナデ調整。古墓-2南側から出土しており、古墓-2の蓋骨器蓋として使用されていた可能性がある。

3~11は古墓-13~19の周辺から出土した遺物である。3~5は須恵器杯蓋。蓋内面にかえりを伴うもの(3)とかえりの消失したもの(4・5)がみられる。6~9は須恵器杯身。6・7は立ち上がりの消失した小形の杯身である。8・9は溝-1出土の杯と同形態であり、蓋を伴わないものである。9は平底となり、外面上に1条の沈線がめぐる。3・6・7は7世紀代の上器であり、古墓群に伴う遺物とは考え難い。

10は土師器羽釜。短い鈎を有し、口縁部は外反する。口縁部内面にはヨコハケが残る。11は手づくねの小形高杯。11縁と脚の端部を欠損する。杯部は浅く、脚は裾広がりである。

12・13は古墓群東側の南斜面から、14は調査地区東端から出土している。円筒埴輪底部(12)は外面タテハケ調整、無黒斑の埴輪であり、5世紀末葉~6世紀前葉の埴輪であろう。13は須恵器の甕。外方へのひる口縁部は端部で段をなし、体部は球形を呈すると思われる。外面は平行叩き目をカキ目で消しており、内面は同心円の当て具痕をナデ消している。14は円筒埴輪体部。表面の刺離が激しく調整不明。器壁は厚く、凸帯の突出度は高い。凸帯部分での直径47.3cm。黒斑を有し、5世紀初頭~前葉の埴輪と思える。未完成横穴-2・3出土の埴輪より、若干新しい年代が考えられる。

石鎚 石鎚が3点出土している。15は古墓-28埋土内から、16は調査地区北側の斜面から、17は古墓-18・19の南側からそれぞれ出土している。15は先端を欠損し、刃部の加工は雑である。16は逆刺の一方を欠くが、大形の石鎚である。17は柳葉形をなし、先端と茎部を欠損する。いずれもサスカイト製であり、弥生時代前期から中期にかけての時期の石鎚である。高井田横穴群内には弥生集落が存在した可能性が考えられているが、これらの石鎚は集落に伴うものではなく、狩猟に伴うものであろう。

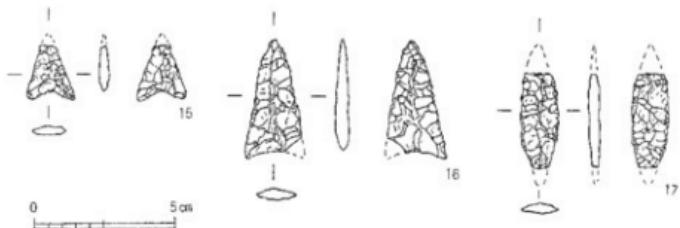


図-73 包含層出土石鎚

註

- (1) 新発見の横穴には、1985年度の調査に引き続いでアルファベットを付した。
- (2) 左右は玄室から漢道を見た場合を示す。
- (3) 玄室中央での数値である。横穴式石室の場合は、その構築順序から考えて、玄室幅を示す場合は奥壁部分の数値で示すことが適切と思われる。しかし、横穴の場合は隅角部の加工が困難なため、胴張り状の平面形態を示す場合が多く、玄室中央での数値がその横穴の特徴を最も示していると考えられる。
- (4) 鉄製品は丸開きの数字で示す。図中の番号も同じである。
- (5) 大阪文化財センターの付した横穴番号を使用している。大阪府教育委員会の横穴番号では第4支群1号墳となる。大阪府教育委員会の支群設定には問題点が多いと思われる。横穴の位置、形態、規模等から、将来、新たな支群設定を試みてみたいと考えている。
大阪文化財センター『大阪府柏原市高井田所在遺跡試掘調査報告書』1974
大阪府教育委員会『平尾山古墳群分布調査概要』1975
- (6) 大阪文化財センター『大阪府柏原市高井田所在遺跡試掘調査報告書』1974
- (7) 柏原市教育委員会『太平寺・安堂遺跡』1984 P.21~23
- (8) 柏原市教育委員会『高井田横穴群I』1986 P.59図54
- (9) 久美浜町教育委員会『湯舟坂2号墳』1983
- (10) 小丸古墳群調査団『小丸古墳群』1985
- (11) 柏原市教育委員会『高井田横穴群I』1986 P.8図5~10
- (12) 1983年度の太平寺・安堂遺跡、古墓-1から出土した丸瓦をガラス製と報告したが、これも水晶製と考えられる。訂正しておきたい。
柏原市教育委員会『太平寺・安堂遺跡』1984 P.22図19

第3章 横穴の実測

発掘調査に平行して、横穴の現状確認と保存に際しての資料とするため、開口している横穴20基の実測を実施した。史跡指定地とその周辺に開口している横穴を除いて、大半の開口している横穴を実測したことになる。そこで、実測図と概説を報告しておく。

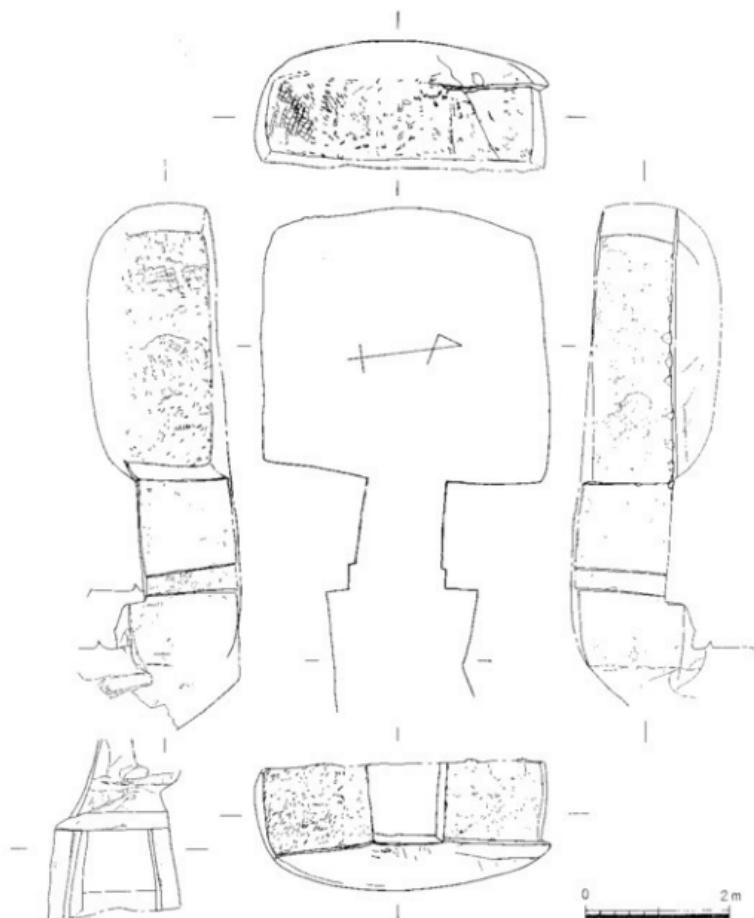


図-74 1号墳実測図(レベル高50.5m)

1号墳（2～6号墳）

玄室床面は、ほぼ正方形の平面である。壁面と天井の境の段は、玄門、左壁、奥壁左半分に見られ、奥壁右半分、右壁には見られない。壁面、特に右壁に工具痕が顕著に残っており、本来は右壁にも段を築く予定であったと思われる。羨門は2段に掘り込まれ、整美である。

2号墳（2～5号墳）

右側壁に造り付け石棺を伴う。石棺内法は長さ200cm、幅54cm、半壊している。壁面と天井との境に段は見られないが、その境は明瞭である。羨道天井部は後世に削平されている。玄門の両側に家屋・人物等の線刻画が描かれている。なお、玄門右側の天井部は掘り込んで加工されている。

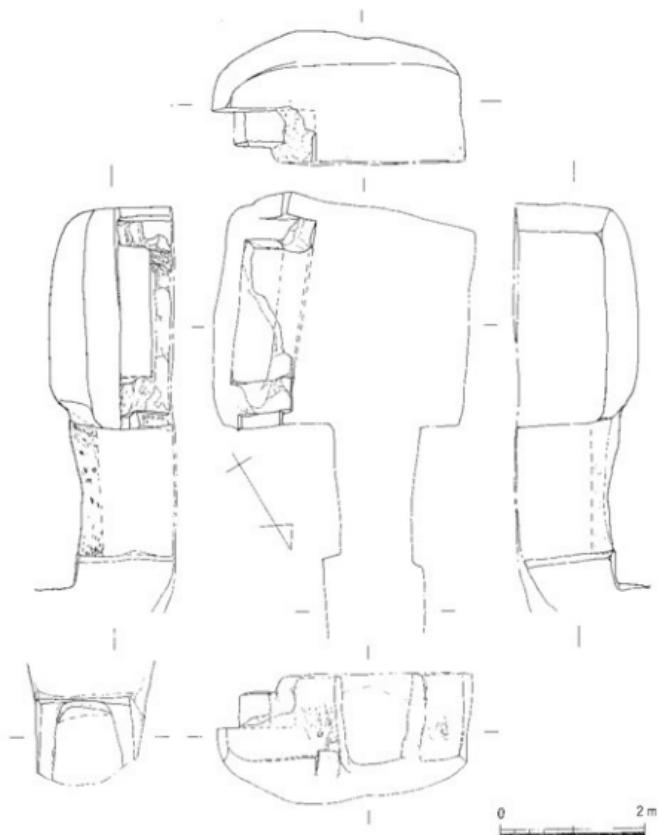


図-75 2号墳実測図(レベル高48.7m)

3号墳（2-4号墳）

右壁に造り付け石棺を伴う。石棺内法の長さ152cm、幅37cm、深さ36cm。玄門両側と左壁の一部には壁面と天井の境の段が見られるが、他には見られない。石棺の壁面が45°の角度で掘り込まれている点、石棺奥側の壁面にのみ顕著な工具痕が残る点、壁面と天井の境が右壁のみ不自然になる点などから、造り付け石棺が横穴完成後に改めて造られている可能性が高い。天井に2箇所、円形のくぼみが見られる。奥側は直径40cm、深さ8cm、羨道側は直径29cm、深さ6cmとなり、柱を表現したものであろうか。玄門上部には段をなす繰り込みが見られる。残存状態は良好である。

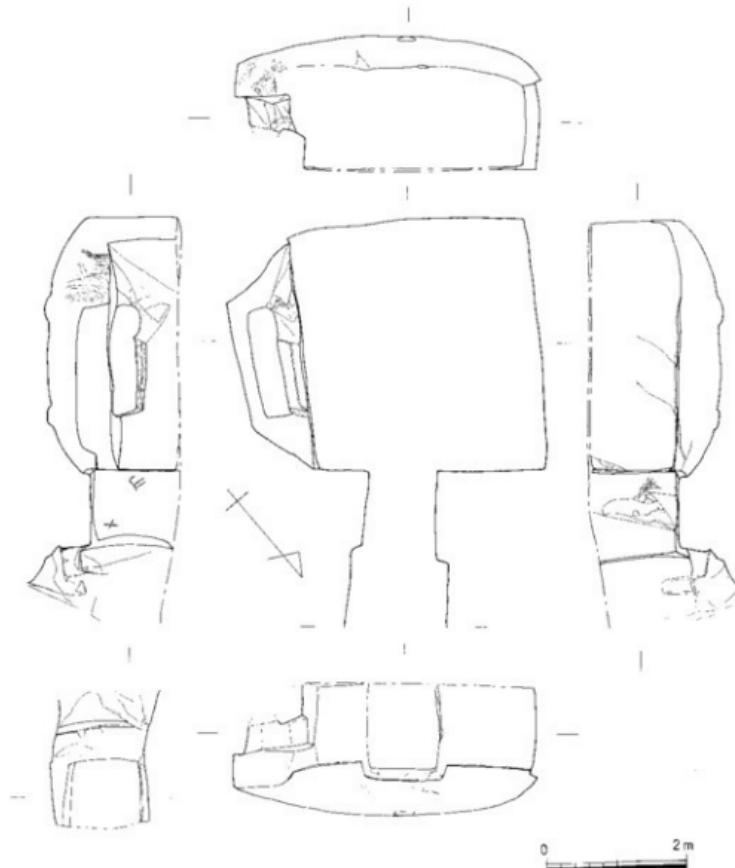


図-76 3号墳実測図(レベル高48.5m)

4号墳（2-3号墳）

玄室平面は横長の長方形をなす。壁面と天井の境には、奥壁と側壁に段が見られる。段の幅は5~10cmと狭く、角は面取りがなされている。奥壁は破損が著しいが、ほぼ中央の高さに横方向の溝状の線がのびる。この事実から、奥壁に造り付け石棺があったものと考えられる。羨道は短く、羨道両壁には騎馬人物の線刻画が描かれている。玄門はその両側を幅25cm前後、深さ2cm前後彫り込んで加工している。玄門も同様に、両側と上部を8cm前後の幅で約2cm彫り込む加工を施している。いずれも、角は面取りがなされている。羨道はやや右壁寄りに取り付き、羨道は羨門から先細りとなる。壁面には工具痕が多数残っている。奥壁の破壊が激しいが、他は良好な状態である。

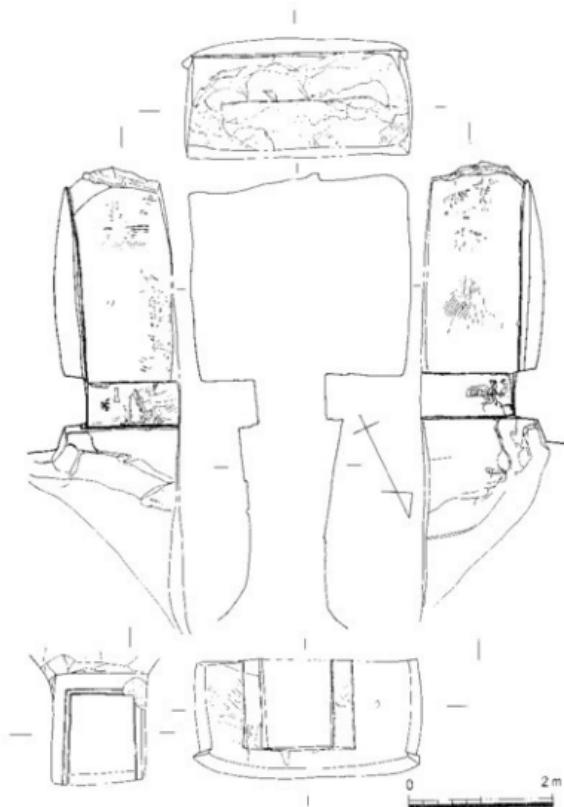


図-77 4号墳実測図(レベル高51.0m)

5号墳（2・2号墳）

玄室平面は横長の隅丸方形、あるいは橢円形と表現したほうが適切かと思える平面形態である。奥壁と左壁に造り付けの石棺が見られる。奥壁の石棺は内法長156cm、幅43cm、外法長198cm、幅88cm、左壁の石棺は内側の壁面が破壊されているが、内法長166cm、幅44cm前後と推定される。奥壁の石棺上部に長さ184cm、幅4cmの段が造られている。それ以外は、壁面と天井の境が不明瞭である。羨道はやや右寄りに取り付く。玄門両脇には幅10cm弱、厚さ3~5cmの柱状の施設がみられる。羨道平面は三角形状をなし、羨道左壁に柱状の平坦な縁り込みが見られる。羨門の位置は不明瞭であるが、左壁が突起状に飛び出している部分を羨門と考えたい。羨道は東へ反りながらのびている。壁面や天井には縱方向の工具痕、石棺上面には鋭く深い工具痕が残っている。形態、掘削方法共に非常に雑な横穴であり、高井田横穴群内では最も新しい時期の横穴である可能性が考えられる。

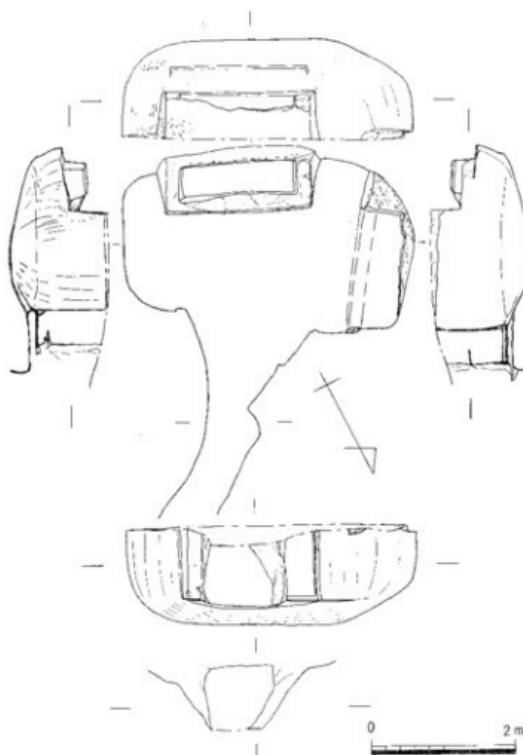


図-78 5号墳実測図(レベル高54.5m)

7号墳（2-10号墳）

玄室平面形態は奥で広がる台形状となる。玄室幅は奥壁で266cm、玄門側で191cmである。壁面と天井の境は浅い溝状の線によって明瞭に区別されるが、段は見られない。玄門上部には舌状に突出する彫り込み施設が見られる。羨道は玄室中央に、やや玄室内へ入り込むような形に取り付く。羨道床面の玄門寄りには、約2cmの段が見られる。羨道の周囲は約20cmの幅で平坦な面が造り出されている。また、玄門や羨門の角には面取りが施されている。壁面には部分的に工具痕が残る。壁面や天井の一部が崩れているが、残存状態は比較的良好である。7・8・10・15号墳は南西向きの同一斜面に営まれているが、7号墳が最も北側に位置し、標高も最も高い位置にある。

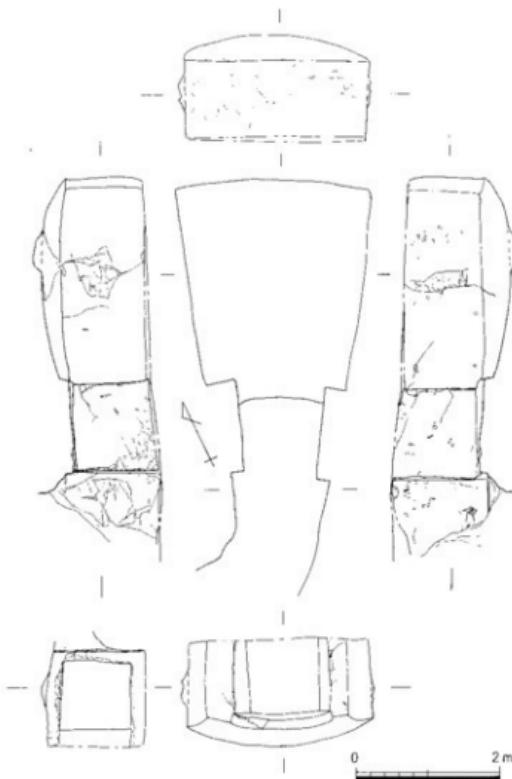


図-79 7号墳実測図(レベル高53.5m)

8号墳（2-11号墳）

玄室平面は正方形に近く、四隅が明瞭に直角をなす。壁面と天井の境は不明瞭である。奥壁はやや内傾し、ドーム状の天井に続く。羨道は著しく右寄りに取り付く。羨門は羨道壁面をくの字状に抉ったのみである。羨道上部は広い平坦面が造り出されているが、それ以外は、羨門にも玄門にも全く施設が認められない。

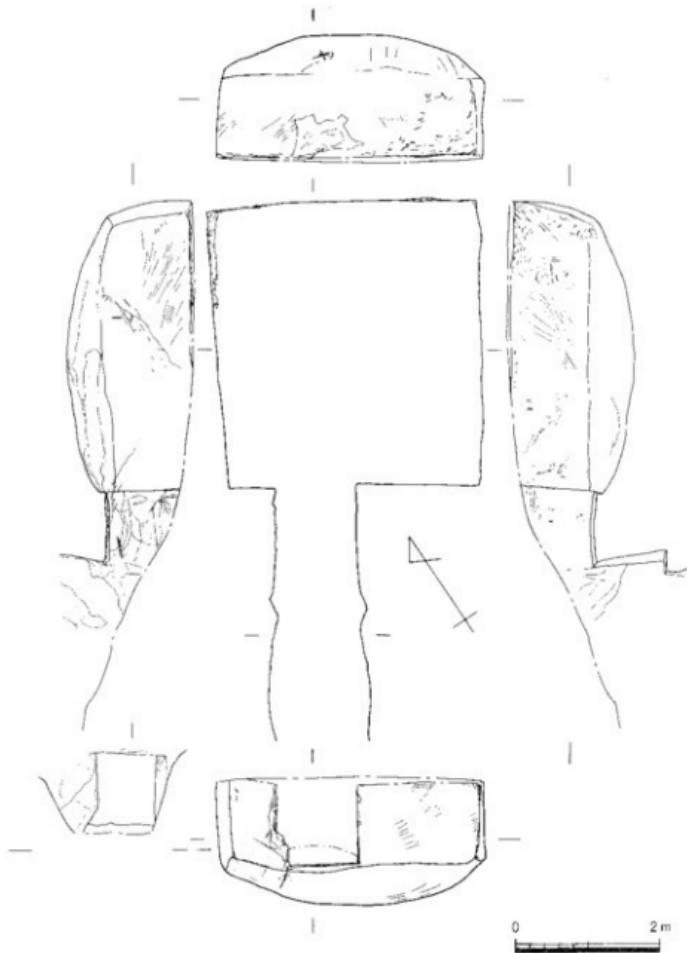


図-80 8号墳実測図(レベル高49.0m)

10号墳（2-12号墳）

玄室平面は縦長の長方形を呈し、四隅は直角に近い。側壁と奥壁の3面には、壁面と天井の境に幅10cm前後の段が施される。羨道は玄室のほぼ中央に取り付き、玄門には特別な施設は見られない。羨門は両側に平坦面が造り出され、更に羨道へ寄った位置の天井部に段が造り出されている。奥壁がかなり崩れているが、他は良好な状態で残存している。10号墳には、多数の線刻壁画が描かれており、その中で明瞭なもののみ、実測図に示した。奥壁天井部には船が描かれている。船首が反り上がり、船首と船尾に各1人の人物が描かれている。船尾の人物は船らしき棒状のものを持っている。船の中央には帆柱が表現されている。羨道左壁には帆を張った帆船と人物が描かれており、左壁と右壁天井部に人物の顔が描かれている。

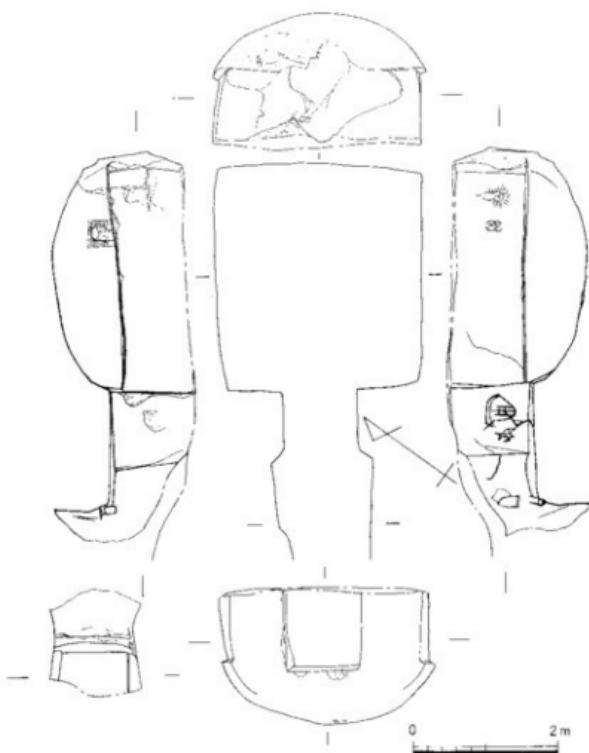


図-81 10号墳実測図(レベル高45.5m)

15号墳（2 13号墳）

未完成の横穴である。玄室平面は縦長の長方形を呈し、奥壁隅角部は未完掘のため弧状をなす。右壁には壁面と天井の境に粗削りのままの段が見られる。左壁の壁面はほぼ掘削しているが、壁面と天井の境の段を造り出すまでには至っていない。奥壁はあまり掘削が進んでおらず、天井部も十分に掘り込まれていない。羨道から墓道にかけては、ほぼ完成している。羨道は玄室やや右寄りに取り付き、幅が広い。羨道天井部には約30cmの高さの段が見られる。羨門はアーチ状をなし、やや玄門寄りの位置の天井部分に平坦面を造り出している。壁面には工具痕が全面に、しかも明瞭に残っている。工具は手斧状のものが使用され、基本的には石上から左下へ向かって削られている。しかし、その場所によって、工具の使用を工夫していることがうかがえる。工具は幅14~15cmの丸刃状のものと幅5.5cm前後の半刀状のものを使用している。15号墳に埋葬が行なわれているか否かは未調査のため不明である。

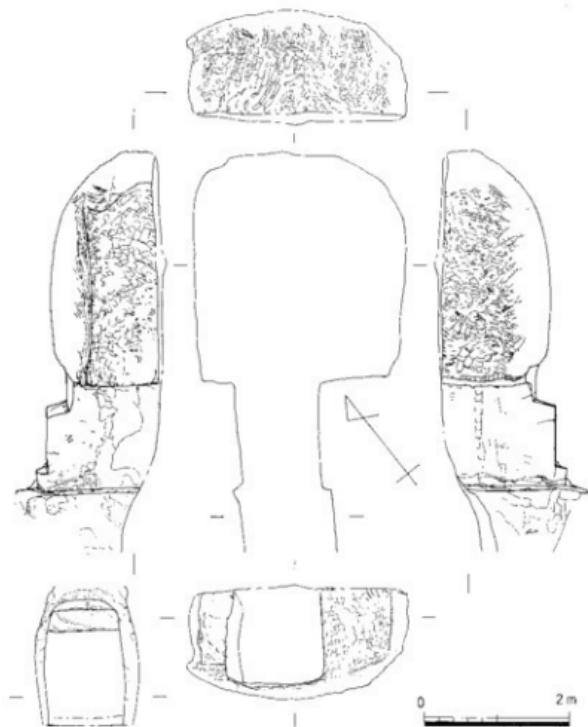


図-82 15号墳実測図(レベル高42.5m)

17号墳（2～24号墳）

玄室は整美な長方形平面を呈し、隅角部も明瞭である。壁面四周に天井との境の段がみられる。段の幅は10cm前後、玄門上部のみ、凸状にその位置が高くなる。羨道は玄室中央に取り付く、非常に長い。羨道周囲には平坦面が造り出されている。墓道天井部に約15cmの段が造り出されており、珍しい施設である。残存状態は非常に良好であり、角部も明瞭に加工されている。

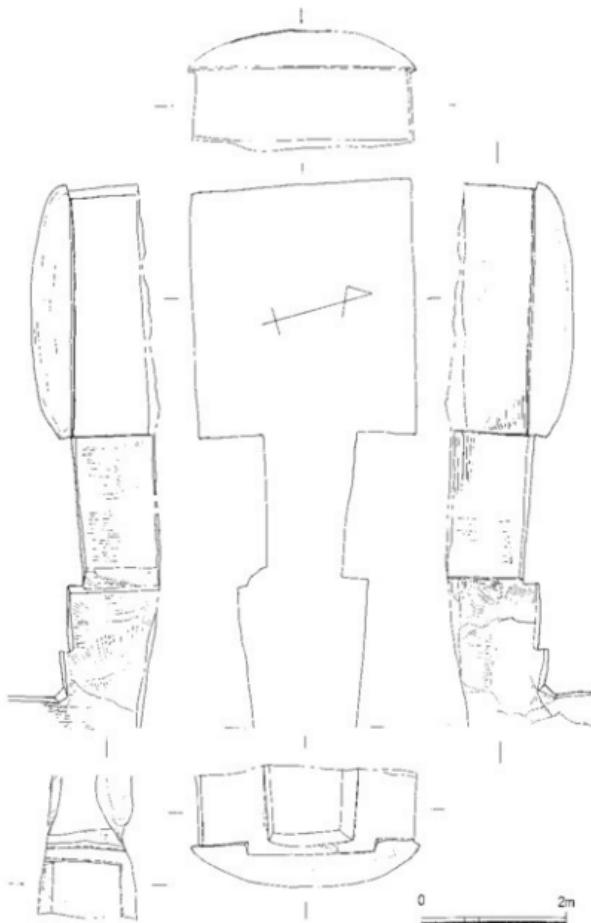


図-83 17号墳実測図（レベル高41.5m）

18号墳（2-25号墳）

玄室平面は正方形形状をなす。壁面四隅に天井との境の段が見られ、やはり玄門上部のみ凸状に高くなる。談道は玄室中央に取り付き、玄門の周囲には幅30cm前後の平坦面を造り出している。壁面、天井には細かい工具痕が多数残っている。

18号墳は17号墳と同一斜面に並んで位置している。施設や構造は良く似ているが、明らかに17号墳のほうが丁寧に加工されており、平面形態も整美である。現状では、17号墳が18号墳に先行すると考えられる。

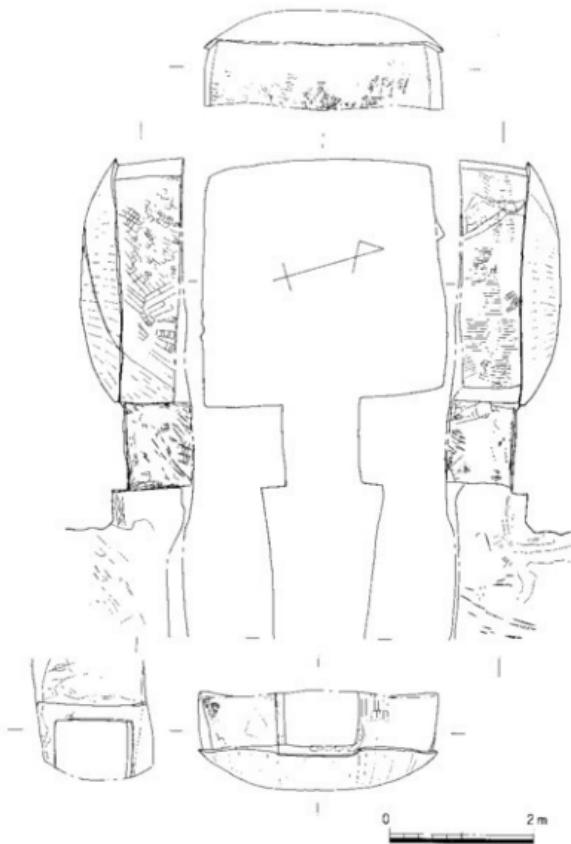


図-84 18号墳実測図(レベル高42.0m)

20号墳（2-23号墳）

玄室平面はほぼ長方形をなすが、左壁が奥壁、玄門と直角をなすのに対し、右壁の奥壁側はかなり外方へ入り込んでいる。壁面四隅に段がめぐり、玄門上部は凸状になる。漢道は玄室中央に取り付き、漢門の両側と天井部には幅10cm、深さ5cmの縁り込みが見られる。墓道は先細りの平面形を呈する。天井、壁面が部分的に崩壊している。漢道左壁には騎馬人物像を含む数体の人物の線刻画が描かれている。

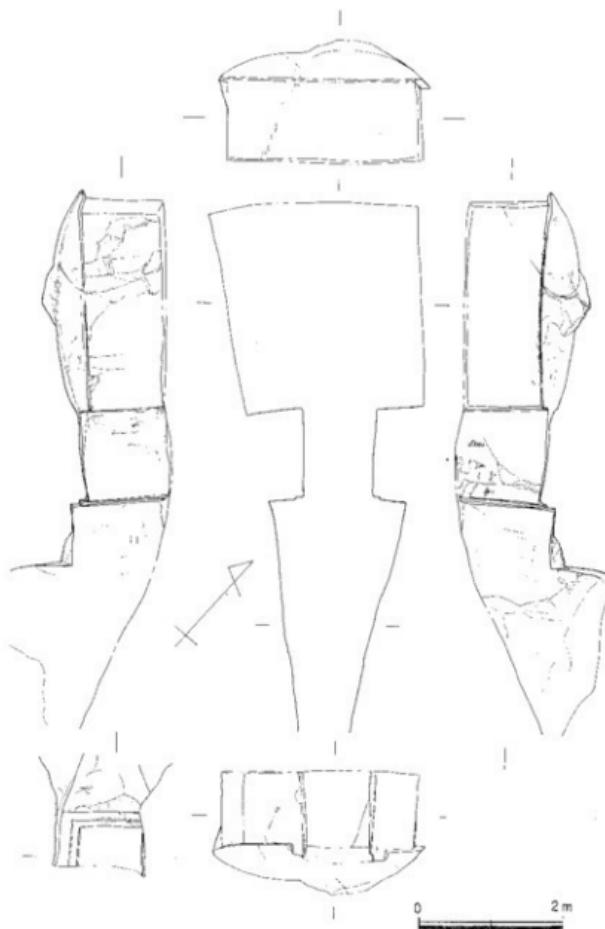


図-85 20号墳実測図(レベル高45.5m)

21号墳（2-26号墳）

21~23号墳は高井田墓地内に開口する横穴である。21号墳の玄室平面は非常に長い縦長の長方形である。右壁の奥壁側は外方へ張り出している。壁面四周には幅20cm前後の広い段がめぐり、玄門上部は凸状になる。羨道はやや左寄りに取り付き、羨門へ向かって少しその幅を減じる。羨門の周囲は幅10cm前後、深さ3cm前後に掘りくぼめられている。現在は羨道から羨道にかけてかなりの土砂流入が認められる。墓道前面は、墓地造成の際に若干削平されている可能性がある。壁面と天井には浅い工具痕が見られる。天井は奥壁と右壁では上から下へ削り込まれているが、左壁では右から左へ削り込まれている。壁面は左右両壁とも右上から左下へ削り込まれている。高井田横穴群においては、かなり小規模な横穴である。

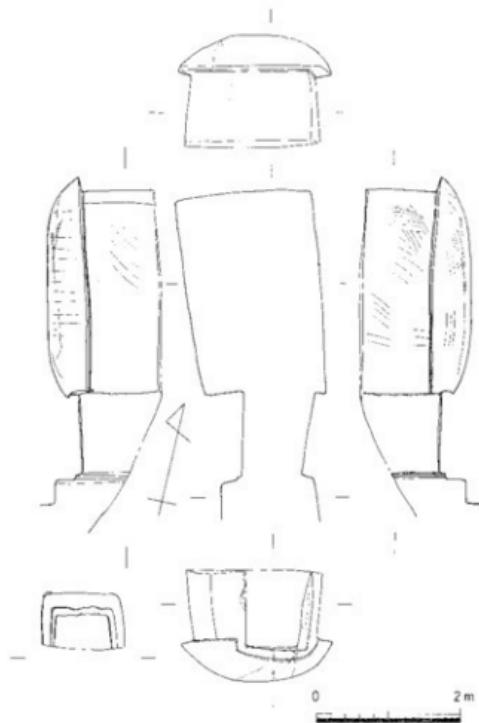


図-86 21号墳実測図(レベル高38.0m)

22号墳（2-27号墳）

玄室平面は、奥壁が中軸に対して垂直とならず、羨道も少し玄室へ入り込んだ形態をなす。羨道は玄室のやや左寄りに取り付き、幅が狭い。玄室壁面に段は見られず、玄門にも特別な施設は見られない。羨門周囲には平坦面が造り出され、天井部から羨門両側にかけて4cm前後の段が設けられている。玄室壁面と天井には多数の線刻画が見られる。線刻画には人物、獣、鳥、家屋、縄縄と考えられるものが見られる。壁面下部や羨門付近には工具痕が残る。

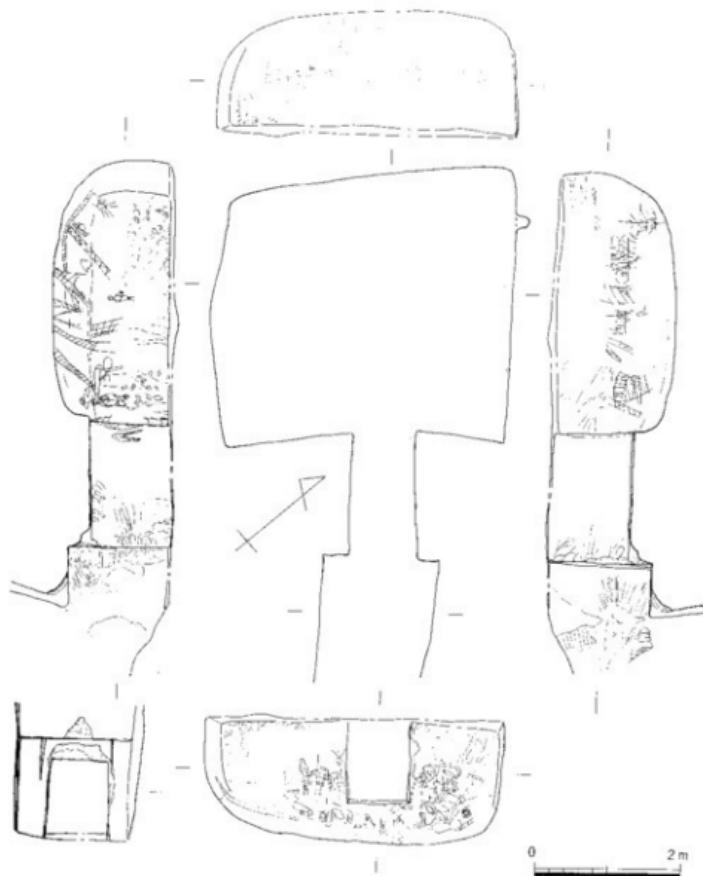


図-87 22号墳実測図(レベル高40.0m)

23号墳（2-28号墳）

やや小形ではあるが、玄室平面は均整のとれた長方形をなす。壁面四隅に天井との境の段があり、玄門上部は凸状になる。羨道は玄室中央に取り付き、羨門は周囲に平坦面を造り出すのみで特別な施設は見られない。角はいずれも面取りがなされている。奥壁と右壁に人物、騎馬人物、記号と考えられる線刻画が見られる。壁面の一部に工具痕を残すのみであり、非常に丁寧に仕上げられている。羨門付近は少し崩壊しているが、他の部分の残存状態は比較的良好である。

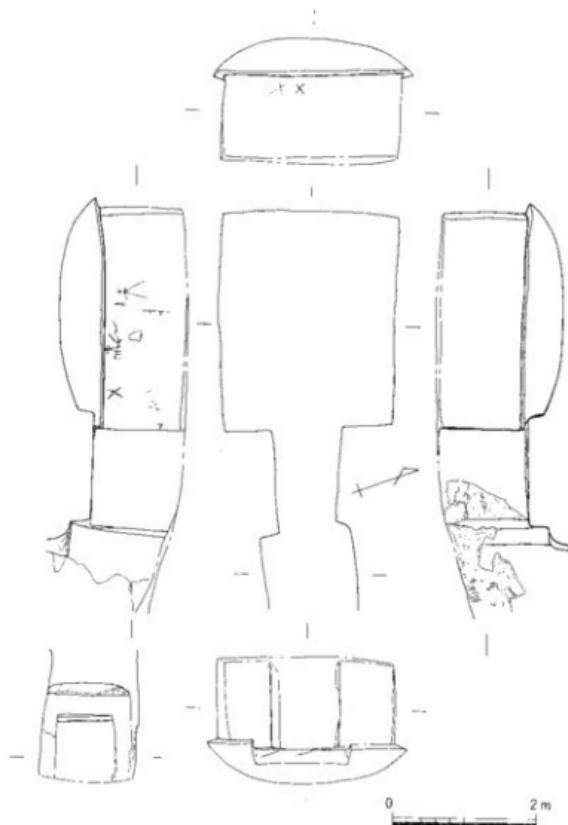


図-88 23号墳実測図(レベル高39.0m)

27 a 号墳 (2 - 33 a 号墳)

玄室平面は、ほぼ長方形をなすが、右壁南半の掘削が不足しており、南東隅が少し羨道側へ寄っている。壁面四周に段が見られ、玄門上部は凸状をなすが、玄門上部の断面は弧状を呈する。羨門付近は、かなり土砂に埋まっている。羨門両脇の天井部に、直径約11cm、深さ約3cmの円筒状のくぼみが彫られている。その位置から推定すると、羨門部分の開閉施設の軸受けであった可能性が考えられる。羨道には線刻画らしきものが見られる。玄室壁面と天井には浅い工具痕が多數残っている。

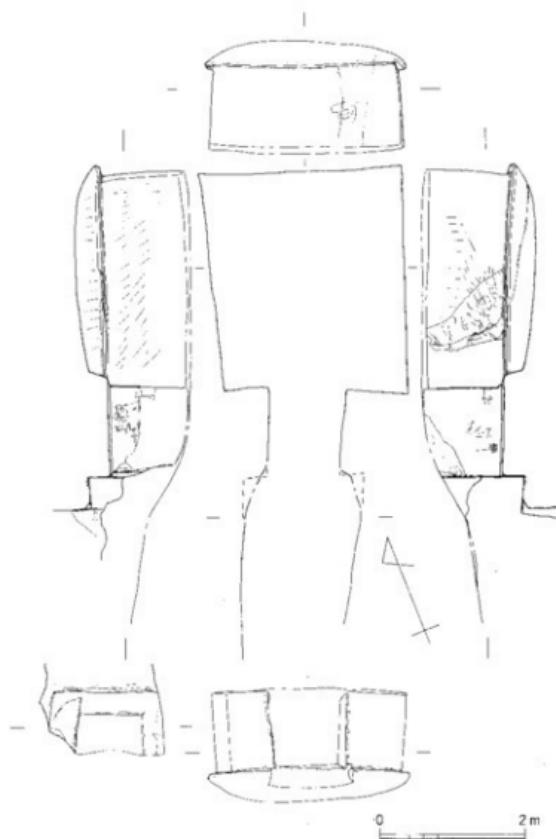


図-89 27 a 号墳実測図(レベル高39.5m)

27 b 号墳 (2-33 b 号墳)

玄室平面は角が明瞭であるものの、その形態は崩れている。幅の広い羨道は玄室右寄りに取り付く。壁面四周に段が見られ、玄門上部は凸状になる。羨門付近は土砂がかなり堆積している。右壁の崩壊が著しいが、他は比較的原状を留めている。奥壁、羨道両壁と天井部に抽象的な幾何学文が描かれている。

27 b 号墳は27 a 号墳と並んで開口しており、玄門上部の施設や幾何学的な線刻画などの共通点が見られる。27 b 号墳のほうが規模は大きいが、27 a 号墳のほうが丁寧に成形されている。

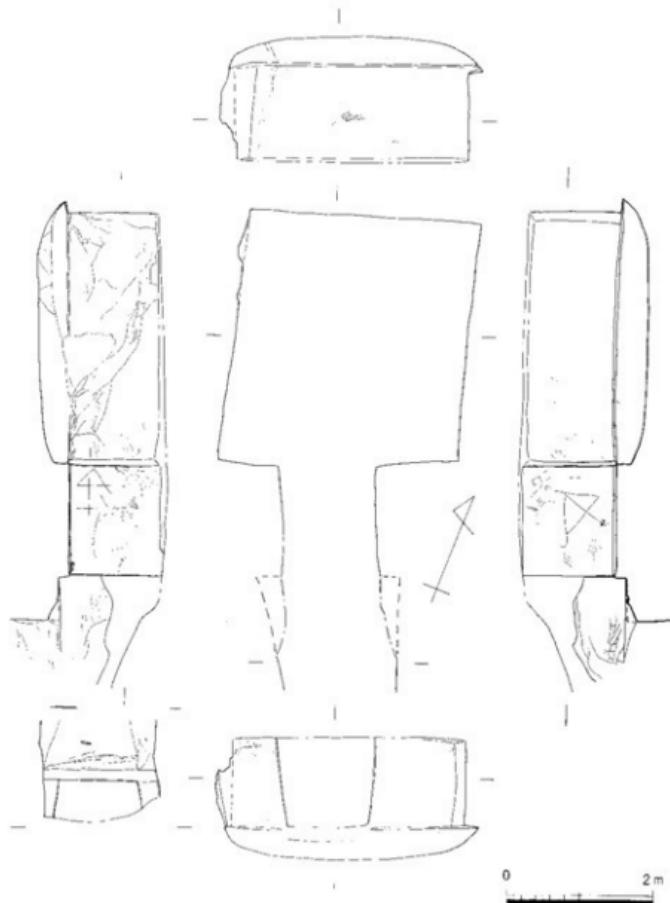


図-90 27 b 号墳実測図(レベル高40.0m)

86号墳（4～7号墳）

1～27b号墳は、いずれも高井田横穴群南部に位置する横穴であるが、86～90号墳は北西部に位置する横穴である。

86号墳は左壁の玄門寄りに造り付け石棺が見られる。玄室平面は少し歪んだ長方形を呈している。造り付け石棺は内法長196cm、幅74cm、深さ46cmを測り、西側の壁面は当初から存在しなかったと考えられる。玄室壁面四周に段が設けられているが、造り付け石棺は、この段を有する壁面を更に掘り込んで造られている。おそらく、横穴完成後に掘り込まれたものであろう。墓道は短く、玄室側のほうが幅が広くなっている。墓道は大量的の土砂に埋まっている。壁面には、人物、幾何学模様の線刻が見られる。

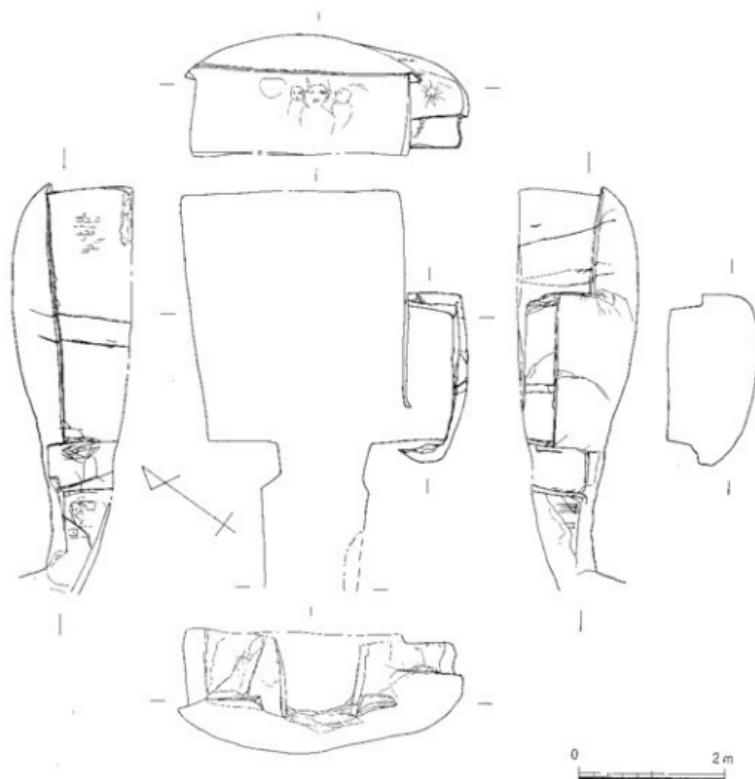


図-91 86号墳実測図(レベル高52.0m)

89号墳（4～5号墳）

墓道が完全に埋まっており、玄室左壁部分から玄室に入ることができる。ところが、この玄室左壁の入口に、渓門状の加工を施した痕跡が見られる。入口の両側上部に、深さ3～4cmで方形形状に彫られている。天井部の破損が著しいため全容は不明である。玄室との壁面の厚さは10～60cmである。如何なる性質のものは不明である。玄室平面は長方形を呈し、壁面四周には段が設けられている。玄門の成形は難であり、渓道はアーチ状となる。壁面には線刻画が見られるが、意味不明のものが多い。全体的に成形は難である。また、壁面等の破損が著しく残存状態は悪い。

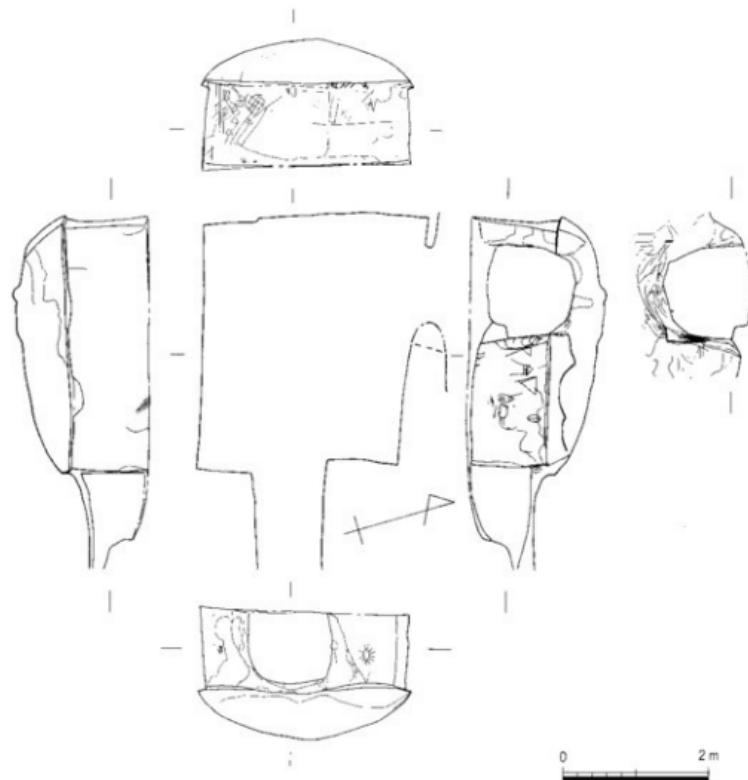


図-92 89号墳実測図(レベル高52.2m)

90号墳（4-4号墳）

玄室平面は正方形に近いが、角は直角をなさず、各辺は湾曲している。羨道は大量の土砂に埋まっており、羨門の位置も不明である。羨道は玄室のはば中央に取り付き、羨道へ向かって外開きになる。壁面と天井の境は不明瞭であり、玄門にも特別な施設はみられない。羨道はアーチ状になる。壁面には鳥、家屋、盾かと考えられる線刻画が見られる。壁面や天井の崩壊は著しく、原形を留めていない部分が多い。細部の調査はかなり難であり、形態等を考えると、高井田横穴群内では、かなり時期の下る横穴になるのではないかと思える。

以上、20基の横穴について概略を記述してきたが、線刻画についてはまだるもののみを取り扱っており、十分なものでない。線刻画については下記の書に詳細が述べられているため、それを参考していただきたい。

和光学古墳壁画研究会『高井田横穴群線刻画』1978

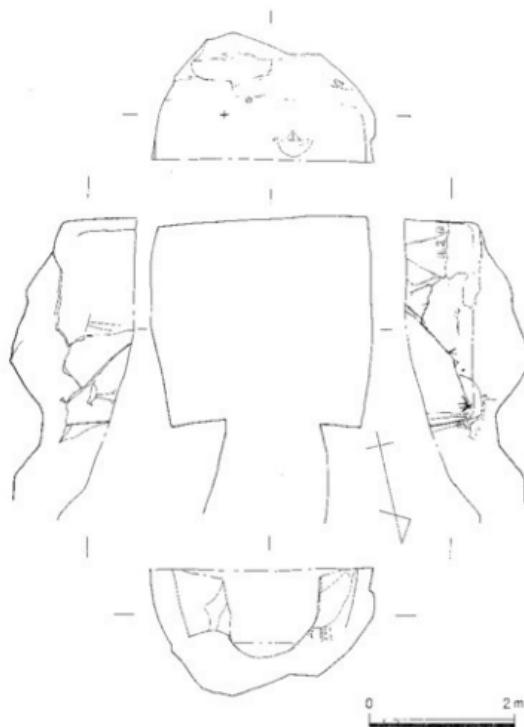


図-93 90号墳実測図(レベル高53.5m)

第4章 ま　と　め

1. 高井田横穴群の調査

今回の調査で発掘調査を実施した横穴は2基、実測を行った横穴は20基である。1985年度に発掘調査を実施した横穴を加えると、部分的な調査も含めて17基を発掘したことになる。その中で8基の横穴が工事によって破壊された。

実測を行った横穴を含めて、詳細な検討は改めて試みることにし、ここでは気の付いた点をいくつかあげておきたい。まず、近接する横穴には規模・形態・掘削方法等に共通点が認められるなど、密接な関連を有するものが多いと思われる。しかし、玄室平面の形態が大きく異なるものや規模がかなり違うものが見られ、一概に共通点ばかり指摘できるわけではない。逆にこれらの事実から考えると、横穴の形態等によって横穴を編年、グルーピングするためには、一つの要素だけでなく、複数の要素から検討を加える必要があると考えられる。この点については『高井田横穴群』のまとめでも若干触れたが、ここで少し補足しておきたい。細かい細工を伴う施設を有する横穴は初期の横穴に多いと考えられる。これについて、造り付け石棺を有する横穴も古いのではないかと考えたが、今回の実測結果より、造り付け石棺と時期に因果関係が見られないこと訂正しておきたい。ただし、造り付け石棺の構造が難になり、規模が小さくなる傾向は指摘できる。また、規模や形態については、玄室のみでなく、横穴全体について検討する必要があると思われる。例えば、羨道と玄室がバランスよく取り付く横穴や、玄室四隅が直角をなす横穴は古い要素を有していると考えられる。

次に、線刻画についても、十分に検討を加える必要があると思われる。線刻壁画を有する横穴は開口しているものに多く、未開口のものに壁画が少ない傾向が指摘できる。これは偶然かもしれないが、壁画の中には後世の落書きが含まれていることを考慮する必要があると共に横穴掘削時ではなく、数十年、あるいは数百年後に祀信仰のような考え方から描かれたものがあることも否定できないと思う。

発掘調査を実施した横穴の中で、掘削が7世紀に下ると確認できる横穴は認められなかつた。高井田横穴群内の横穴の大部分は6世紀代に築かれているようである。おそらく、壁面と天井の境に段を有する横穴は全て6世紀代であろう。段を有しない横穴も6世紀後葉頃には出現するようである。その中で、5号墳や90号墳のように、玄室や羨道の平面形態が著しく崩れている横穴は7世紀代に下る可能性をもつと考えられる。

発掘調査による限りでは、最も時期の遅い横穴は6世紀中葉と考えられる。このように考えると、高井田横穴群では約50年間に150基前後の横穴が掘削されていることになり、その数においても、密度においても他の横穴群では考えられない状況である。

横穴番号		玄室長	玄室幅	玄室高	羨道長	羨道幅	羨道高	墓道幅	開口方向	備考
E	新発見	273	298	160?	93	90?	116?	157	S-21°-E	調査済、破壊
112	4-1	337	284	170	164?	112	133	?	N-65°-W	壁面四周に段、調査済
1	2-6	380	396	(179)	156	116	(134)	212	S-82°-E	壁面一部に段、未完成
2	2-5	307	353	(174)	185	104	(120)	139	N-30°-E	右壁に造り付け石棺
3	2-4	353	324	(180)	113	97	(122)	136	N-44°-E	右壁に造り付け石棺 壁面四周に段
4	2-3	274	305	(167)	66	95	(131)	144	N-21°-E	奥壁造り付け石棺痕跡 壁面三周に段
5	2-2	245	402	(136)	124	97	(94)	76	N-42°-E	奥壁・左壁に造り付け 石棺
7	2-10	282	241	(147)	130	110	(118)	136	S-25°-W	
8	2-11	396	368	(177)	164	111	(103)	136	S-32°-W	
10	2-12	317	284	(186)	99	102	(119)	140	S-55°-W	壁面三周に段
15	2-13	318	290	(158)	148	110	(157)	134	S-36°-W	未完成
17	2-24	347	305	(166)	204	113	(112)	180	S-74°-E	壁面四周に段
18	2-25	337	330	(140)	116	104	(96)	169	S-75°-E	壁面四周に段
20	2-23	288	270	(155)	128	98	(128)	191	S-40°-E	壁面四周に段
21	2-26	281	186	(156)	122	88	(112)	128	S-8°-E	壁面四周に段
22	2-27	356	416	(171)	176	91	(114)	162	S-49°-E	
23	2-28	304	242	(177)	138	86	(124)	122	S-71°-E	壁面四周に段
27a	2-33a	304	269	(156)	122	102	(113)	168?	S-24°-W	壁面四周に段
27b	2-33b	353	322	(172)	154	129	(134)	200?	S-25°-E	壁面四周に段
86	4-7	352	295	(166)	67	116	(104)	148	S-58°-W	左壁に造り付け石棺 壁面四周に段
89	4-5	352	288	(176)	?	93	(90)	?	S-73°-W	左壁に入口の痕跡 壁面四周に段
90	4-4	282	306	(113)	?	156	(90)	?	N-13°-E	

表-4 横穴計測値一覧表

・単位はcm。()内は現在値。3号墳と86号墳の玄室幅には造り付けの石棺を含んでいないが、他の横穴は造り付け石棺を含んだ規模である。横穴番号の左欄は大阪文化財センター、右欄は大阪府教育委員会の番号である。

古墓は全部で29基検出された。いずれも火葬骨を埋葬したものと考えられ、8世紀後葉から10世紀前葉にかけての古墓であろう。これだけ多数の古墓が集中して発見されたのは、柏原市内では初めてのことであり、この時代の古墓群としては全国的に珍しいであろう。

29基中、蔵骨器を伴う古墓は20基である。その中で、正置されていたものと倒置されていたものの数は11対9とほぼ半数ずつになる。施釉陶器を伴う古墓は3基、玉類を副葬する古墓も3基、土師器杯を数点出した古墓も3基、重複しているものも含むが、全て須恵器の壺を蔵骨器としたものであり、蔵骨器の有無、また蔵骨器が須恵器か土師器かによって、階層、性別、時期等に差が存在すると考えられる。おそらく、その七たるものは階層差であろう。

蔵骨器を正置するか倒置するかについては、器種、時期等に顕著な特徴を指摘できない。特殊な信仰によるものであろうか。

これらの古墓を、敢えて火葬墓と呼称せず、古墓と呼称した理由は、火葬地と埋葬地が異なるためである。墓塚壁は熱を受けておらず、埋葬地で火葬したとは考えられない。また、これだけ広範囲を調査したにもかかわらず、火葬地は確認できておらず、かなり埋葬地と離れた場所で火葬されているのではないだろうか。

蔵骨器内の火葬骨は、火葬地で拾骨され、埋葬地まで運ばれてきたものであろう。また、19基の古墓の埋土として使用されていた黒灰色土には多量の炭、灰が含まれており、これらは火葬骨とは別に、火葬地の焼灰などを運んできて埋土としたものと考えられる。これも信仰上の一形態を示すものであろう。

29基中、15基の古墓から鉄釘が出土している。これらの古墓には蔵骨器を伴うものも伴わないものも見られるが、その出土状況、出土本数からは木棺に伴うものとは考えられない。釘が出土している古墓は、古墓20を除いて全て黒灰色土を埋土とする古墓である。黒灰色土を埋土とする古墓の73.7%から釘が出土していることになる。この状況を考えると、釘は火葬地の炭や灰と共に運ばれてきたことになり、火葬をする際の木棺に伴う釘ではないかと思われる。木棺に遺体を入れたまま火葬し、その炭や灰と共に、釘も運ばれて来たものであろう。釘を意識的に選択したか否かは問題が残るが、釘が多数出土している古墓—5・6・16・25などは、意識的に埋めている可能性が考えられる。

29基も古墓が検出されていながら、奈良～平成時代の古墓でよく見られる貨銭の副葬が見られない点も疑問である。柏原市内では雁多尾畠、太平寺・安堂跡、出辺墳群から京朝十二銭を伴う古墓が発見されており、半尾山古墳群の石室内から出土する例もある。それにもかかわらず、貨銭を伴う古墓が見られない点は、やはり信仰の違いに基づくものであろうか。

この古墓群は、その位置から、鳥坂寺に関連する可能性が考えられる。しかし、高井田横穴群との間に100年以上の隔たりがあり、関連性を見出すことは困難である。ただ、この周辺を墓域と規定する考えは、6世紀から続くものであるかもしれない。

古墓	平面規模(m)	藏骨器	埋土	伴出遺物
1	114 × 70	須恵器壺、綠釉陶器皿(倒置)	黑灰色土	土師器杯9、釘2
2	81 × 56	須恵器壺(正置)	暗黃褐色土	散石
3	52 × (60)	須恵器壺、土師器杯・碗(倒置)	黑灰色土	水晶製切子玉(藏骨器内)
4	35 × 35	須恵器広口壺(正置)	暗褐色土	土師器杯2
5	38 × 44	須恵器短頸壺、灰釉陶器皿(倒置)	黑灰色土	釘 10
6	60 × 60	土師器甕(倒置)	黑灰色土	散石、釘 14
7	46 × 36	須恵器広口壺、土師器杯(正置)	黑灰色土	土師器杯7、釘4
8	27 × 42		黑灰色土	
9	?	須恵器甕(正置)	?	
10	55 × 40		黑灰色土	
11	46 × 36	須恵器壺、土師器杯3(正置)	黑灰色土	水晶製玉(藏骨器内)
12	55 × 70	須恵器壺、土師器杯2(倒置?)	黑灰色土	綠釉陶器皿、釘2、刀子
13	30 × 30	須恵器有蓋三耳壺(正置)	暗黃褐色土	
14	36 × 45	土師器壺、土師器杯2(倒置)	黑灰色土	釘 1
15	50 × 50	土師器有蓋無須壺(正置)	黑灰色土	釘 3
16	50 × 60		黑灰色土	釘 21
17	40 × 40		黑灰色土	
18	33 × 33	土師器甕、土師器杯(倒置)	灰褐色土	土師器杯
19	43 × 35	須恵器短頸壺(正置)	黑灰色土	釘 3
20	70 × 70	須恵器有蓋短頸壺(正置)	暗黃褐色土	ガラス玉24(藏骨器内) 釘2
21	74 × 50		黑灰色土	
22	32 × 32	土師器甕(正置)	暗黃褐色土	散石
23	40 × 40	土師器甕、土師器杯(倒置)	灰褐色土	
24	65 × 65	須恵器甕(正置)	黑灰色土	釘 7
25	120 × 70		褐色土	土師器片数点、平瓦、釘10
26	75 × 54		暗褐色土	
27	40 × 40	須恵器広口壺、土師器杯(倒置)	黑灰色土	土師器片数点、釘1
28	66 × 58		黑灰色土	土師器片、釘1
29	55 × 55		黑灰色土	釘 1

表-5 古墓一覧表

2. 土地区画整理事業に伴う調査の総括

柏原市高井田土地区画整理事業は間もなく終了しようとしている。計画段階以来、その予定地内に一部が古史跡に指定されている高井田横穴群が存在し、隣接地には鳥坂寺跡や後期古墳が存在することから、埋蔵文化財の取り扱いについて大きな問題が生じていた。そして、1973年から翌年にかけて、大阪文化財センターが、分布・試掘調査を実施し、その成果を基に、保存区域と開発区域の明示作業が進められた。しかし、柏原市教育委員会が独自で文化財行政を行なうようになったのが1980年以後であり、この間の事情を十分に把握できていなかったことが反省点としてあげられる。また、教育委員会の再三の要望にもかかわらず、区画整理組合、柏原市都市計画課から全体計画が明らかにされなかつた点も問題であった。諸般の手続き上の問題があったようであるが、全体計画を知り得たのは1985年に至つてからであり、その後、全体の中で文化財を位置づけることを試みたため、後手にまわった部分があったことは否めない。

柏原市教育委員会が実施した区画整理事業関連の発掘調査を下記に掲げておく。

1982年8月 高井田川北側の試掘調査 『高井田横穴古墳群試掘調査概要報告書』 1983

1983年5月～1984年3月 鳥坂寺第1次調査 『鳥坂寺』 1986

1984年4月～8月 鳥坂寺第2次調査 『鳥坂寺』 1986

1985年1月 高井田川改修工事に伴う第1次調査 『高井田横穴群Ⅰ』 1986

1985年3月 高井田川改修工事に伴う第2・3次調査 『高井田横穴群Ⅱ』 1986

1985年4月～6月 高井田遺跡第1次調査 『高井田遺跡Ⅰ』 1986

1985年6月～9月 高井田横穴群内市道建設工事に伴う調査 『高井田横穴群Ⅲ』 1986

1985年9月～1986年2月 高井田遺跡第2次調査 『高井田遺跡Ⅱ』 1987

1986年4月 高井田遺跡第3次調査 『高井田遺跡Ⅲ』 1987

1986年4月～11月 高井田横穴群内の調査 『高井田横穴群Ⅳ』 1987

以上の調査による調査面積は約45,000m²である。各調査の内容については6冊の概報をそれぞれ参照願いたい。

これらの調査を進める間に、保存問題、調査範囲、期間、費用等をめぐって、再三にわたって協議を重ねてきたが、満足できるものは少なかった。また、事前着工等によって調査を実施できなかつたこともあった。しかし、大阪府教育委員会の協力を得て、遺跡の重要性や調査の必要性に対する説明を繰り返し、徐々にではあるが、理解を深めてもらうことができたと考えている。調査によって確認された遺構の大半は保存できなかつたが、一部は保存することに同意を得た。

まず、工事着手前から、市道建設地を除く高井田横穴群全域と高井田川北側の円墳11基は樹木保全地等として保存されることになっていた。その後、鳥坂寺僧房跡等が検出された鳥坂寺第1・2次調査区に対しても、宅地予定地を変更し、公園として保存される計画があるが、そ

の取り扱いをめぐって確定には至っていない。高井田遺跡第1次調査で発見された安堂6支群3号墳は、その石室を移設し、現在復元・整備作業を進めている。

高井田横穴群に対しては、市民の関心が高く、マスコミの影響も大きく、対応に苦慮した。横穴群を完全保存すべきことは当然であるが、区画整理事業に着手された以上、大きく計画変更することは不可能であった。そのため、市道建設工事によって7基、今回の調査で検出された1基が破壊された。しかし、わずかではあるが成果もあった。当初は埋没し、宅地化の予定であった72~74号墳を現状保存することになった。また、既発見の横穴に接するところまで開発が予定されていた横穴群北東部に対して、新たな横穴が発見される可能性が高いことと、現存する横穴の保存状態に影響を及ぼすことが考えられるため、保存区域を拡大するよう要望を繰り返してきた。その結果、1986年8月に至って、約3,000m²の保存区域拡大が提案され、これを了承することになった。また、教育施設用地(約1,000m²)を保存区域隣接地に変更し、当面は教育施設の建設を見送ることにした。これによって、当初の計画案より約4,000m²が拡大保存されることになり、大阪府、柏原市教育委員会ともに、これを最終決定とした。そのため、保存される部分の調査は行なっていない。

この約3,000m²の拡大区域を加えると、樹木保全地として保存される高井田横穴群の総面積は、35,525.0m²となる。その中で1,481.0m²は国史跡として指定されており、残りの34,044.0m²の史跡追加指定申請を1986年10月に文化庁に提出した。保存区域全体を史跡に指定し、残された横穴の保存を計り、再び開発されることがないようにすることを目的としたものである。また柏原市では、保存区域を史跡公園とし、横穴の保存、公開、歴史博物館の建設を実施していく計画である。そのためには保存区域を公有地化する必要があると考え、史跡の買上げ申請も文化庁に提出した。

それと共に、区画整理事業地区の東側に位置する大阪府立修善院用地内に存在する横穴群の史跡追加指定申請も提出し、高井田横穴群全域の史跡指定を行ないたいと考えている。また横穴の保存策に対して、昭和62年度史跡保存管理計画策定事業の補助金を申請しており、横穴群の保存についても最良の策を講じるべく、検討していきたいと考えている。

区画整理事業のような大規模な事業に対しては、その計画段階から十分な検討を加えていく必要性を痛感した。今回のように、事業に着手されてからでは、十分な対応策を講じることは不可能である。今後も柏原市域では大規模開発が予想され、今回の経緯を教訓としてその対応に生かしていきたいと考えている。

高井田横穴群の史跡公園化は慎重に進めていきたいと考えている。鳥坂寺跡や安堂6支群3号墳移設石室を含め、市民にとって歴史教育、自然観察等に有効に利用していただけるものにしていきたい。そのために、市民の方々の要望も、教育委員会に寄せていただけたら幸いである。

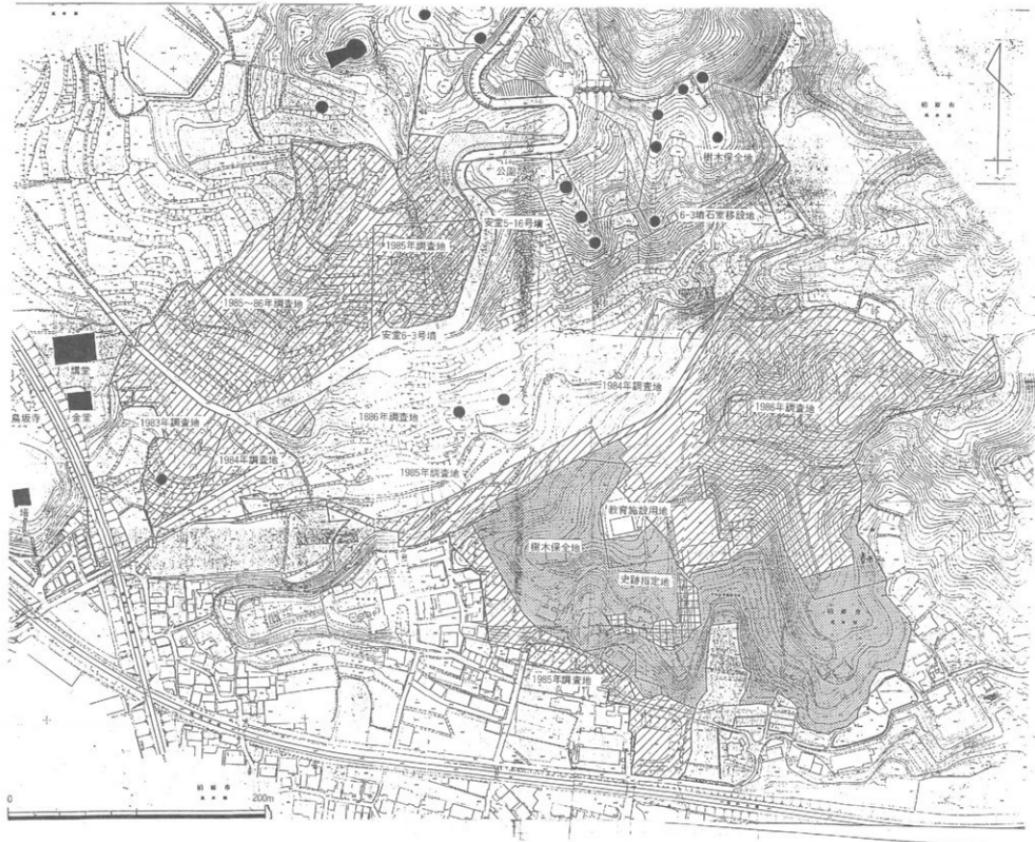


図 94 区画整理事業全体図

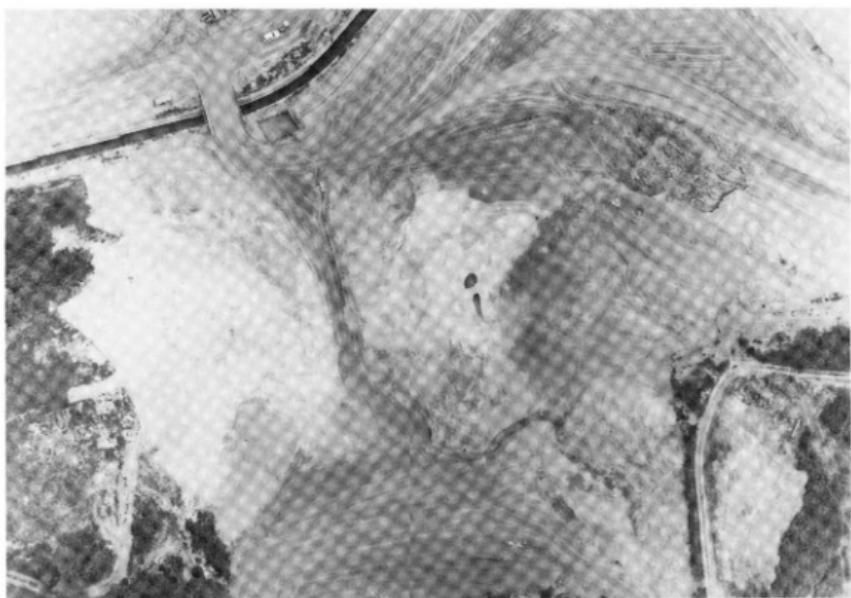
図 版



調査前状況



保存区域・玉手山丘陵



南から



北から



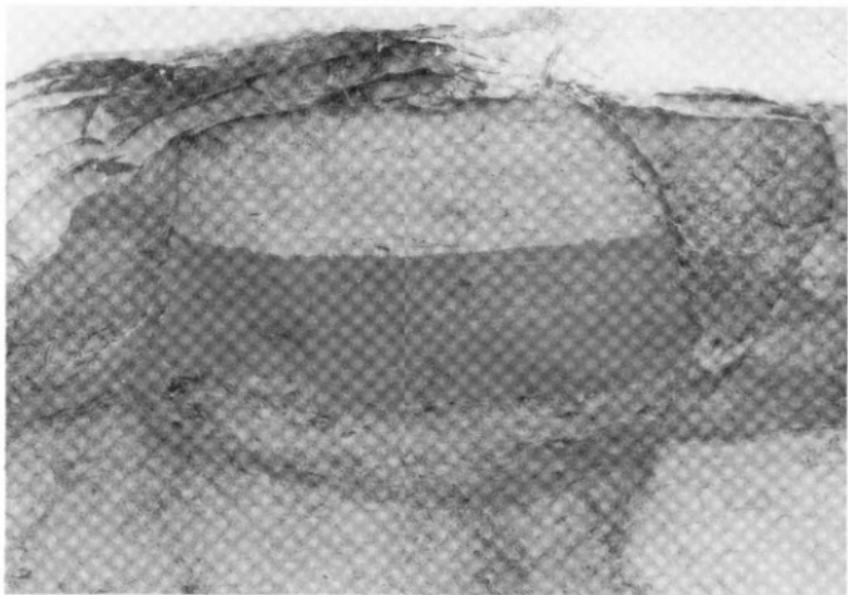
南斜面



西地区



検出状況



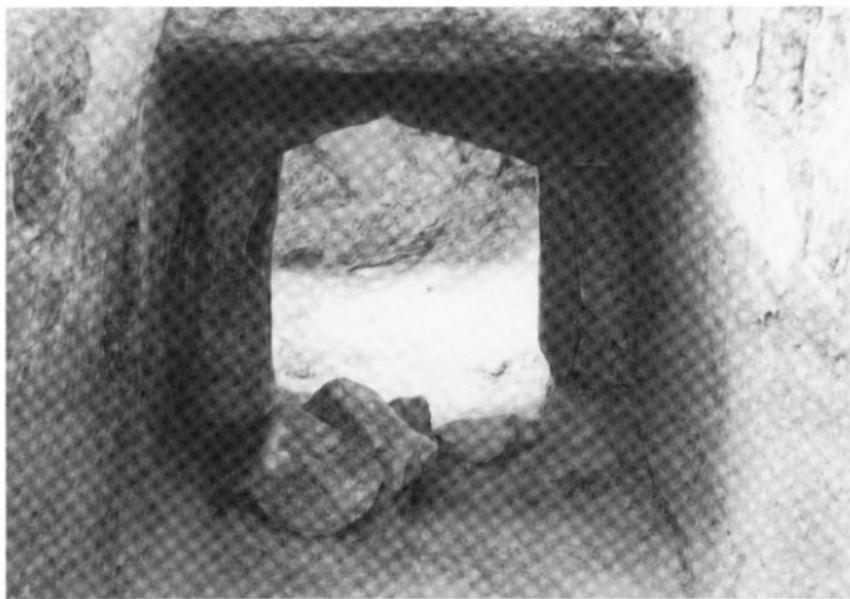
玄門土層



墓道・未完成横穴－1



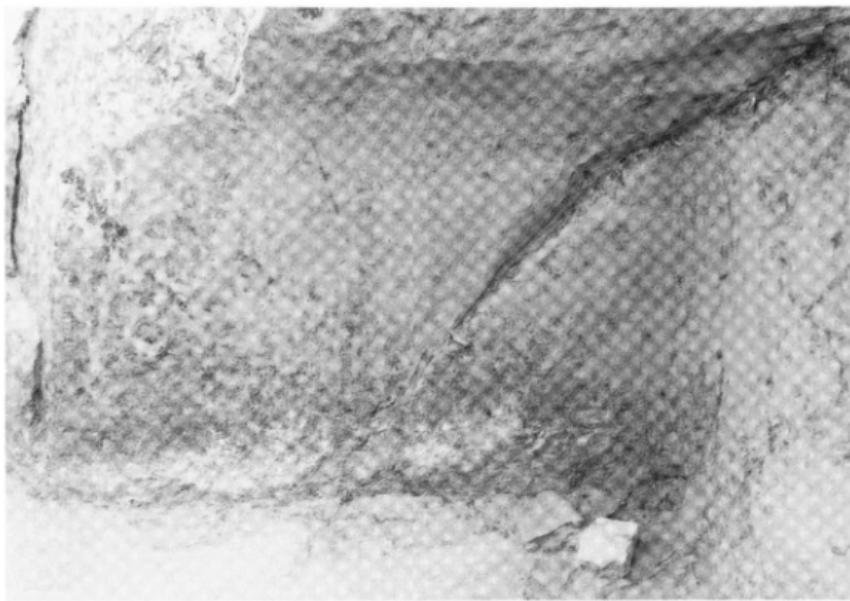
墓道



漢門



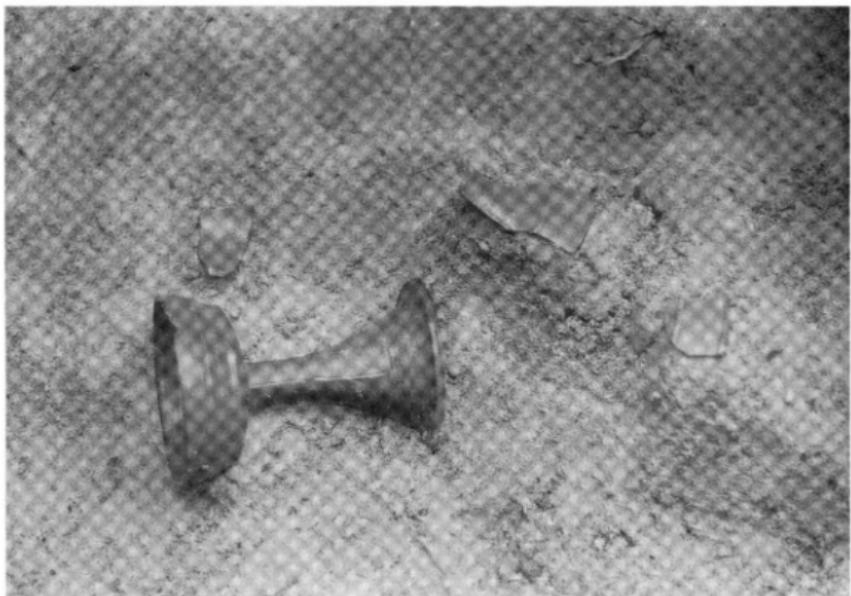
玄門



奥壁



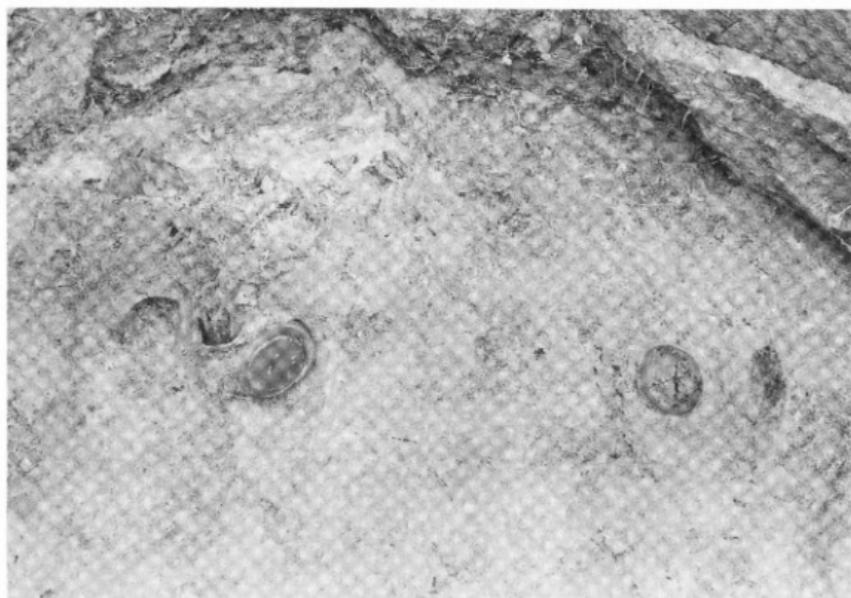
全景



須惠器高杯出土狀況



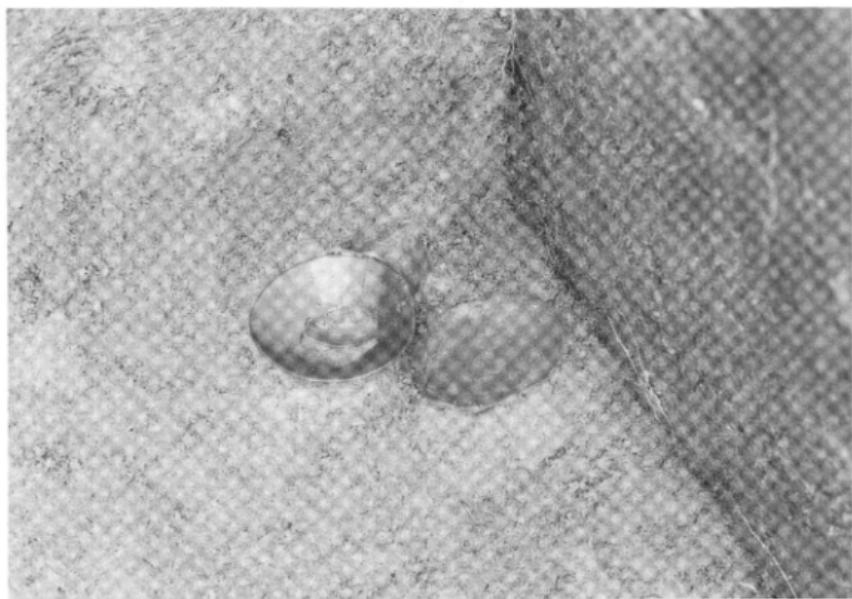
土師器杯出土狀況



土師器出土状況



土師器出土状況



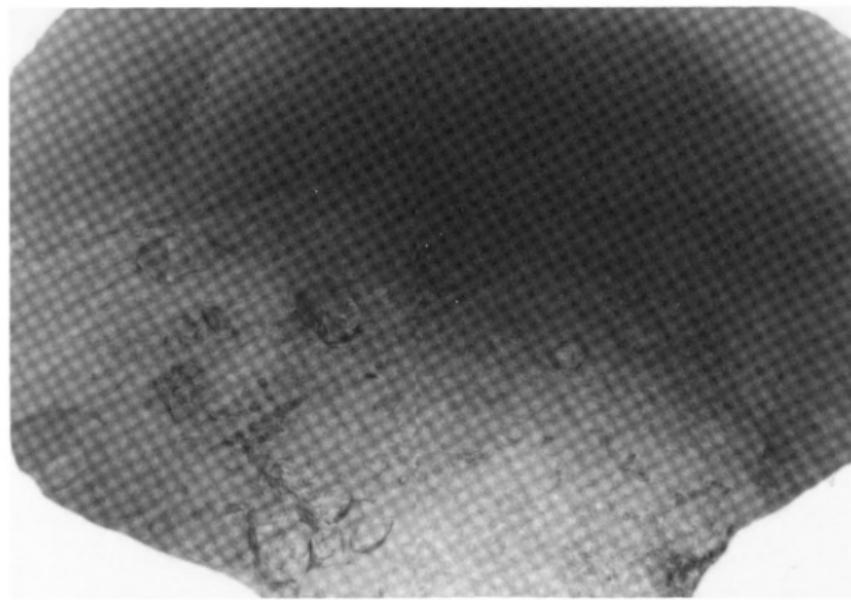
瓦器出土状況



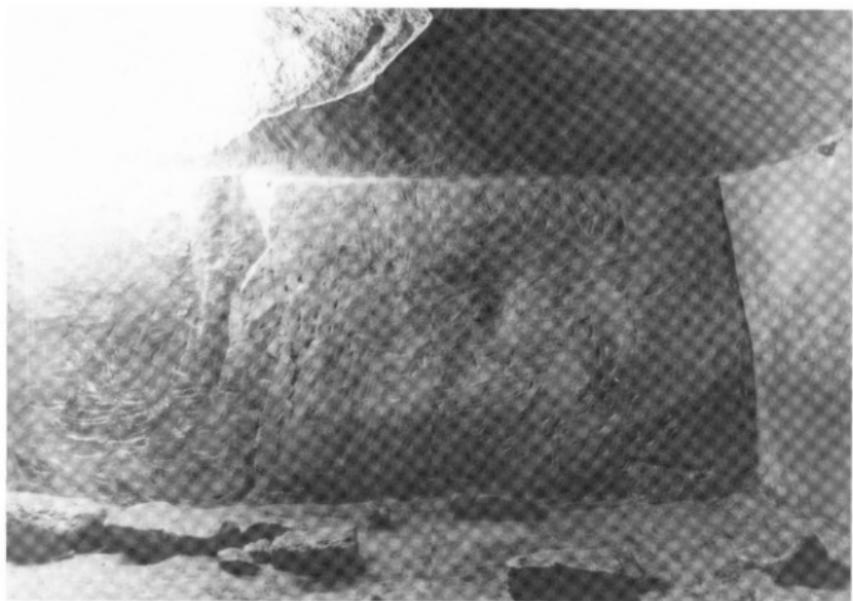
鉄斧出土状況



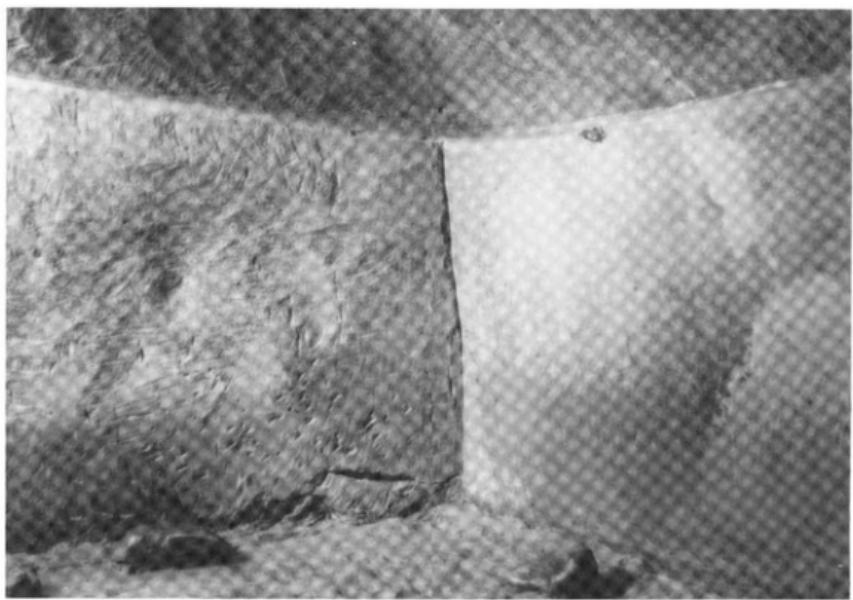
検出状況



玄室



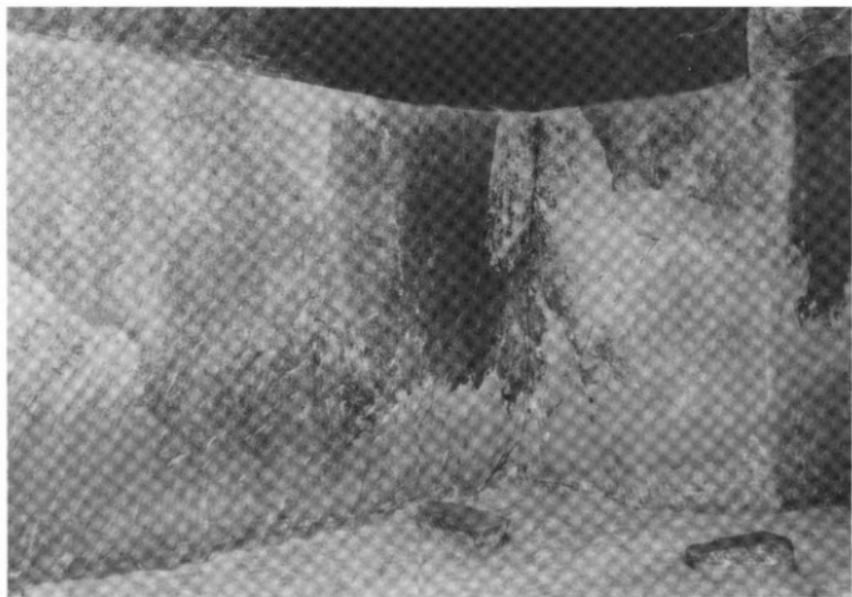
奧壁



奧壁



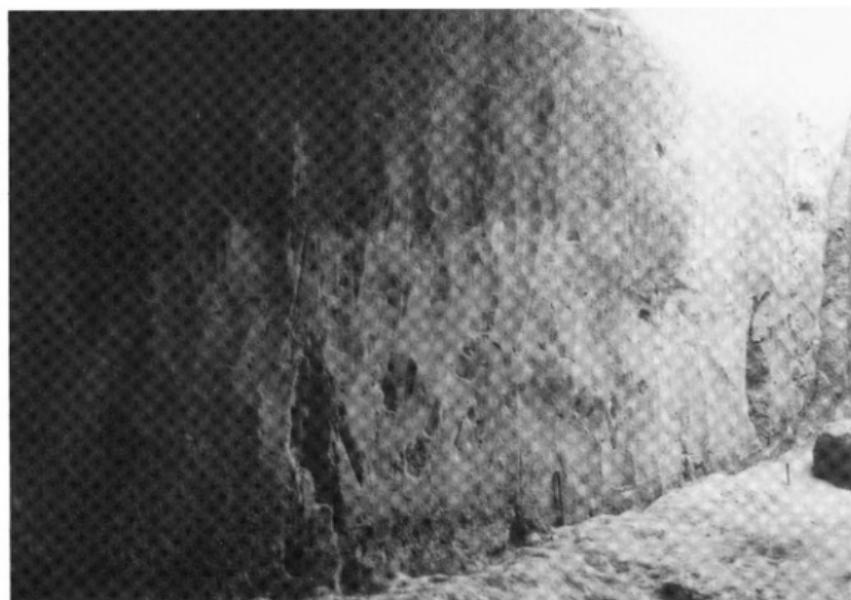
左壁



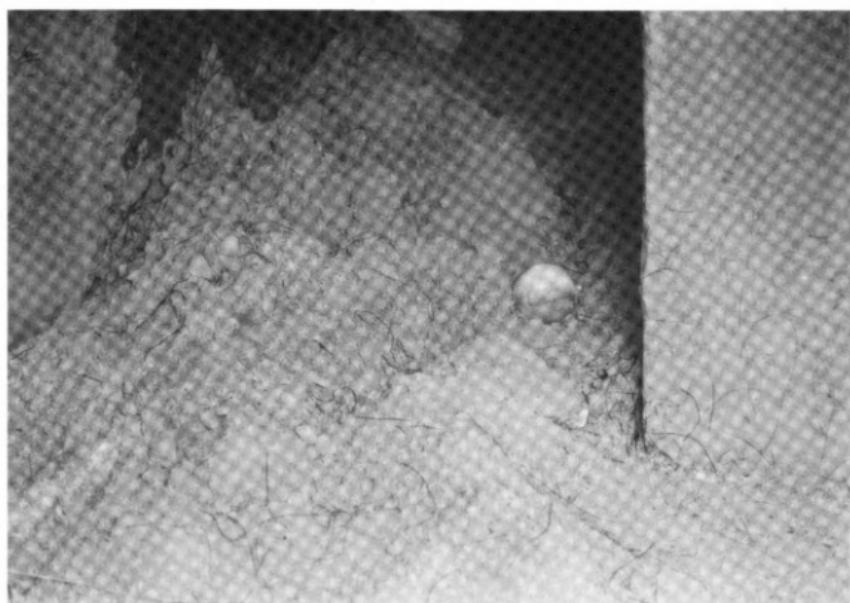
左壁



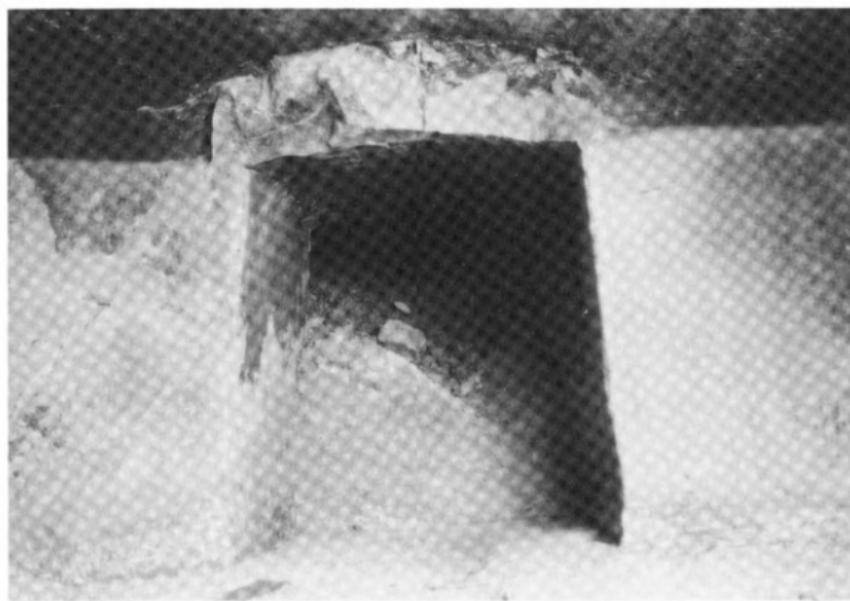
右壁



右壁



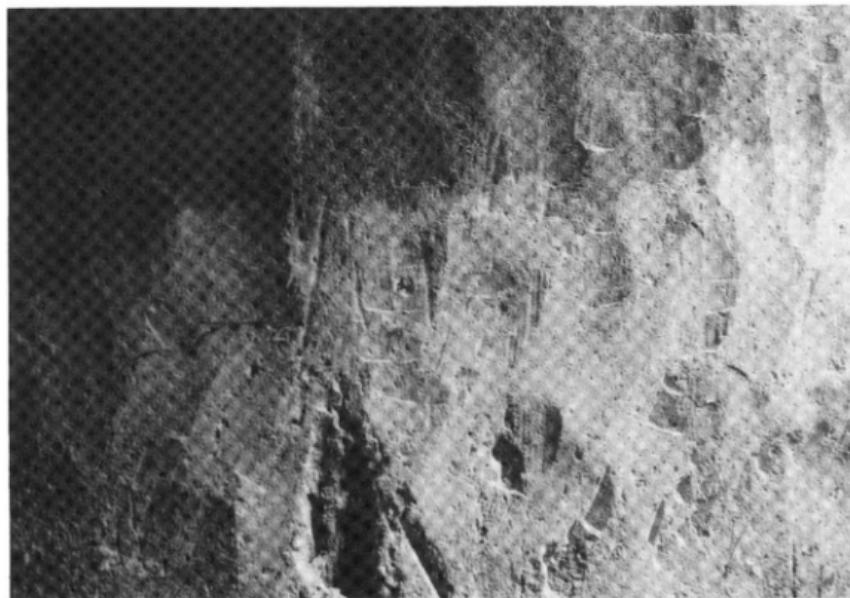
112号填
蒸道埋没状况



蒸門



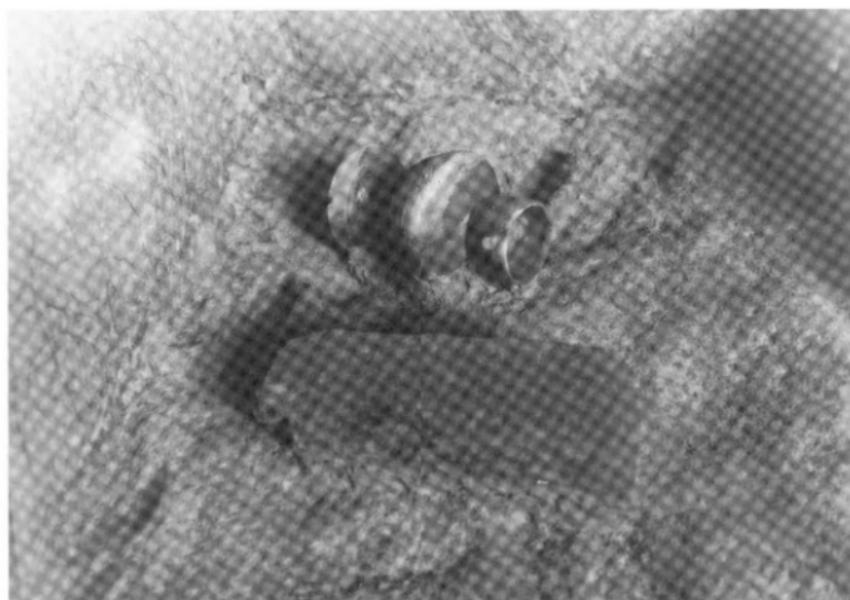
天井



右壁工具痕



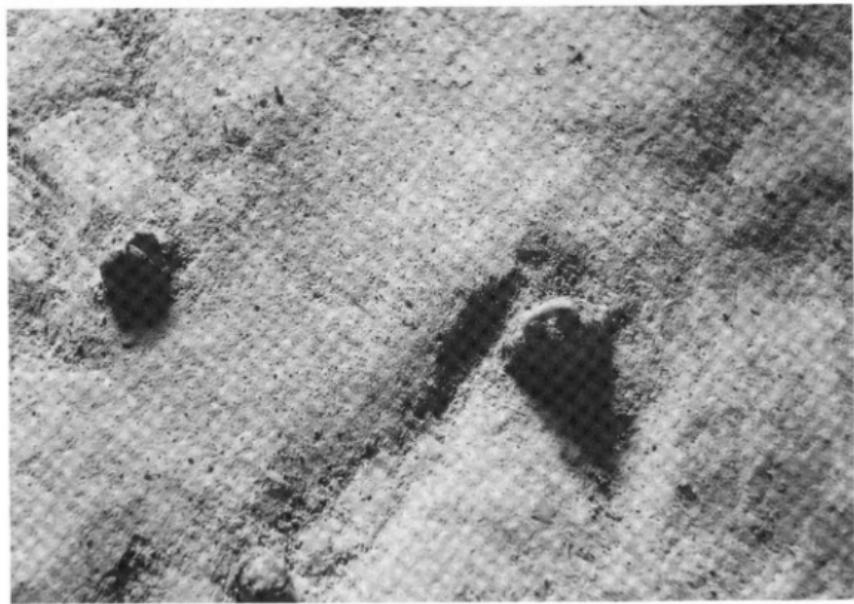
土師器椀出土狀況



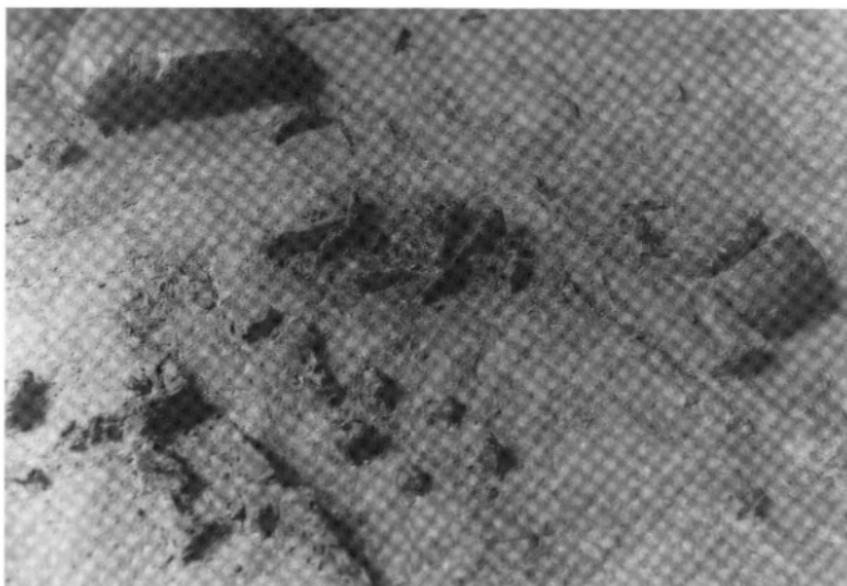
須惠器壺出土狀況



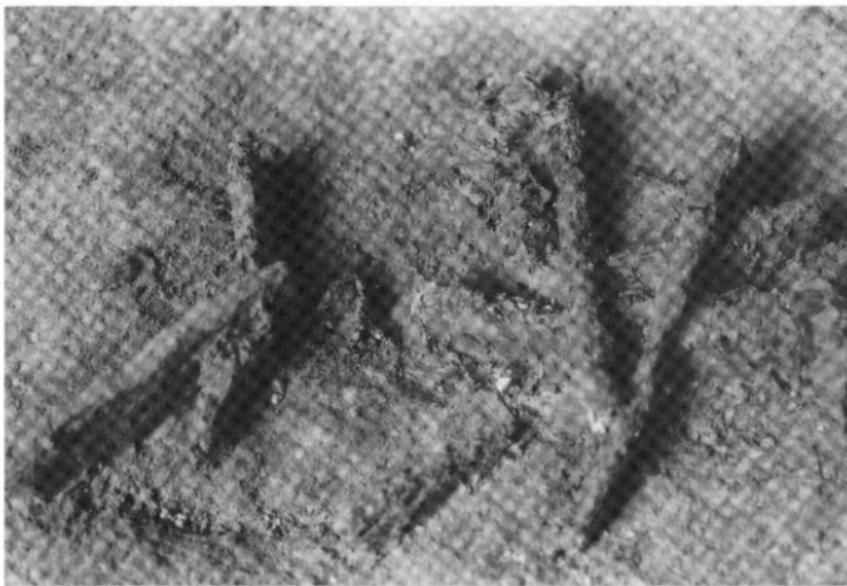
土師器高杯出土狀況



耳環-8·9出土狀況



鐵釘出土狀況



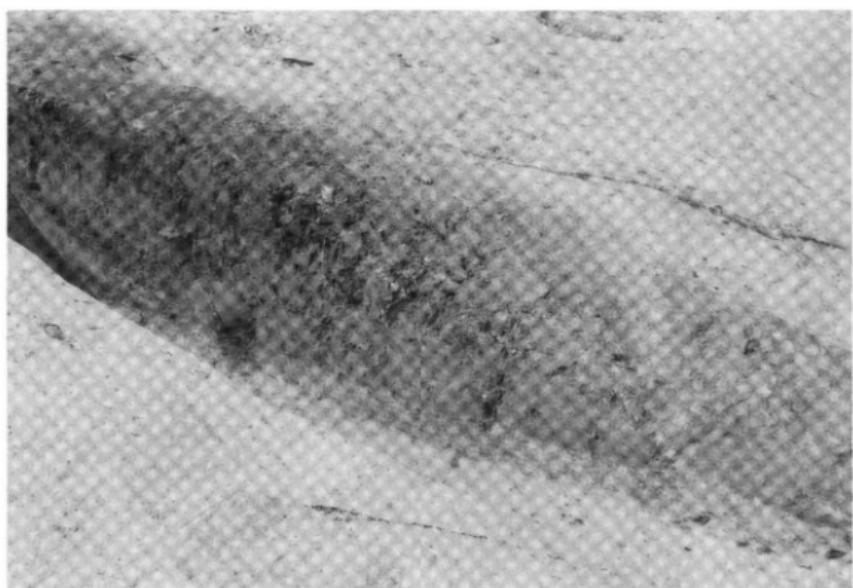
鐵釘出土狀況



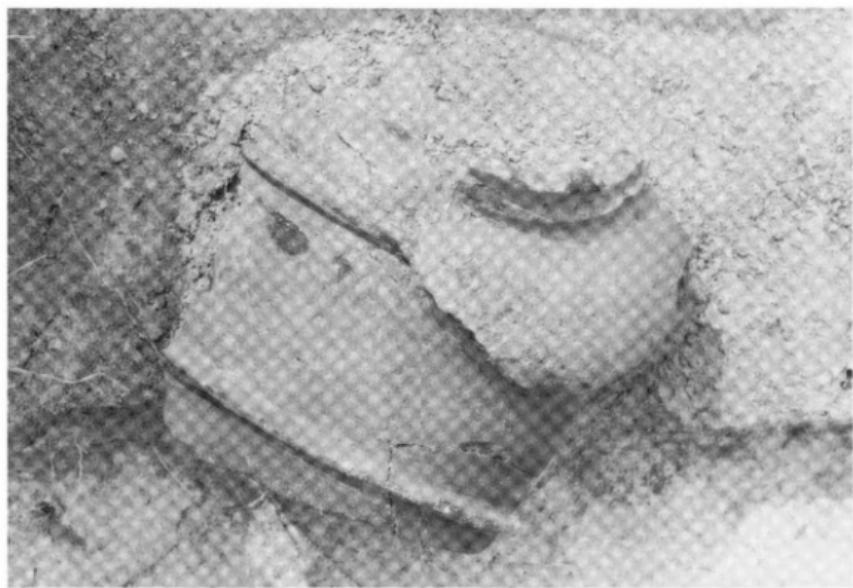
未完成横穴—1



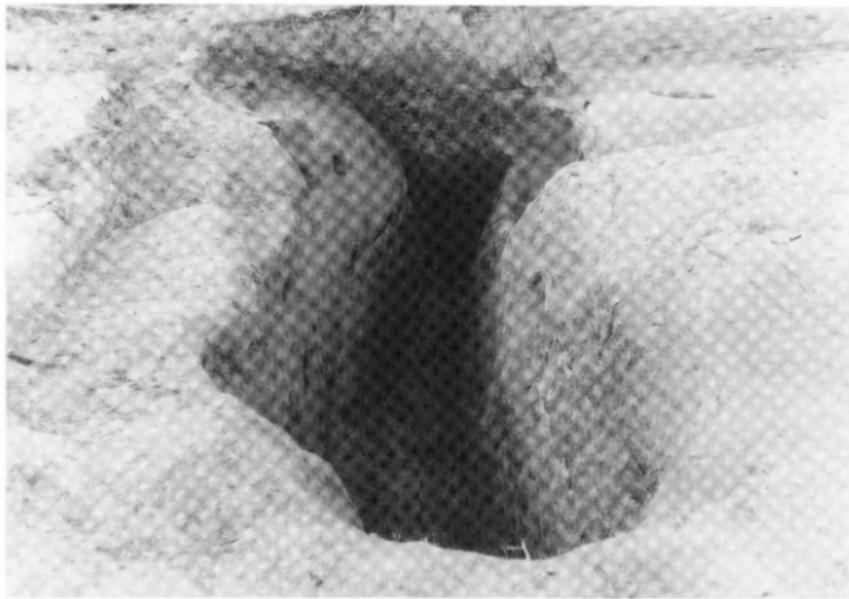
未完成横穴—2



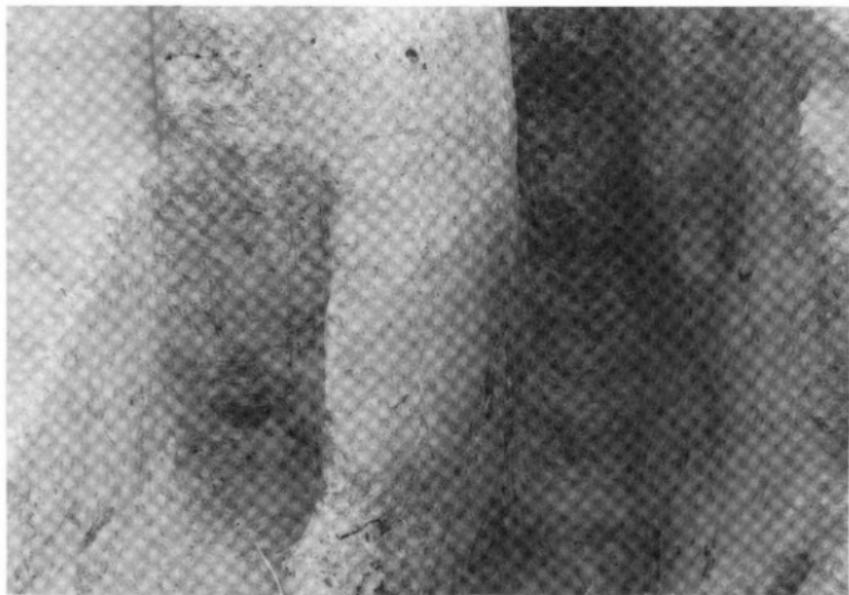
半掘状況



埴輪出土状況



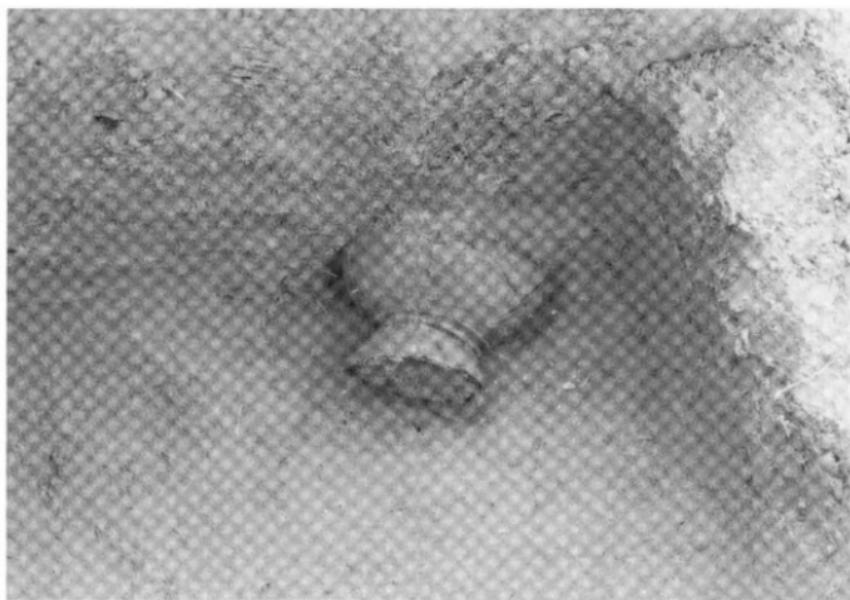
全景



全景



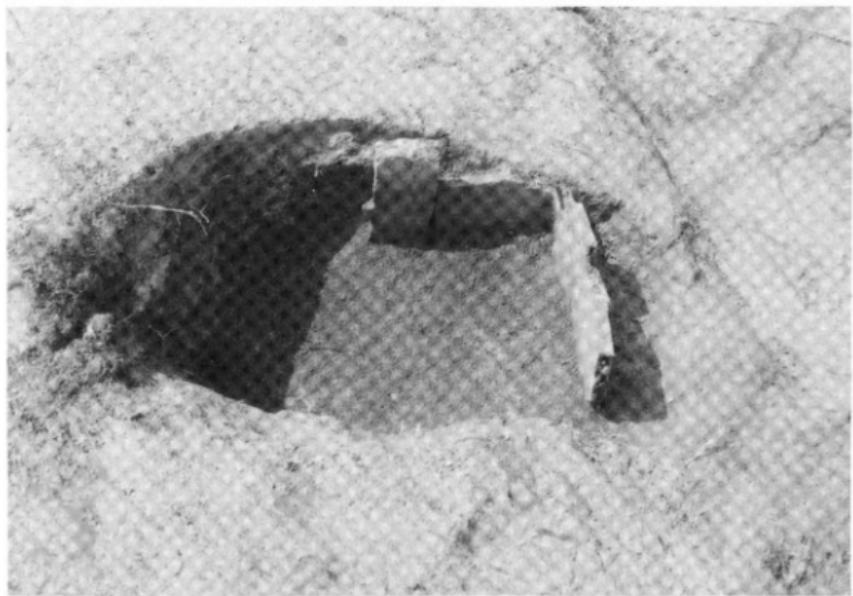
土層



埴輪出土狀況



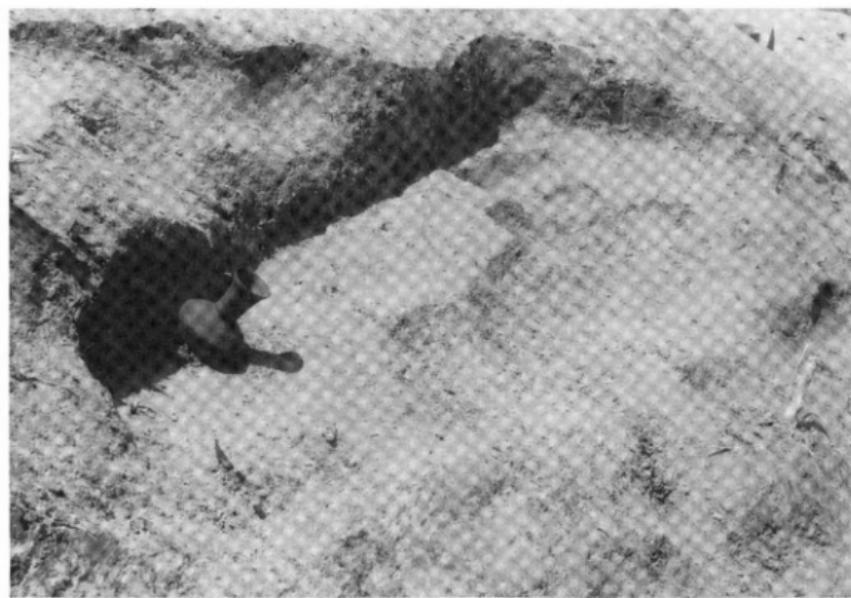
東から



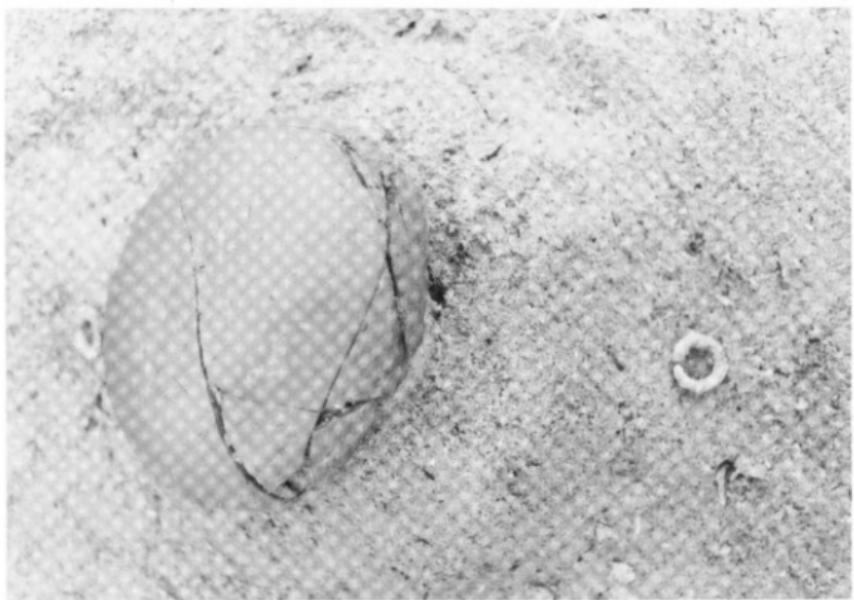
南から



全景



須惠器壺出土狀況



土坡墓—1



土坡墓—2



遠景



近景



上面



藏骨器



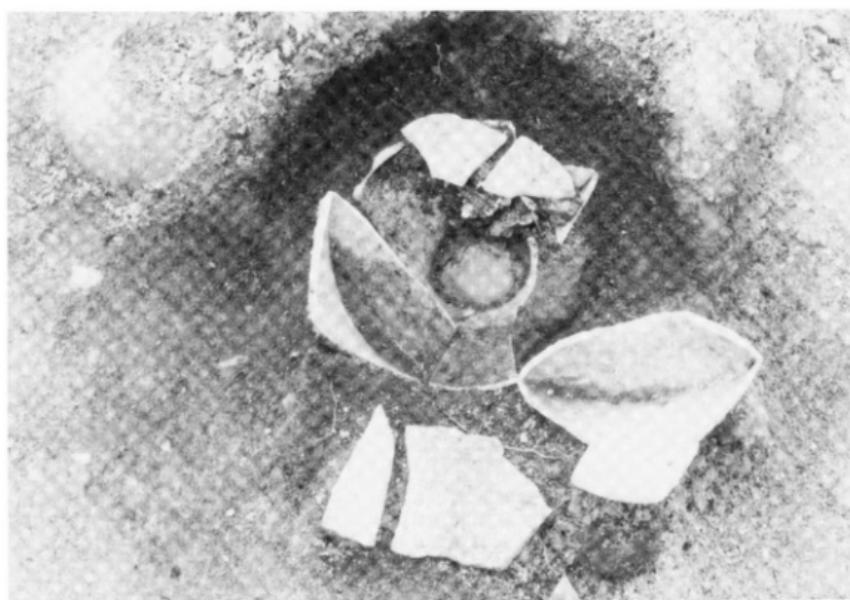
全景



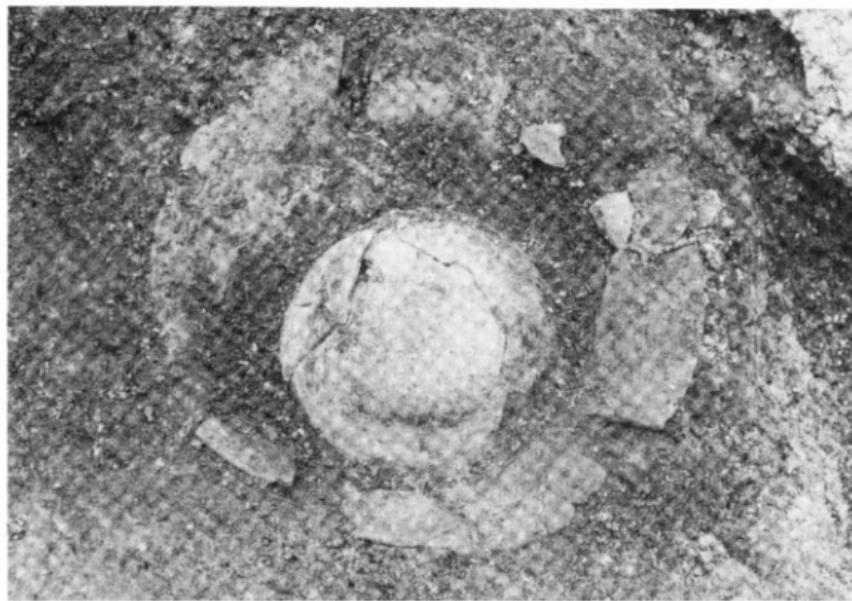
藏骨器



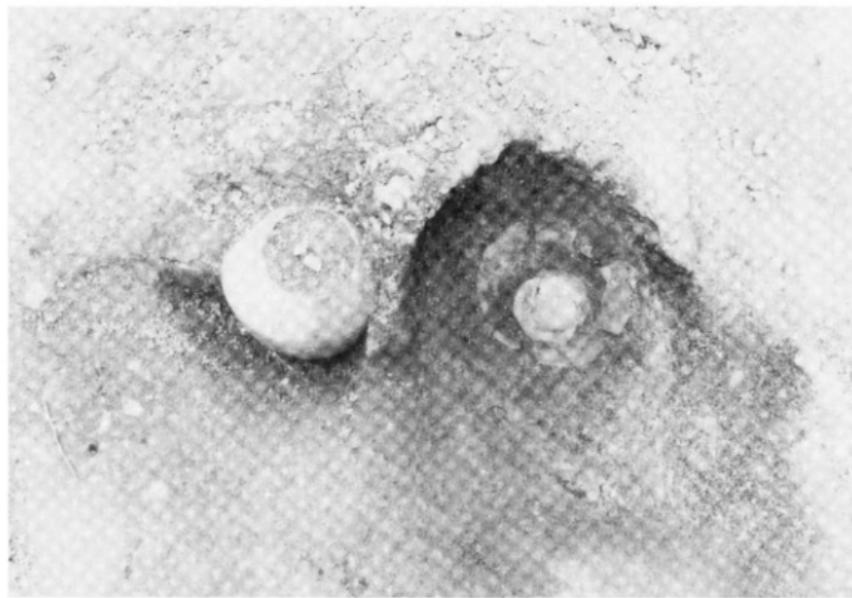
上面



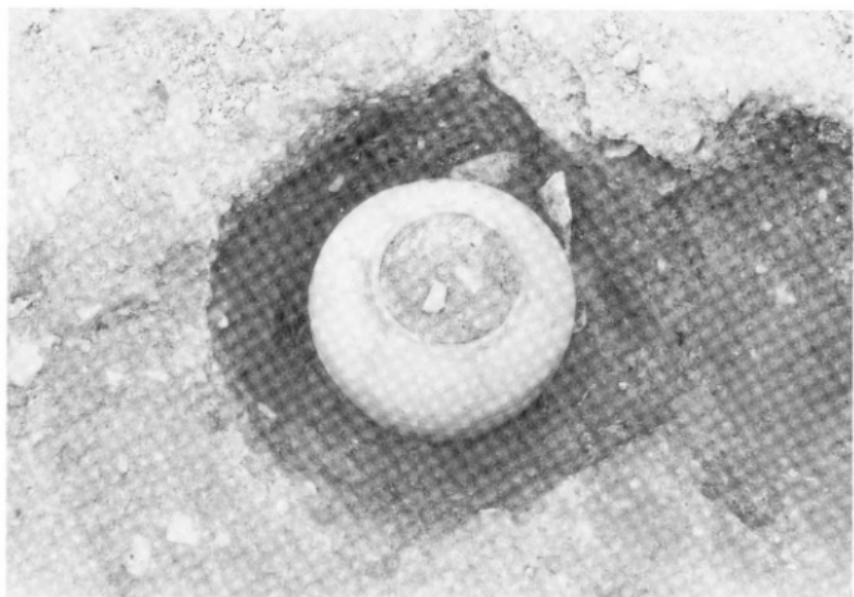
中面



下面



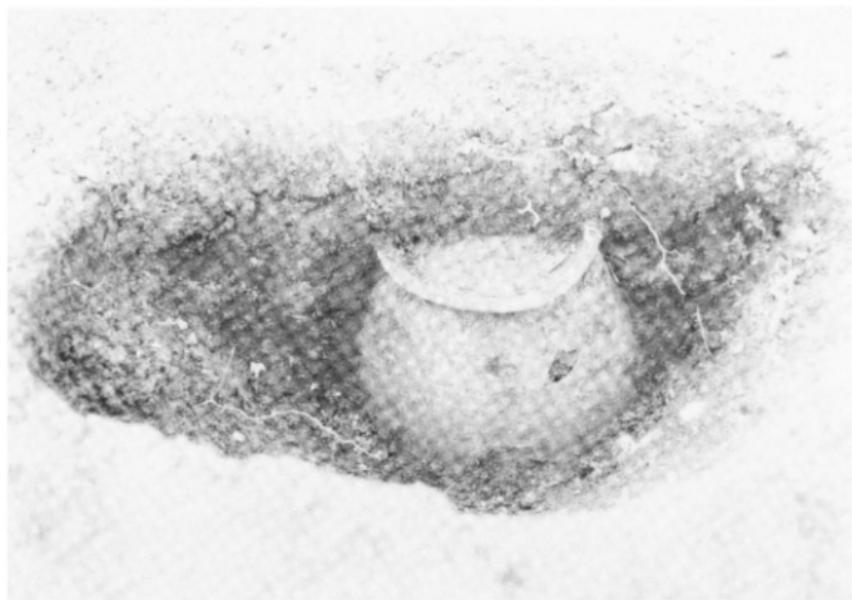
古墓—3·4



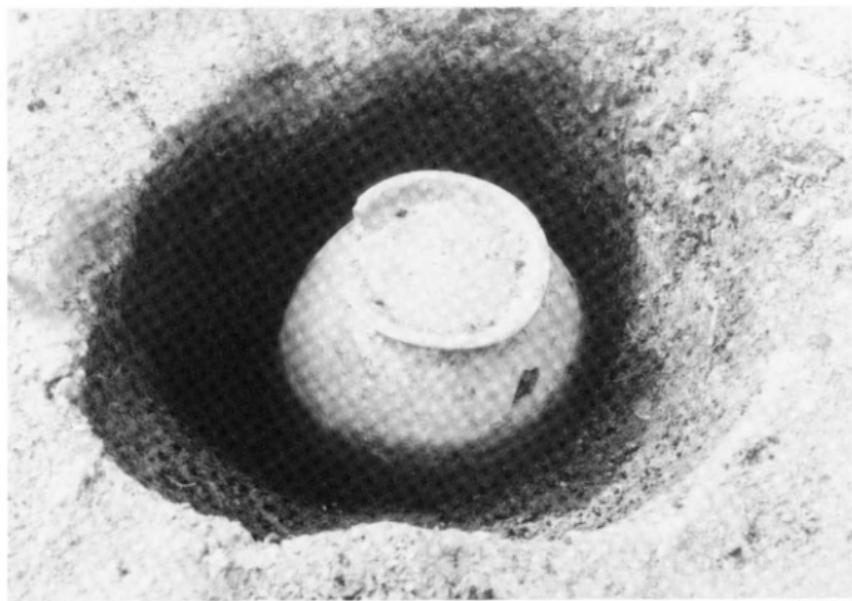
藏骨器



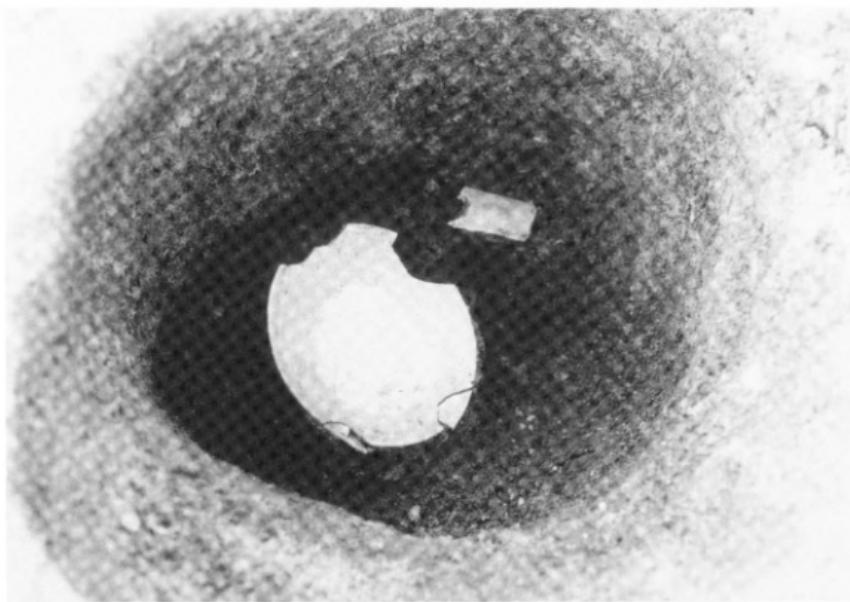
藏骨器



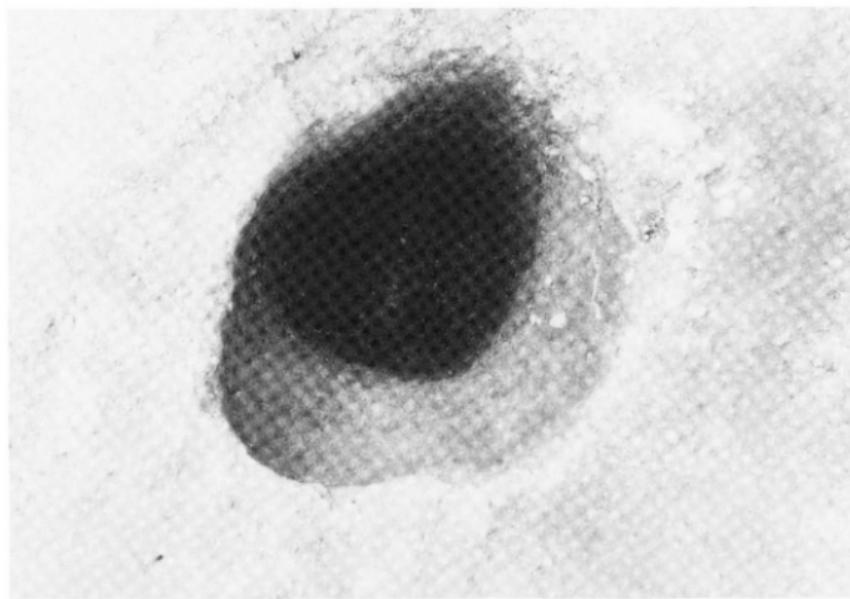
半掘状况



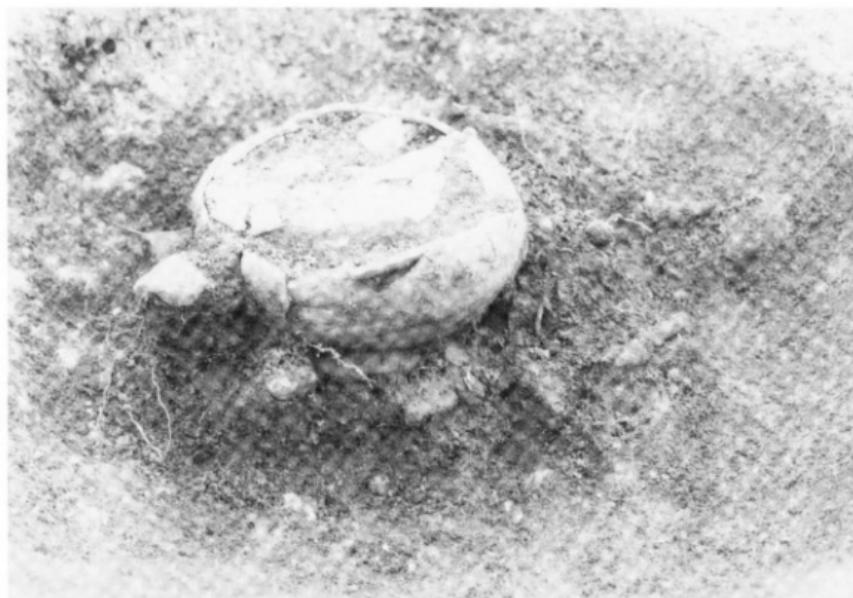
藏骨器



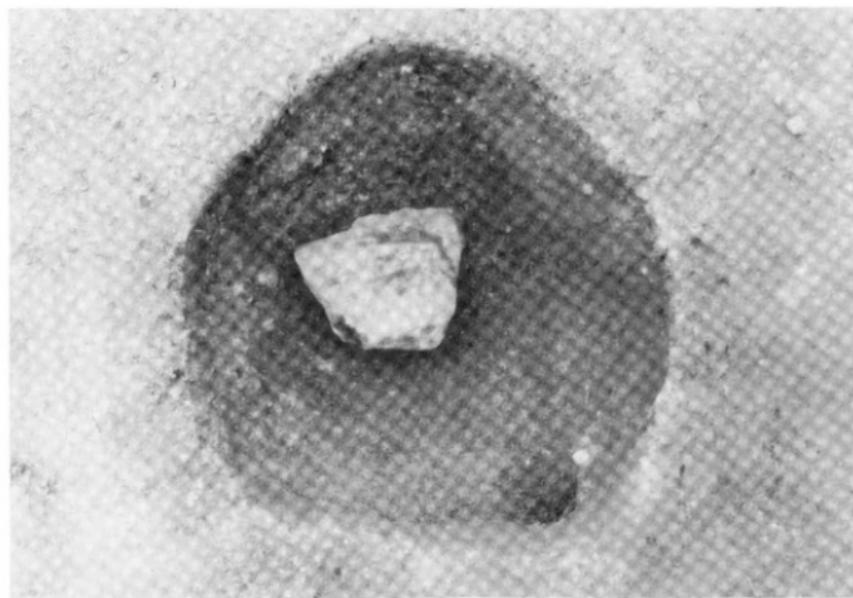
下面



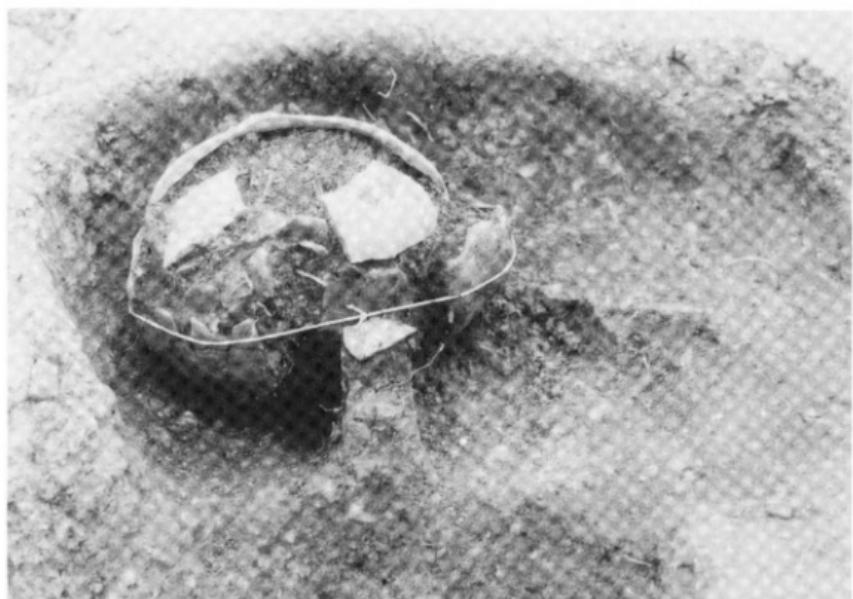
完掘状况



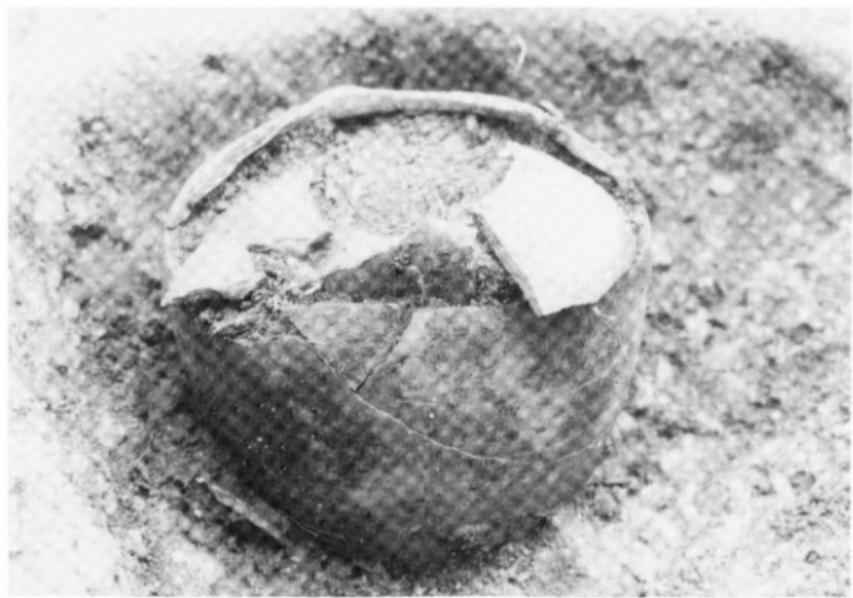
半掘状况



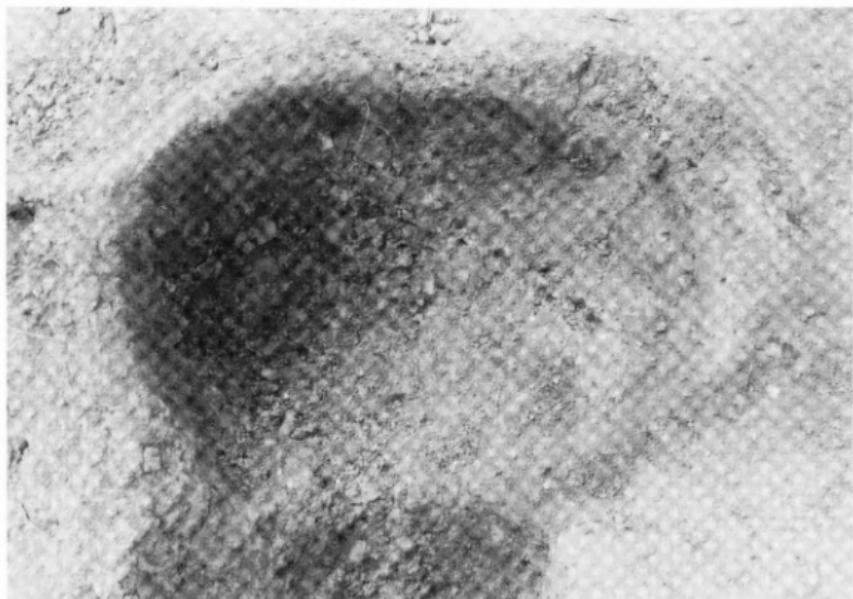
完掘状况



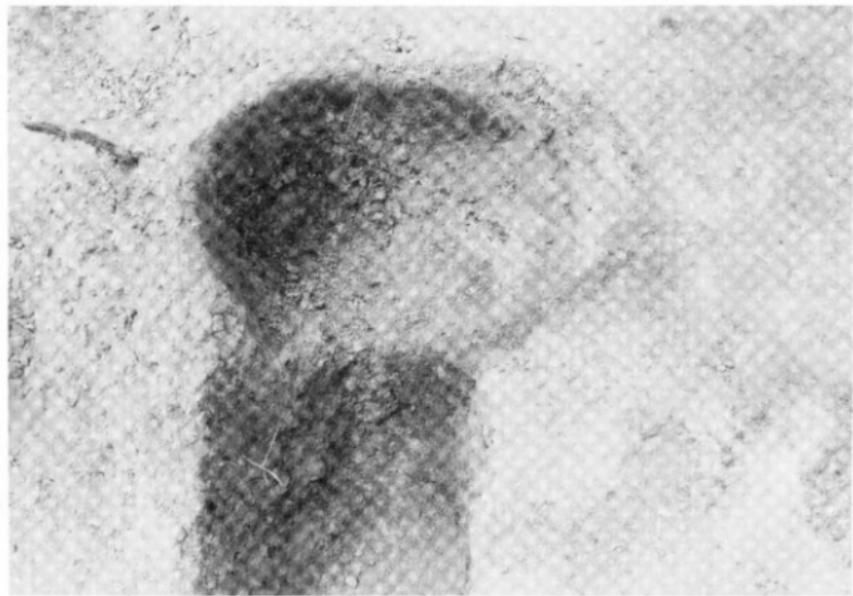
藏骨器・土師器杯



藏骨器



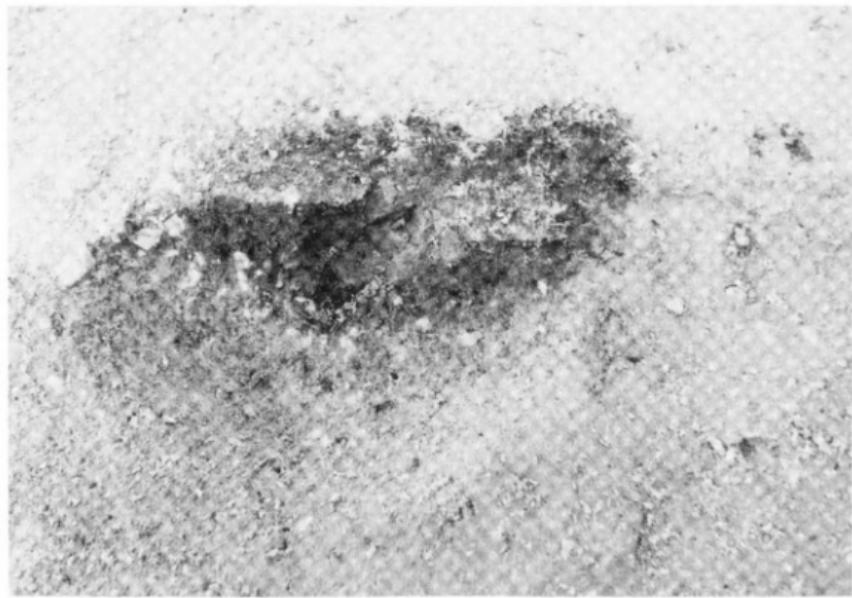
古墓—7



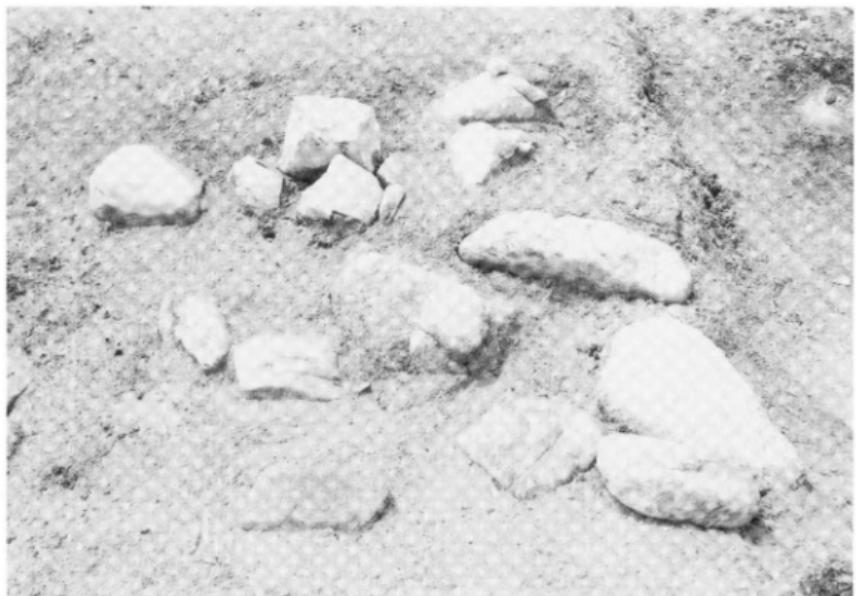
古墓—7・8



古墓—9



古墓—10



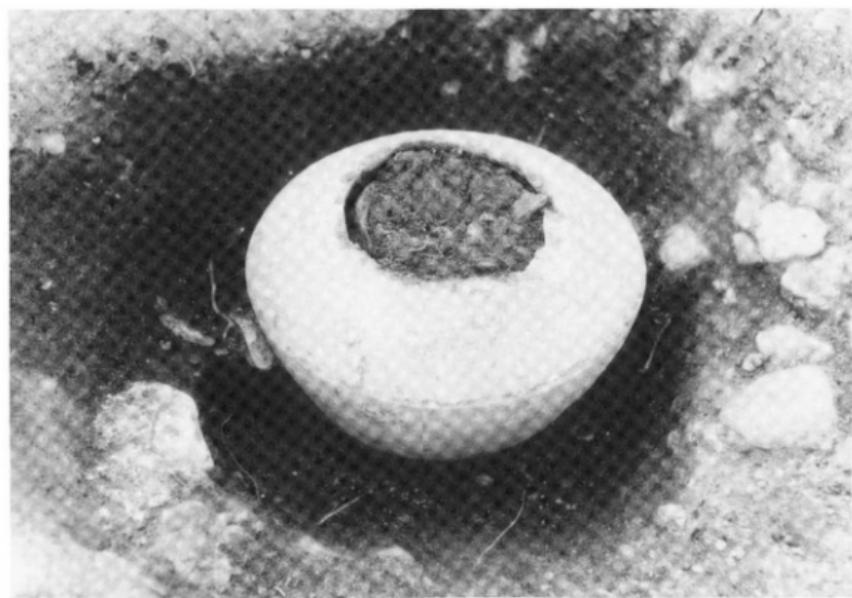
石敷き遺構



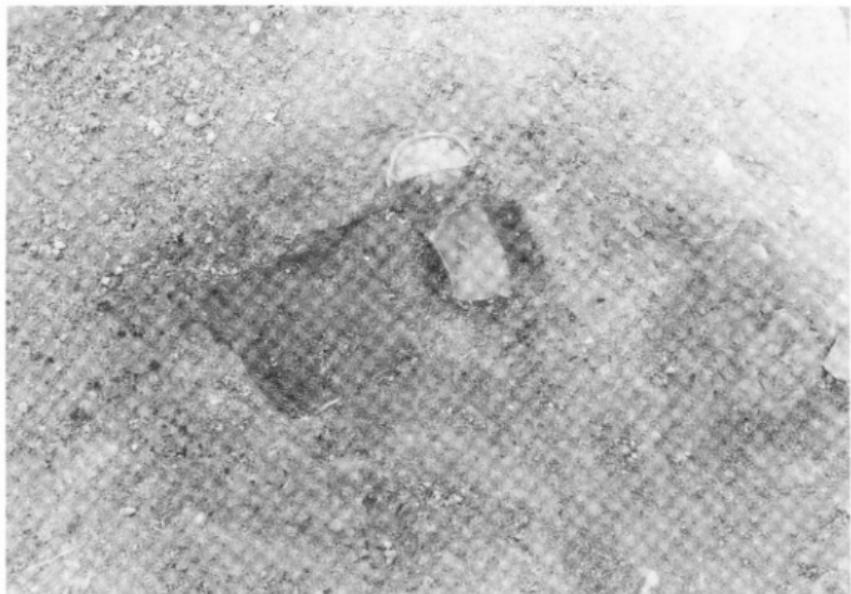
古墓-11・12上面



上面



藏骨器



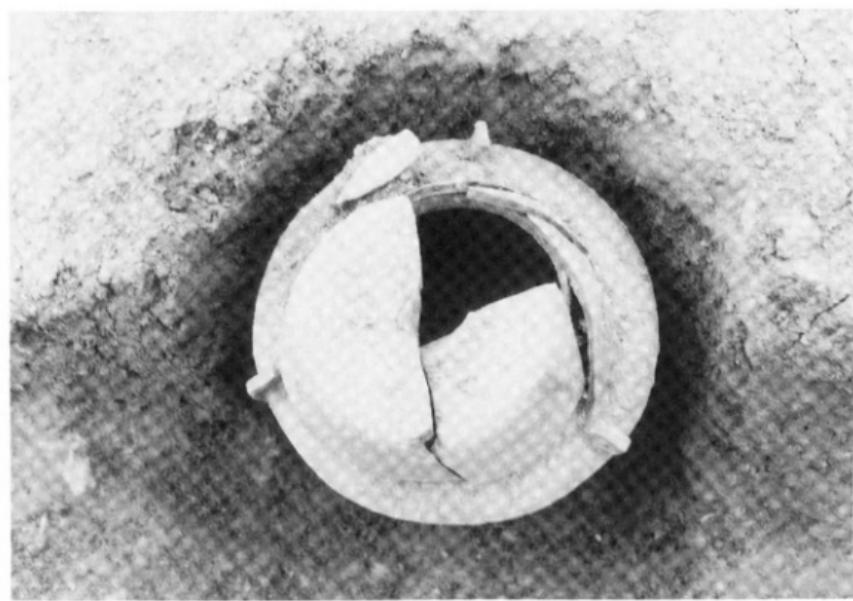
檢出狀況



綠釉陶器碗出土狀況



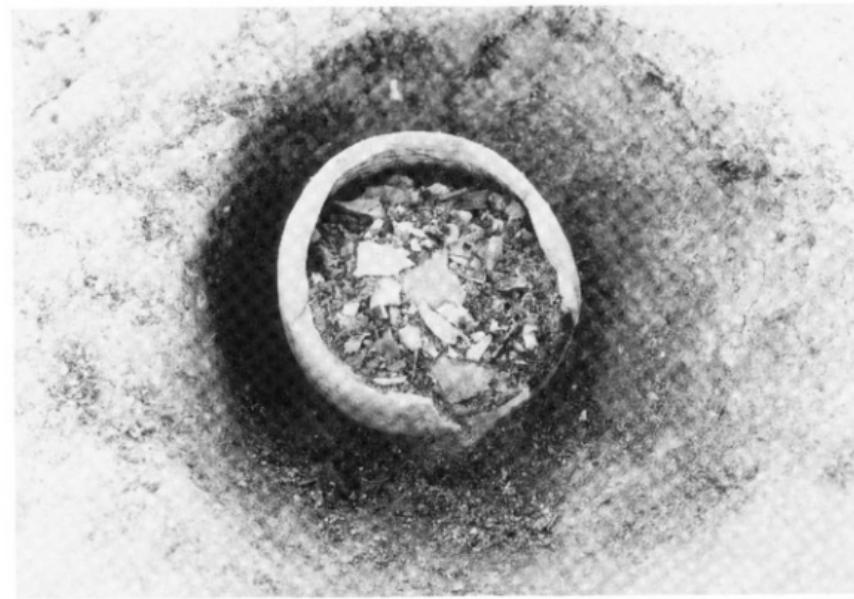
半掘狀況



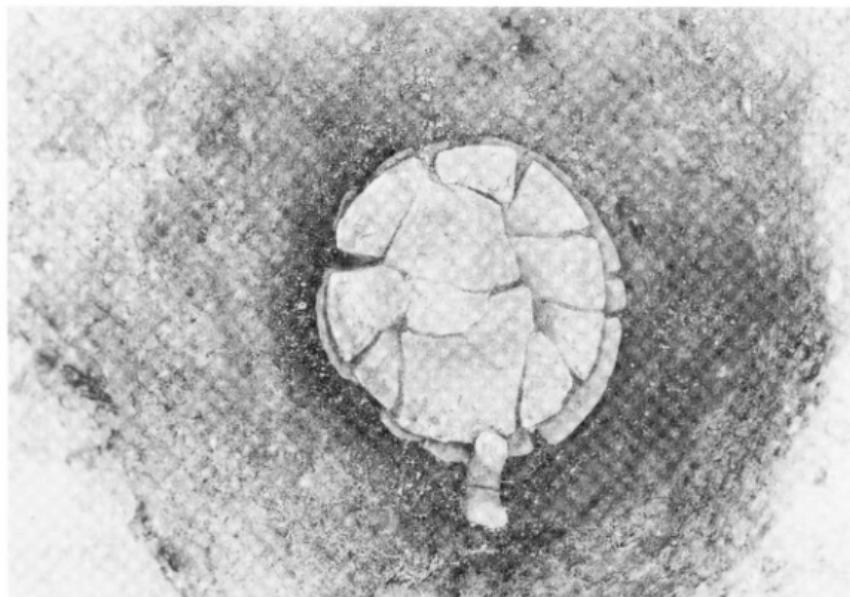
歲骨器



半掘状况



盛骨器



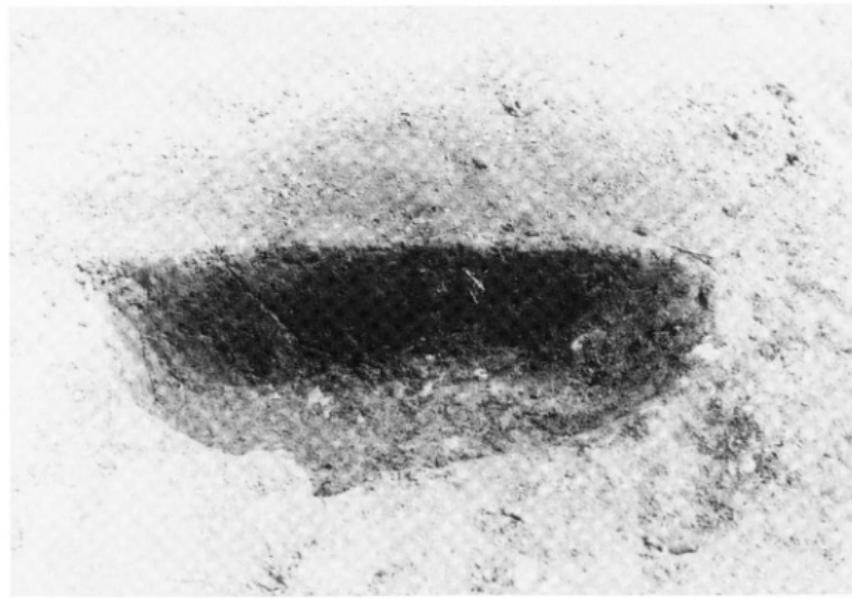
古墓—14 下面



古墓—15



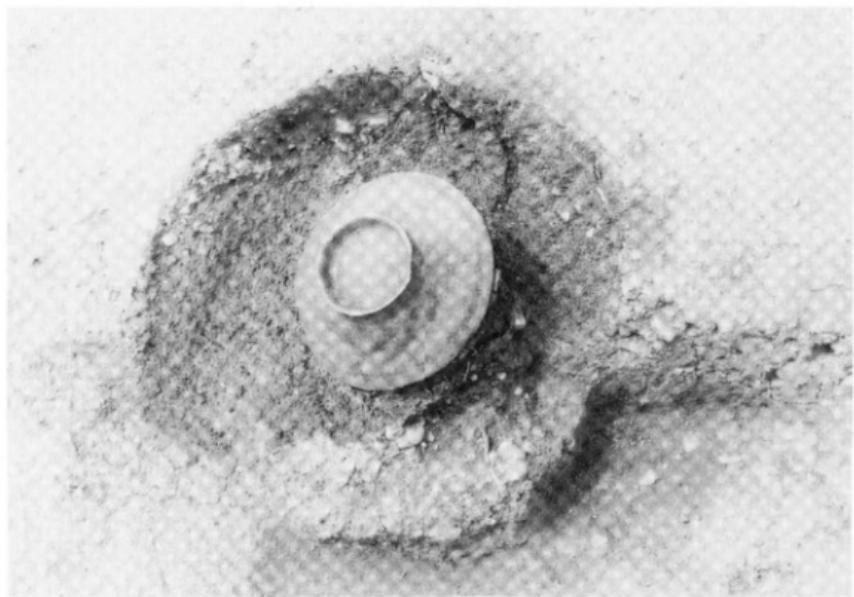
古墓—16



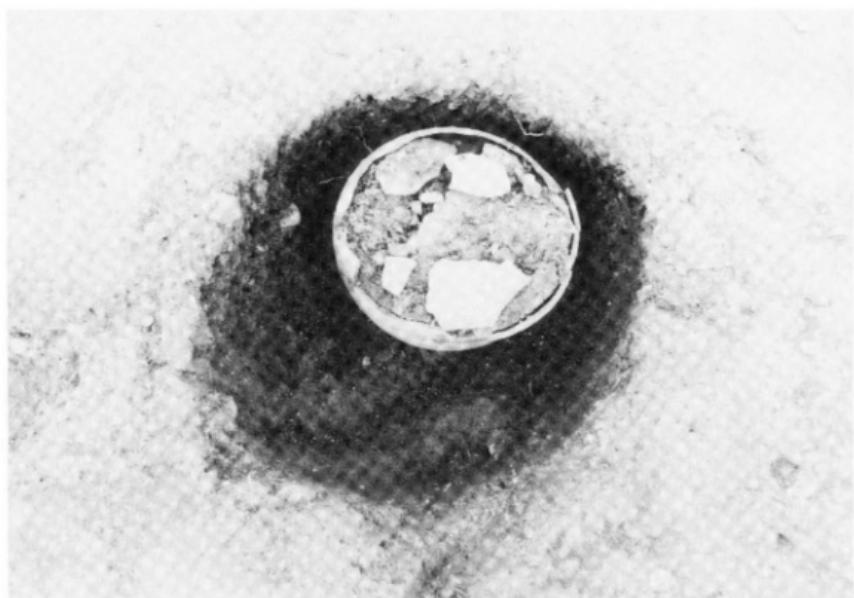
古墓—17



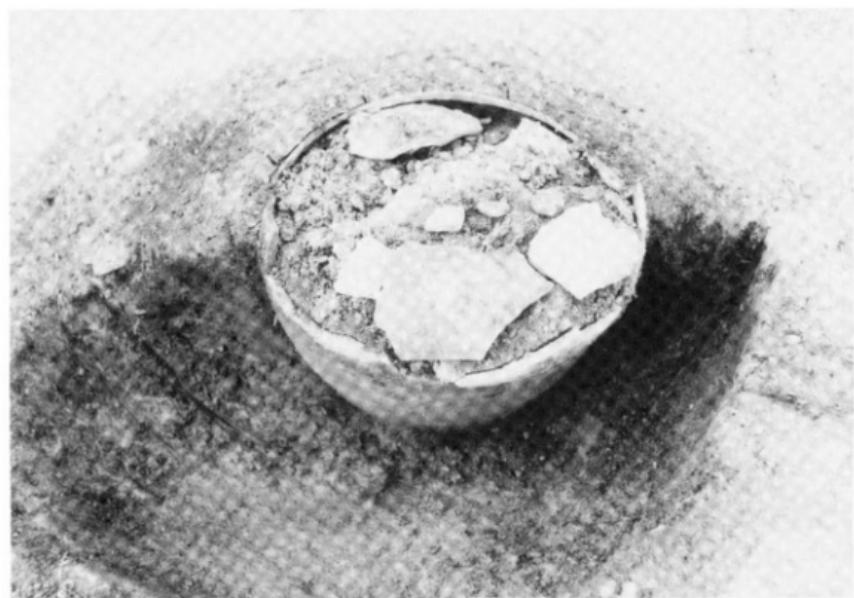
藏骨器



下面



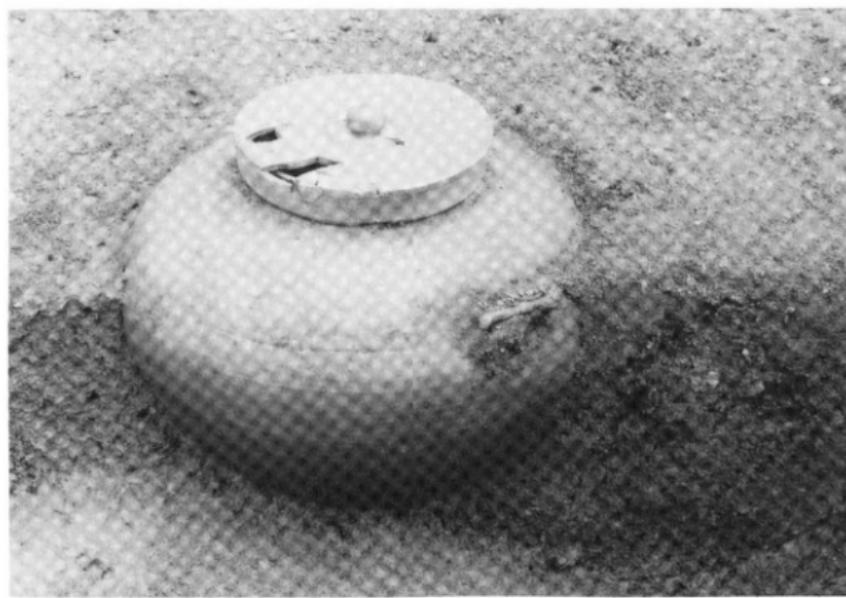
藏骨器



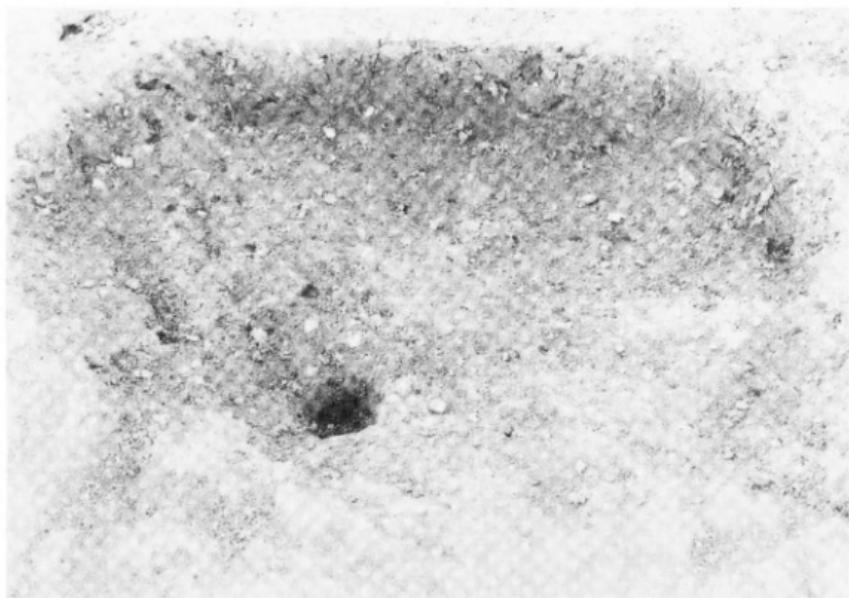
半掘状况



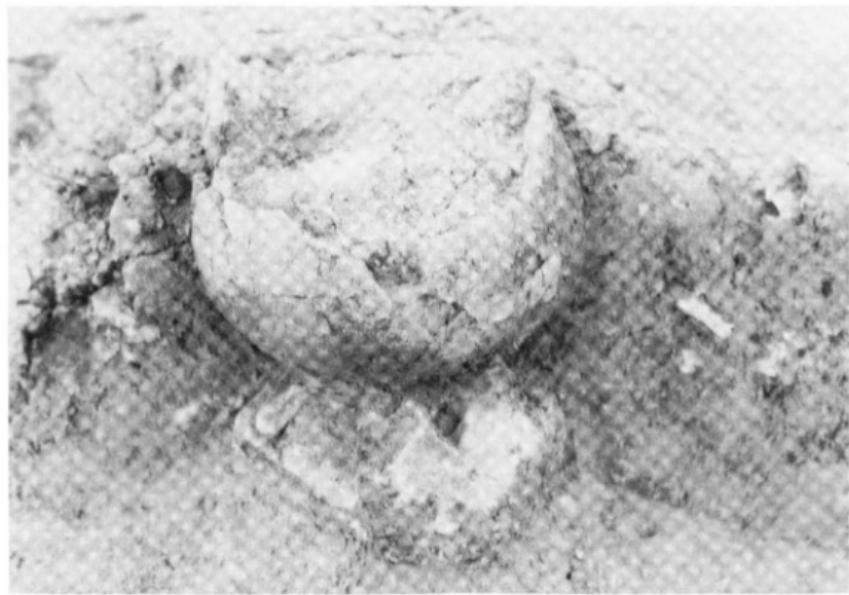
全景



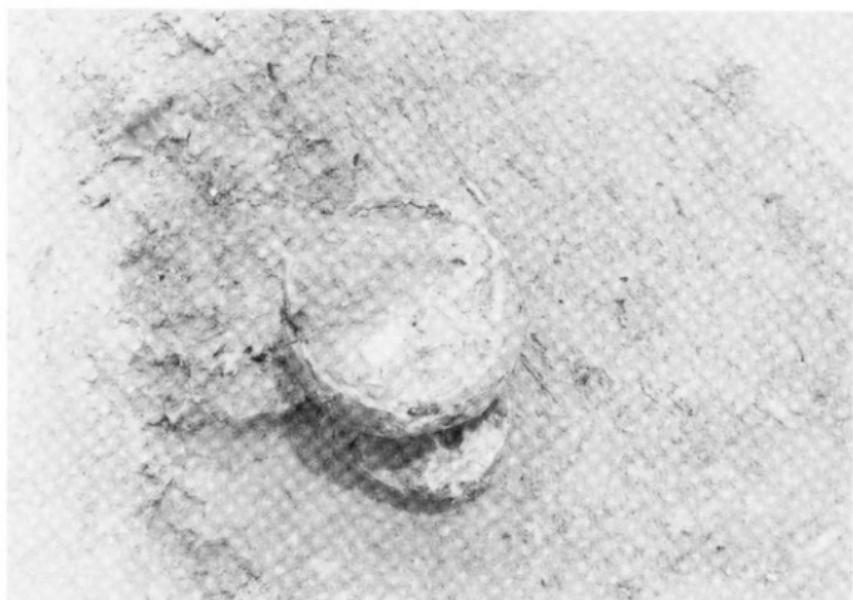
藏骨器



古墓—21



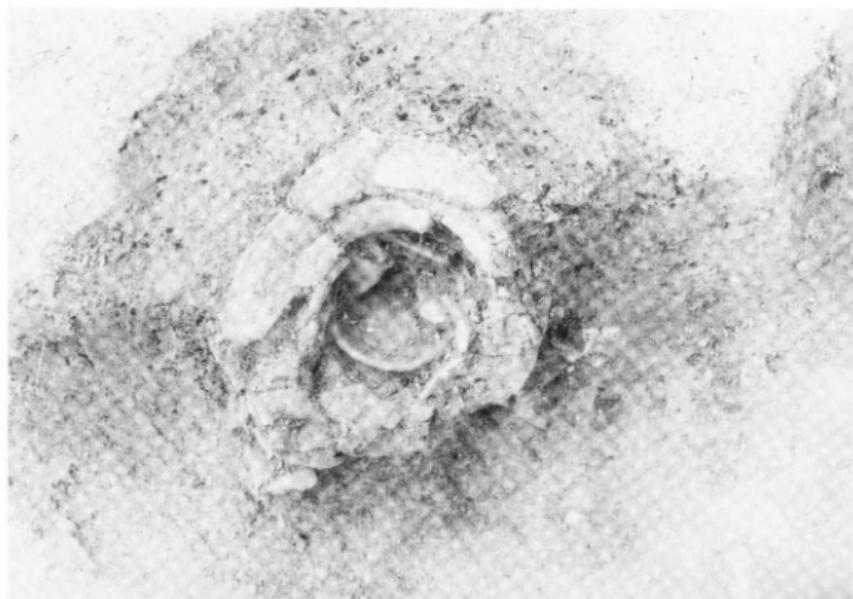
古墓—22 半掘状况



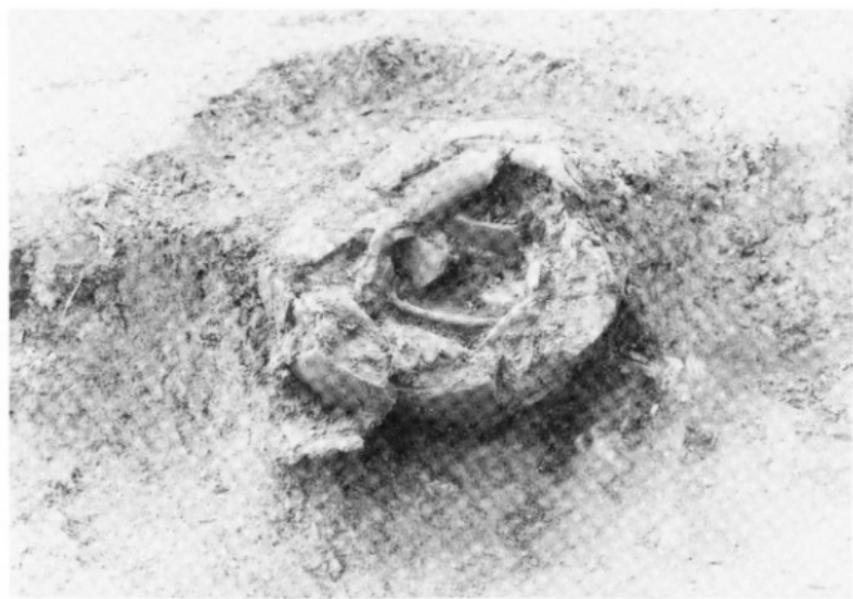
全景



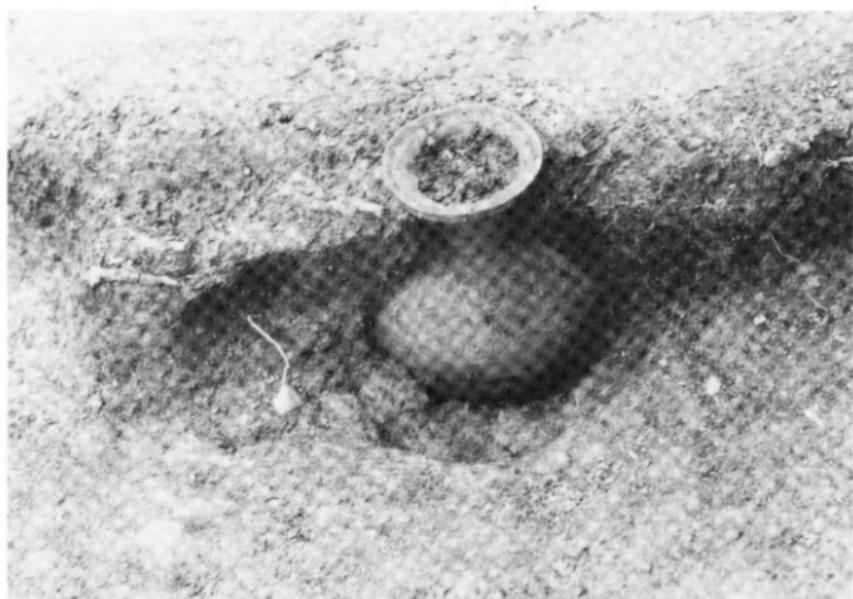
藏骨器



全景



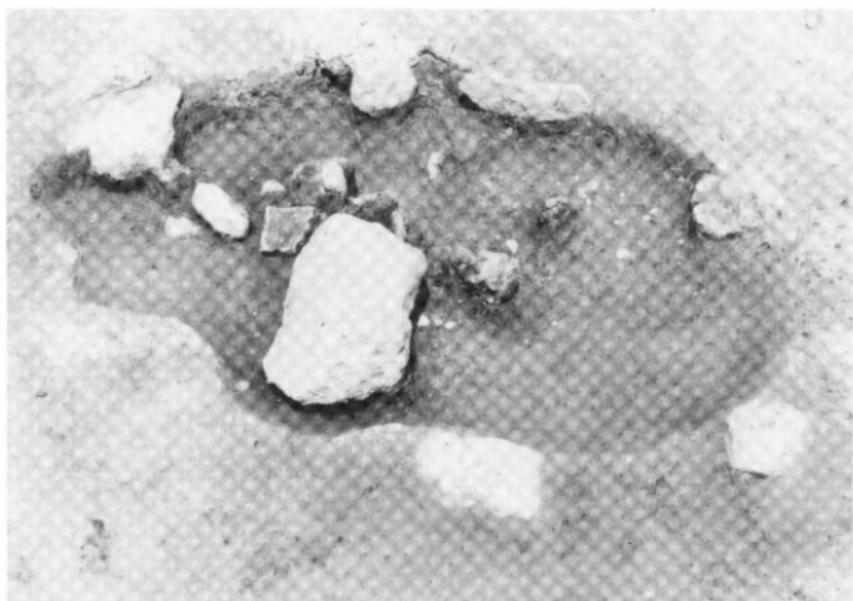
半掘状况



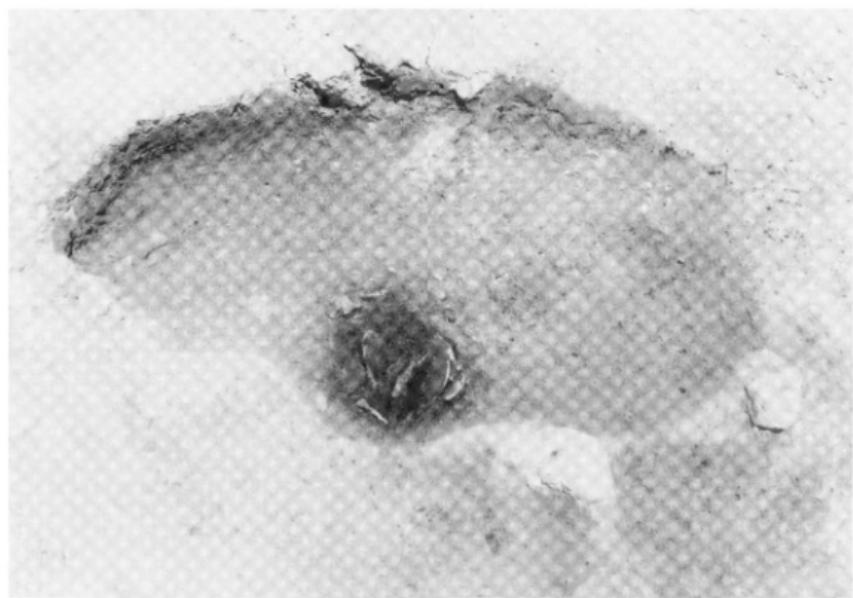
半掘状况



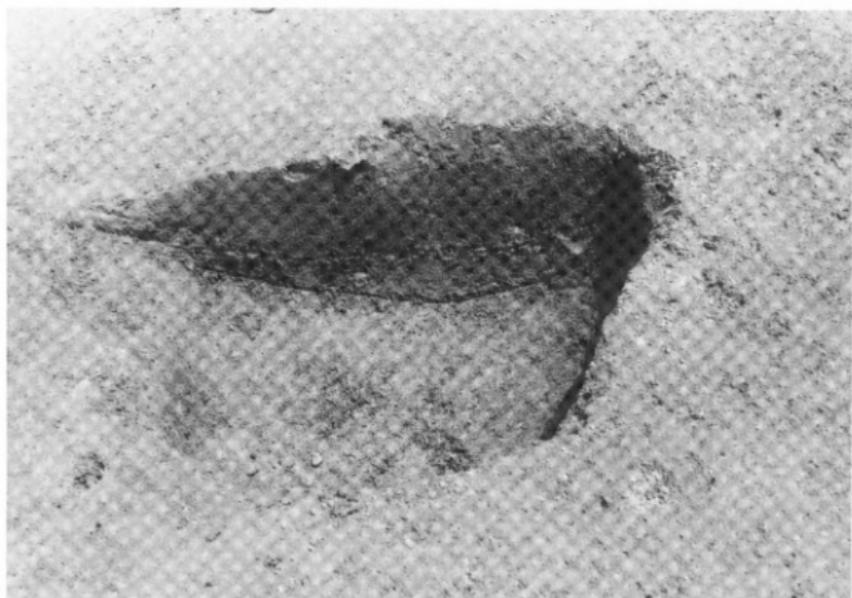
藏骨器



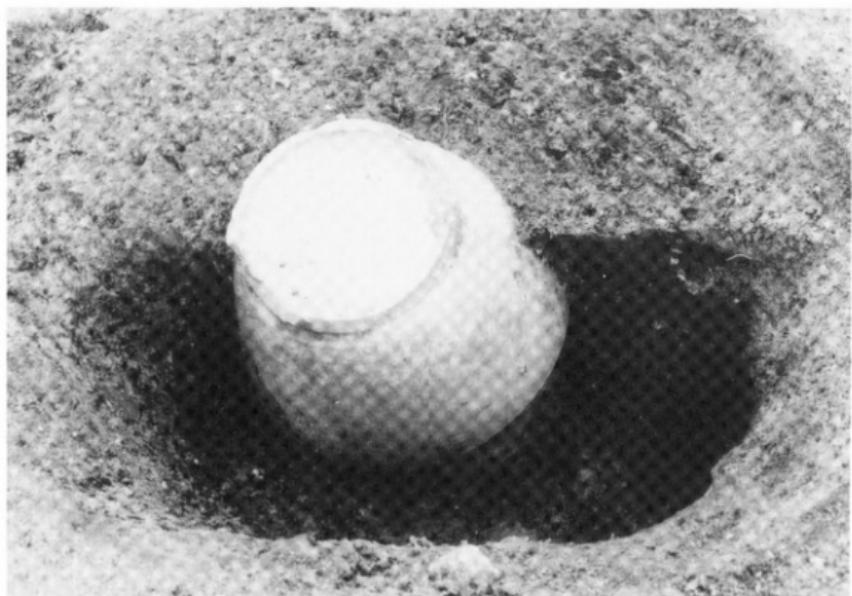
上面



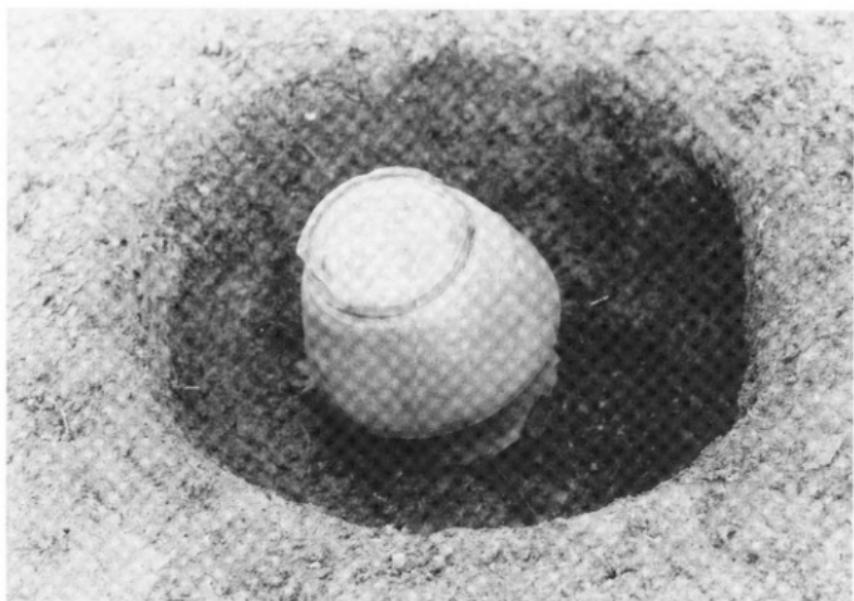
下面



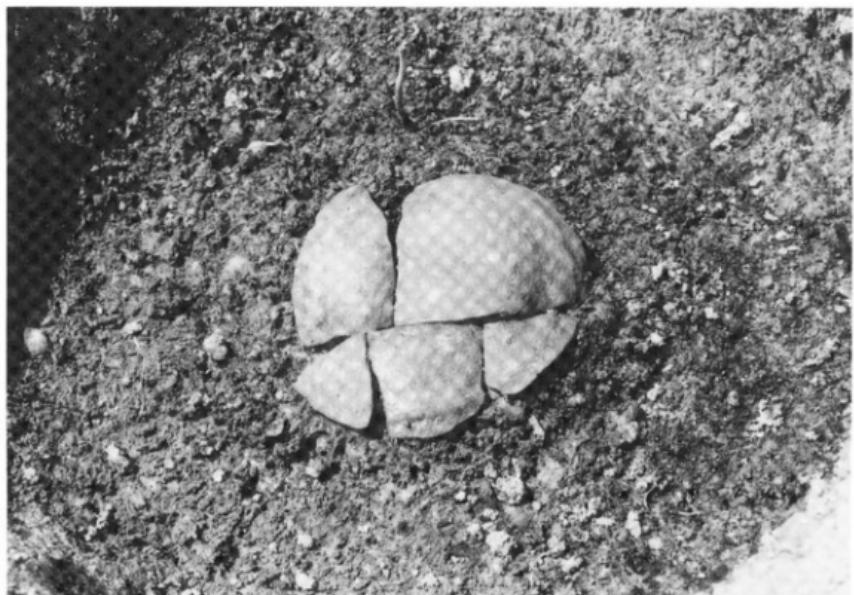
古墓—26



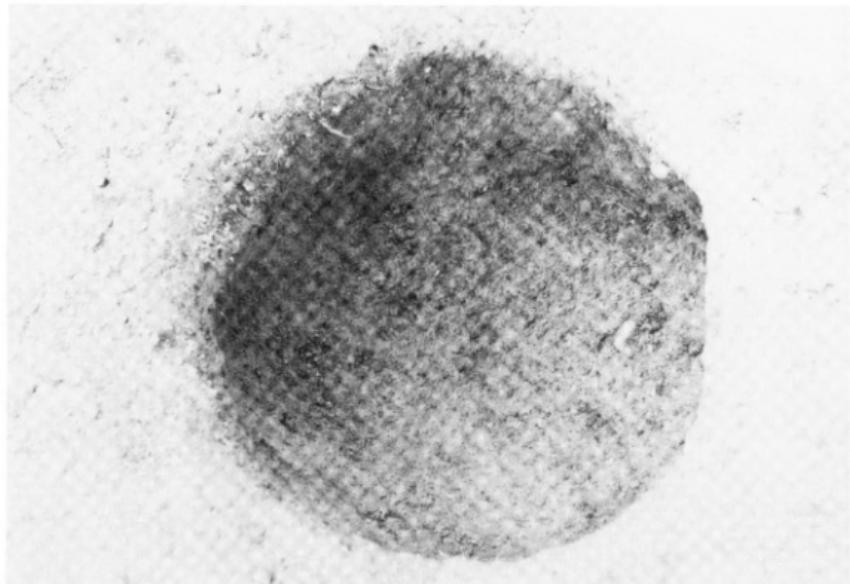
古墓—27 半掘狀況



藏骨器



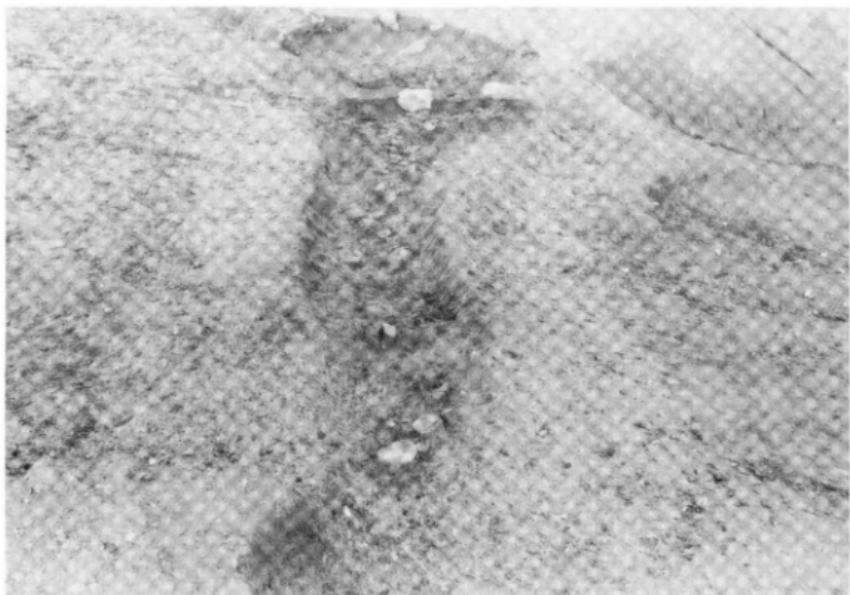
下面



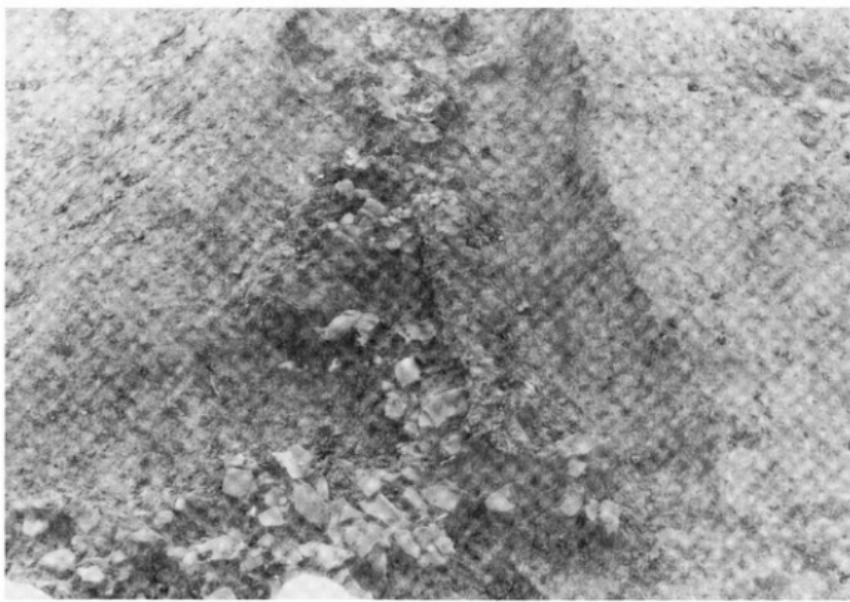
古墓—28



古墓—29



全景



遺物出土狀況



2



3



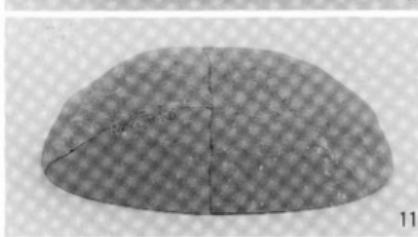
4



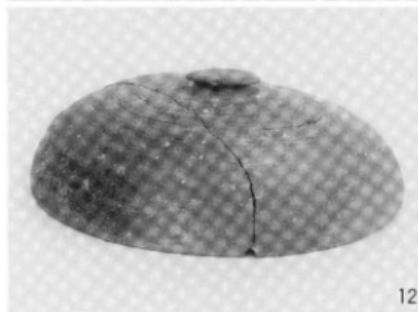
5



6



11



12



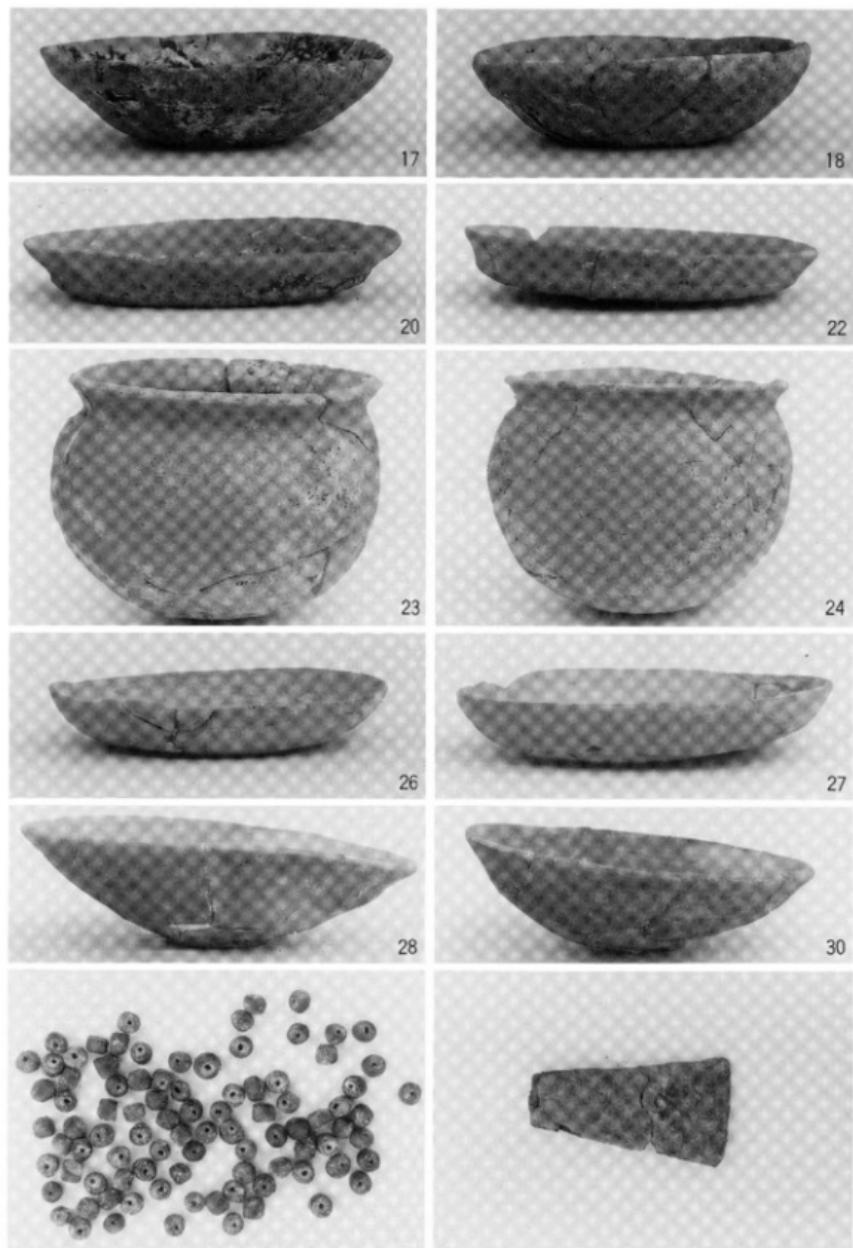
14



15



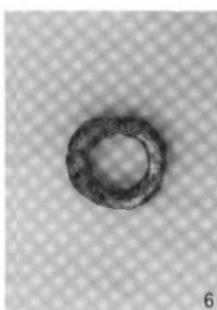
16



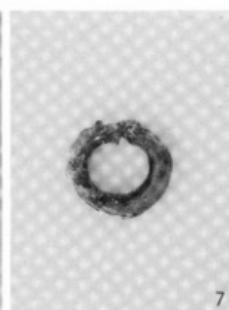
上層出土遺物・土玉・鉄斧



2



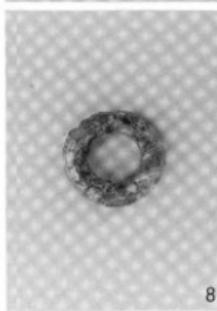
6



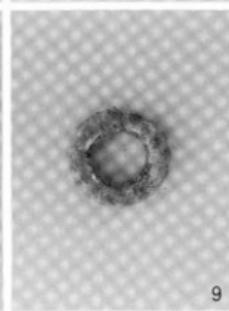
7



3



8



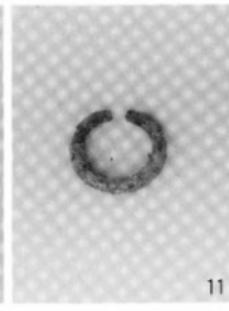
9



4



10



11



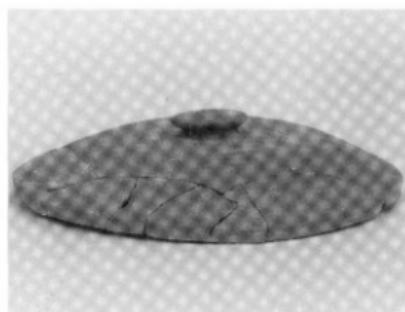
5



12

未完成横穴・土塙・土塙墓・包含層出土遺物

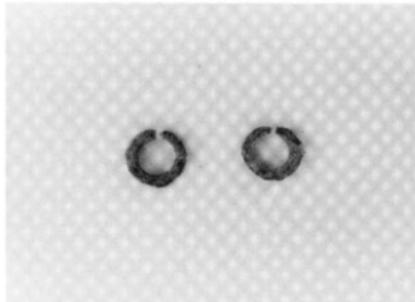
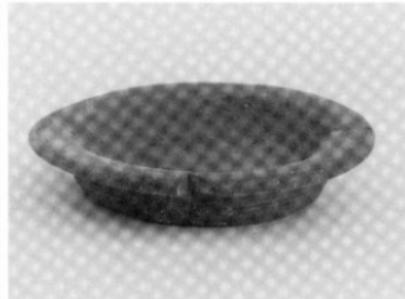
1



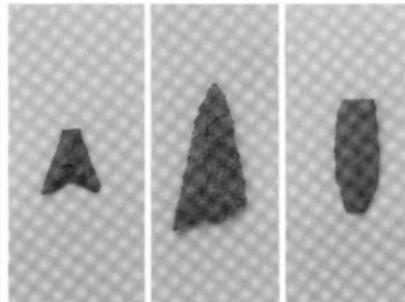
6



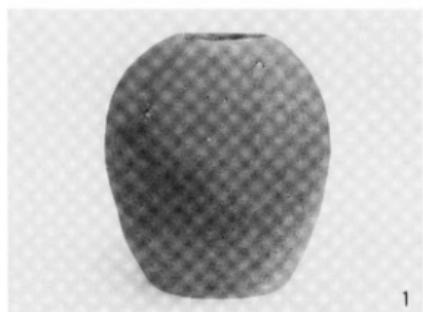
9



遺構



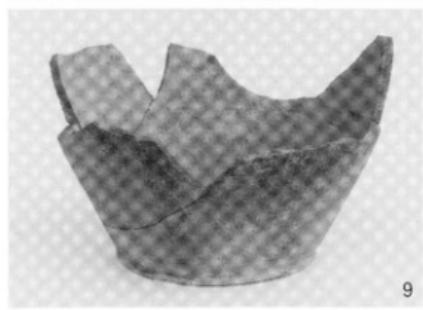
包含層



1



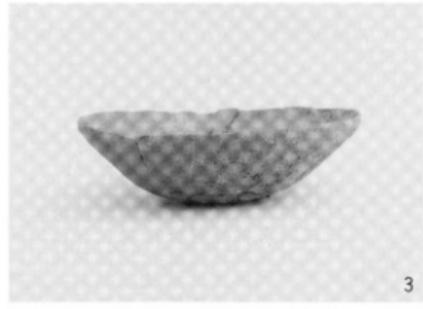
13



9



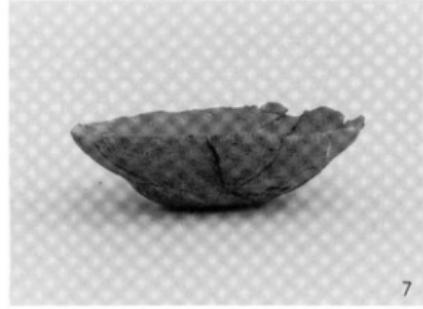
10



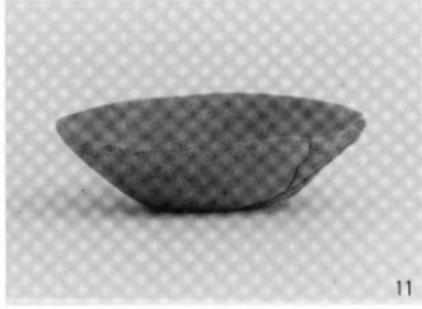
3



4



7



11

古墓-1(1・3・4・7)・古墓-2(9)・古墓-3(10・11)・古墓-4(13)



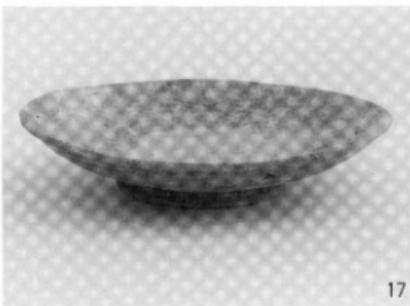
14



15



16



17



18



19



26



28

古墓-4(14·15)·古墓-5(16·17)·古墓-6(18)·古墓-7(19)·古墓-11(26·28)



32



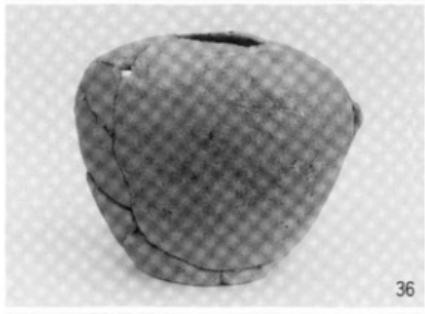
33



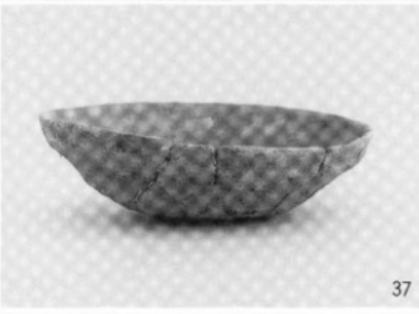
34



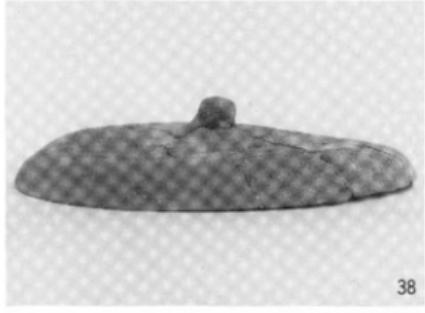
35



36



37

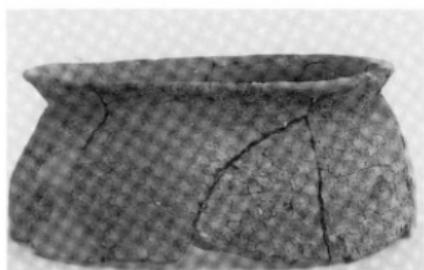


38

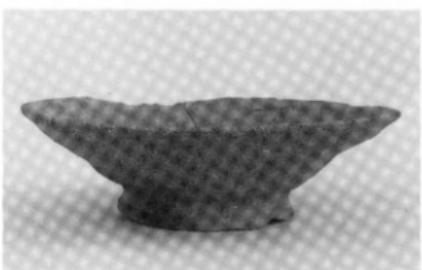


39

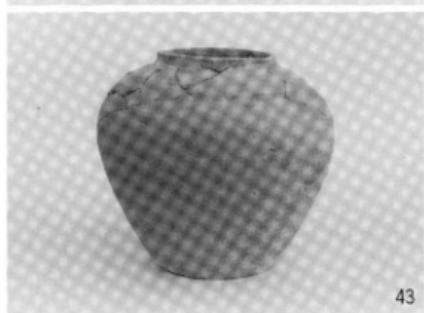
古墓-12(32·33)·古墓-13(34·35)·古墓-14(36·37)·古墓-15(38·39)



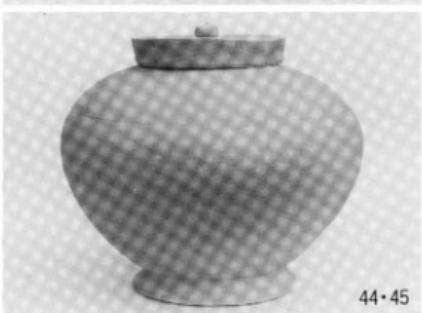
40



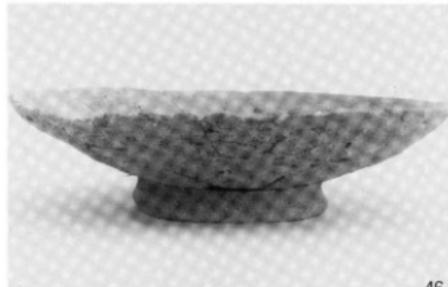
41



43



44·45



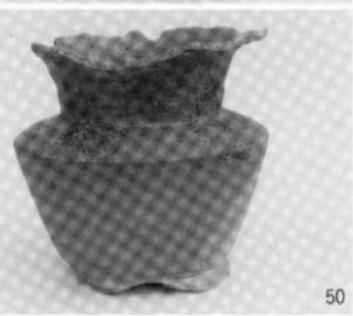
46



47



48



50

古墓-18(40·41)・古墓-19(43)・古墓-20(44·45)・古墓-23(46·47)・古墓-24(48)・古墓-27(50)



53



54



55

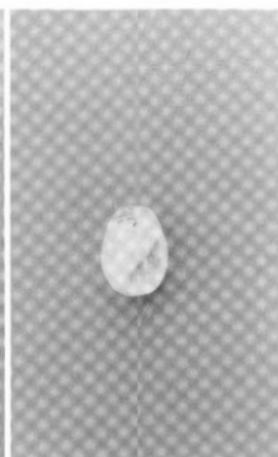


56

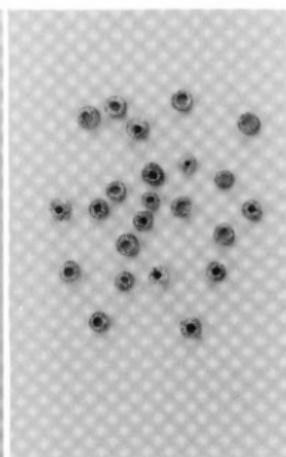
溝—1



古墓—3



古墓—11



古墓—20

高井田横穴群II

編集・発行 柏原市教育委員会
〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号
電話 (0729)72-1501 内716
発行年月日 昭和62年3月31日
印 刷 東洋紙業高速印刷株式会社

